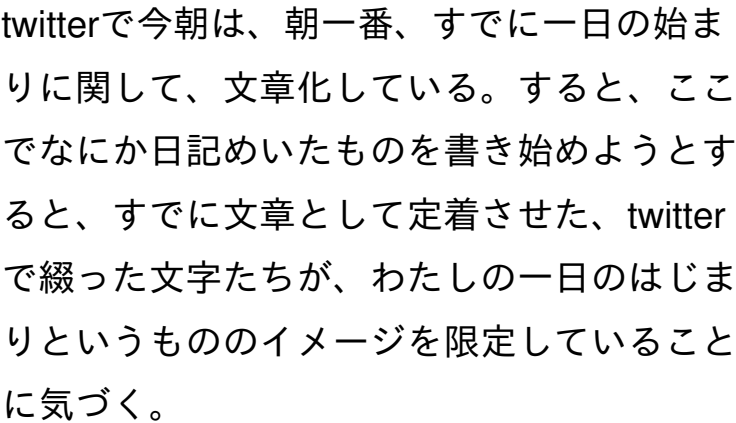


雨や霧や雪

@makeanovel



に消えてしまうはずの弦きのつもりだったのに。

後戻りしたくても、その140文字は、フォロワーに伝えられてしまったために、それを訂正したとしても、最初に発したほうのツイートのイメージはやはり残存するわけで、完全に消滅させることは不可能だ。いや、半分以上のフォロワーは早朝にタイムラインを見ていない。そのくらいのごく、早い、早朝だった。最初の呟きは。

「読まれてしまった」と考える、「自分の認識」がもう限定されてしまうのだ。

人の記憶は完璧に上書き保存はできない。

上書きしたつもりでも、以前の記憶は透けて見える。

人間は生まれたときからの記憶をずっとそんなふうに蓄積しているんだろ。透明なセル画みたいな記憶を重ねていく。昔の記憶は遠い場所にいくと、見えにくくはなるが、完全に消えることもないのだ。

一番原初の記憶だと思っていたものの下にさらに記憶を発見して気が遠くなる。

それは生まれる前や前世の記憶なのだろうか・・・。

わたしはこの先もtwitterに文字をのせていこうし、
その140文字に自分を常に限定され続けて生きていくし、書いていくことになるのだ
ろう。

そもそもインターネットになにか文章を書くようになってから、

書いたものに逆に支配される自分に気がついている。

それでも、書き続ける。どんどん、書く。

そのことの意味について、ほとんど考える暇もなく、
また、書く。今も書いている。

そんな繰り返しの果てになにかがあるのかもしれないし何もないのかもしれない。

そしてまたわたしは懲りずにここに一冊の日記帳を用意してしまったのです。



↑キッチンにワレモコウを飾りました。

というわけで個人の日記のような、その実、まったくそうでないかもしれないものをここに書き連ねていきます。。

更新する度にツイッターアカウントでお知らせしていきます。お気軽にフォローを〜♪

→ [@makeanovel](https://twitter.com/makeanovel)

10月18日（2）料理

料理が好きで、得意ではないし、むしろ下手なんじゃ？とも思われるが、食べることが好きなことに支えられて日々料理をしている。



こんなふうにご馳走感のある食卓も大好きだし、



お菓子作りは始めたばかりだからまだ下手ですが楽しいし、



小さな子どものいる主婦なので手早くできる料理を研究中で、



たっぷりゆっくり食べる朝食が大好きです。

日々の料理についてもここに綴っていこうと思う・・・。主に記録として。



津軽リンゴフレーバーの紅茶をふた匙ポットに入れて、あとは新鮮な生姜のすり下ろしも入れた。今日買ったばかりの生姜は切り口がみずみずしくて水分をたくさん含んでいる。

沸騰したばかりのお湯を注いで、しっかり紅茶の色が出たらそれを、ティファニー・ブルーが鮮やかなティファニーのカップに注ぐ。生姜の香りは冬の香りだ。

ハチミツの壺は重くって、例えばそれを落っことして子どもの頭を直撃したらと思うとヒヤヒヤするような巨大なもので、それは義母がこんなに食べないからとくれたものだ。

黄金色のハチミツにスプーンを沈めるときの抵抗。ずぶずぶと、快楽に溺れるような。

最後にシナモンをふって、冬の飲み物のできあがりだ。

普段紅茶よりは圧倒的に珈琲を飲む。

紅茶に憧れながらも、主に珈琲を飲む人生を送っている。

ただの思い込みだが、紅茶を普段飲む人は穏やかな人が多くて、反対に珈琲ばかり飲む人はせっかちで切羽詰まった人が多いような気がする。

含有するカフェインはむしろ紅茶のほうが多いらしいが、珈琲は覚醒するための飲み物で、紅茶はリラックスのための飲み物だと、わたしの中ではそうになっている。

仕事に追われて生きている時代、わたしは本当によく珈琲を飲んだ。そして飲めば飲むほど攻撃的になるような気がしていたが、攻撃性が連れてくる興奮状態はときとして、仕事のある場面では役に立つような気がして（あくまで気がするだけ）、わたしはさらにあおるようにして珈琲を飲み続けた。

一番忙しかった会社を、ほとんどクビ同然でやめることになり、

一種の鬱状態になったとき、

そういえば、毎日紅茶を飲んでいた。

一番忙しかった会社には巨大な珈琲メーカーが置いてあって24時間熱々の珈琲が飲め

るようになっていた。

家庭用の珈琲メーカーの10倍くらいある器に、専用の紙のフィルターを入れて、そこにコーヒー豆を、スコップみたいなものですくって入れる作業をわたしは率先してよくやったのを思い出す。珈琲がなくなると思うと安心して仕事ができなかった。途切れないように次の珈琲を作らなくては。

わたしは自分の作った珈琲が常に満タンである珈琲メーカーにととても近い席で、猛烈に生きていた。仕事をしていたのかどうなのか今ではよく判らない。だってクビになったのだから。ただ、わたしは、猛烈に生きていた。



あれから時が過ぎ、抑うつ状態からも脱出して、今は子育てが生活のメインだ。妊娠中と授乳中、カフェインをあまり摂らない生活を送ったあと、気がつくとなわたしはまた珈琲党だ。

今日たまたま紅茶にしたのは、

梨木香歩さんの『ピスタチオ』という最近出たばかりの小説を読んでいた影響だ。主人公の女性が、なにかあるたびに、お湯を沸かす。

紅茶を淹れるためにだ。

まだ珈琲を飲むシーンには出くわしていないし、たぶん、一度も遭遇しないのではないかな。この女性主人公は紅茶しか飲まない。珈琲はきっと飲まない。

そしたら急に紅茶を飲まなければならないような気がして、わたしもお湯を沸かしたのだった。



子どもを保育園に預けて、いったん自宅に帰り家事を済ませ、今度は駅に向かう。

化粧もほとんどせず、着飾ることもせずに、家を出てしまった。

でも。とわたしは思う。家を出ることが大切だったのだ。ひとまずそれには成功した。

だって、外出のために買ったちょっといい服を着て、鏡の前で念入りにメイクなどしたら。出産前後に太ってしまった醜い自分を直視したりすれば、それこそわたしは絶望して、外出どころではなくなってしまう。さほど容貌に自信があったわけではないが、独身時代はそれなりに着飾ったりすることに喜びを見いだしていたこともあったはずだ。

そう、遠い記憶が確かならば。

太ってしまい、皺が目立つようになった、中年の女性。そういう自分に目をつむったまま、わたしはいつまでこのままなんだろうか。うすら寒いような気分を、バタンと閉めた部屋に閉じこめて、わたしはとにかく急いで駅の改札を潜ったのだった。

とにかく外出する口実が欲しかったというのもあるけれど、大切な友人の個展を見に行くのは以前から楽しみにしていたことでもある。

電車を乗り継いで、画廊の前へ到着する。

画廊のドアは閉ざされて窓から明かりが漏れているわけでもない。会期中休みはないと聞いていたが。

わたしはカバンの中から個展の案内の葉書を取り出した。友人の書いた絵が印刷してあるそれをわたしはずっと冷蔵庫にマグネットで貼り付けて楽しみにしていたのだ。

友人の絵は一枚だけ買ったことがあって、わたしは毎日、朝も、昼も、夜もそれを眺められる生活にとっても満足していた。ただの友情を超えて、わたしは彼女の絵のファンだ

った。

葉書を見て愕然とした。

会期は来週となっていた。わたしは一週間間違えていたんだ。

いつ、どんなふうに勘違いを犯したのか、まったく判らなかった。

子育てを始めてから、いろんなことをうっかり忘れたり記憶から抜け落ちたり勘違いしたりということが頻繁にあった。

なにかをしようとする、子どもが予想外のことをするのに気をとられて、もともとしようとしていたことはずっぱり頭から抜け落ちることの繰り返しで、わたしは一体どれだけのものを失ったのか。

しかしそれでも特に不満だとも思わないし、結局失ったものはそのままだも不都合なことはなかった。

もしかすると最初から必要ではなかったのかもしれないと思うほどだった。

わたしは画廊の前で呆然と立ちつくす。道路の向こうから歩いてきた人がいかにもわたしを不審そうに眺めていく気配を感じて、わたしは我に返る。

まあ。でも。

外出できて、良かったじゃない。

子どもを保育園に預けた日は、うちで仕事をするという名目のもと、ずっと家に籠もりっぱなしだ。仕事はそれほど大量にないので、残りの時間は本を読んだり、お菓子を作ったり、裁縫をしたり。家の中にいれば、自分の現実を直視しなくてすむものね。

わたしはふらふらと歩き始めた。ここから少し歩けば、神楽坂のメインストリートに出るはずだった。おぼろげな記憶を便りにわたしは住宅街を歩いた。

そのうち新潮社のパンダの駐車場が目に入り、わたしは見覚えのある場所にたどり着いたことを知る。

せっかく出てきたんだから、おいしいご飯でも食べよう。

目に付いたお店で、鯖の味噌煮定食を注文してわたしは文庫本をひろげた。



近くの席から女の子の話し声が聞こえた。まさに筒抜けなので耳をそばだてなくても聞こえる。



「ほんとにきれいな子だったのよ。みんな振り返って見ていくような美女。でもね、妊娠して超ふとっちゃって。もう体重倍くらいになったみたいなの？ああなると、ただの人だね。どんなきれいな人でも太っちゃったら、ただの人」

ちらっとその二人連れを見ると、まだ大学を出たばかりか、下手するとまだ大学生でもおかしくないような若さだった。20歳か、少し上。

そう。そのくらいの年齢のとき、わたしもそんなふうを考えていたかもしれない。

太って醜くなってしまう妊娠や出産は、まだまだ遠い先の出来事で、自分には当面関係のないこと。

いつか出産するかもしれないけれど、今はまだ遠い未来。

あんなに太ったり醜くなったりするの、やだなあ。

でもそれはまだまだ先のことだしね。

彼女たちからはそういう、妊娠は他人事みたいな安心感が見て取れた。現代の20代前半の女性にとって、確かに妊娠はまだ他人事なんだろう。あと10年くらいは他人事のままなんだろう。わたしだってそうだった。

そのまま他人事であればよかったのか、それとも他人事のままなんかではいけないのか。

あまり考える暇もなく、35歳を目前にわたしは母になって、普段完全に幸福だと思いこんで育児をしている。

でもたまに鏡の中の自分に呆然とする。白髪が目立つ髪が乱れて、目の下に隈が出来てる。肌はカサカサに乾いていて、もう二度と消えることのない皺が刻まれてしまったことを手遅れだと悟る。

母になることは素晴らしい体験だと、声を大にして言いたいのも同じくらい、自分の姿

が怖いことがある。この太ってしまった醜い女性は誰なんだろうと。

神楽坂の坂を少しずつ下っていく。

昨日の神楽坂はとても暗かった。

降りそうで雨は降らない。

冥界に繋がるように暗いその坂道を、そうだ、わたしはずっと冥途に続く道を、生まれてこのかたずっと歩いているんだなと、ふと気がつく。

その途中に、子どもを生んだ。そのことについて、でも、わたしはそれ以上考えることができずに、飯田橋の駅に到着して、無言のまま、無表情のまま、今度はJRの改札を潜った。



あくまでもきーんと冷たい、重ねて同じ事を言うことになるが、そう、まさに、「クールな」空気に嬉しくなって、子どもを連れて普段あまり足を運ばない、少し遠い公園までいった。

2歳児にはやや難しい、アクロバットな動きを必要とする遊具がたくさんあるので母親であるわたしのコンディションが良くないときは避けてしまう。一緒になって遊具に登ったり降りたり。腰痛持ちのわたしは毎日そこで娘を遊ばせるのはちょっと無理だ。

久しぶりに足を運んだその公園には、沢山の保育園児が遊んでいて、近づいてみれば娘が週に2回一時保育で通っている保育園の年中組さんだった。

娘のことを覚えている女の子も何人かいて「〇〇ちゃん（娘の名前）、今日はどうしたの？」と駆け寄ってきてくれる。

そして一番面倒見の良さそうなお姉さんタイプの子が娘の手をひいて、「〇〇ちゃん、一緒にどんぐり拾おうよ」

と誘ってくれた。

おしゃまなお姉さん達がずっと娘と遊んでくれて、一応そばにはいるが、わたしはほんとひと息つくことができた。

娘は2歳になったばかりで、年中さんは3つ年上の子たちになる。娘もあと3年経てば、こんなにお姉さんなのか、と思うのと同時に、でもまだまだ子どもでもあるな、と背反する思い（自分の子どもには、まだまだ子どもでいて欲しい、いや早く手のかからないように大きくなってほしいという）を都合良く持ち合わせる親の身勝手さを、自嘲気味に反芻しつつ、

わたしは女の子たちのあとを追って一緒にどんぐりを拾った。

そのうち、お姉さん格の子が、「〇〇ちゃんがうちに帰ってもどんぐりで遊べるように、〇〇ちゃんのお母さんのカバンにどんぐり集めよう」と言い出してきて、子どもたちは拾ったどんぐりを全部わたしのカバンに入れてくれるようになった。

遊具で遊んでいた子たちも徐々にどんぐり集めに加わって、
どんどんどんぐりが集まる。



わたしが斜めがけにしてきた大きめのポシェットは、もうずっしりするくらい重い。どんぐりがぎっしり詰まって、中に入っている財布のお札入れにもどんぐりが詰まっているのが見えた。

わたしははしゃぎたいような気持ちだった。こんなふうになわたしも年中組の、5歳の頃、山ほどどんぐりを集めたっけ。

近所に神社があって、それは「熊野神社」という名前の神社だったので、子どもたちの間で、神社の神殿の中にクマが飼われているという噂があって、当時のわたしは本気でその噂を信じていた、あの頃だ。

境内に大きなどんぐりのなる木があって、秋になるとわたしは何時間でもそこでどんぐりを拾った。デパートの巨大な紙袋いっぱいになるまで、ひたすら拾い続けた。

神社の境内はいつも薄暗くて湿った苔の匂いがした。

わたしは、神殿の中に閉じこめられているクマについて考えながらどんぐりを拾った。神殿には窓らしきものはない。きっと朝も昼も（もちろん夜も）も暗闇の中にクマはいるのだ。出入り口はしっかり閉ざされているのでクマはこちらに出てくることはない。絶対にない。だから近くにクマがいてもわたしはちっとも怖くない。

毎日毎日その神社に遊びにいった。保育園からの帰宅途中にその神社があったせいもあるのだと思う。

でもほかにも沢山遊ぶ場所があったと思うが、わたしはその神社がとてもとても好きだった。絶対に姿を現すことのないクマの存在を身近に感じながら、わたしはひとりっきりでもよくその神社で遊んでいた。子どもの頃って、「絶対に」という言葉が本当に確かに「絶対に」だと信じることができたっけ。いつの頃から「絶対」っていうことはありえないって思うようになったのかな。

子育てをしていると、思い出すことがなかった自分の子ども時代を思い出す、あるいは思い出すことはあってもそこまで深く降りていくことのない場所までいってしまうことがある。



あの時代を追体験するなんて（わたしにとって子ども時代というのはほとんど全てが苦痛に彩られているという印象だった）、ご免だわって思っていたけれど、



娘と一緒にもう一度眺めるその懐かしい風景たちは、
案外心地がよい。

娘にとってはこれから過酷に続く人生の幼少期から大人までの時間を、
ちょっとでもマシなものに見えるように、
わたしは、そばでなにができるんだろうか。

ま、子どもが時代のわたしがそうだったように、
ほとんどの大人を信用したりしないで、
娘は娘の人生をたくましくゆくのかもしれないね。

そばで、眩しいものを見るみたいになわたしはそれを眺めているんだろう。
きっとハラハラしながら。

帰宅して、ポシェットの中のドングリを全部バケツにあけて、
そういえばわたしも拾ってきたドングリを自分で片付けたり始末した記憶がまったくないので、そうか、そういうことは母がやってくれていたんだな、とようやく30年後に気がついているのでありました。

10月23日

毎日日記も書けなかったので日の目を見てない少し前の日記などもアップしていこうと思います。これは今年の7月31日の日記らしきものです。



堀江敏幸という作家の名前は、芥川賞受賞者として、もしくは、わたしが特によく読む須賀敦子に関するムックかなにかで名前を見た…という程度に知っていて、でも作品自体は長らく読んだことがなかった作家だった。

芥川賞受賞作は「熊の敷石」というタイトルで、このいかにも地味なタイトルに騙されて、

まさかパリとかフランスとか、そういうわたしのようなスイーツ（笑）なアタマの女性が喜びそうなキーワードを含む書物を書く人間だとは知らなかった。

「熊の敷石」という渋いタイトルと、堀江敏幸という、真面目そ

うな名前（受賞したときに、例えば彼は元ジャンキーの、現在はクラブでDJをやってもいる、しかも大学教員であるとかいう少し風変わりな経歴があるという報道でもあれば興味を覚えて読んだかもしれないが）から連想するのは、

北海道などの寒冷地でひとりで孤独に暮らす猟師である老人の、熊の近くに暮らす（熊は狩猟の標的でもあり、身近に感じる隣人でもある）毎日を淡々と描いたような、そういうどちらかという、地味で起伏のない小説だった。

しかし、あるときほんの気まぐれに本屋で手にとってぱらぱらとめくった堀江氏の作品には、

パリやらブルターニュ街やらマルセイユといったような憧れをかき立てるような単語が

並んでいた。

もちろん、例えばわたしが須賀敦子を読む理由は、主な舞台が憧れの海外の土地になっているという単純な理由だけではなくなっているが、それにしても、多くの読書は、自分のミーハーな根性を少しでもくすぐる要因を持つ書物から始まることが圧倒的に多かった。

だから、老人と熊の話を書いているとばかり思っていた堀江氏の書物にまさか、こういうわたしの浅はかな少女趣味をくすぐる単語が並んでいるとは！と驚いたし、今まで読んでこなかったことが少々悔しかった。

そして、その場で「郊外へ」を買い求め読んでみたわけだが、実際には、キラキラ輝く花の都パリのミーハーなガイド本にもなりうるようなエッセイではなかった。無論、芥川賞作家の書くパリであるからして、そんな単純なうわべだけの本であるわけがないし、たいていの小説好きは（特にわたしは芥川賞作家を好む傾向にある）、その一筋縄ではいかないだろう「なにか」、冥くて儚くてねじ曲がった視線で書かれているだろう世界を期待して読むものだ。



須賀敦子の本だって、憧れのイタリアについて書かれている…と、手にとってみれば、そこにはただ明るいだけじゃない味わいの文章世界が広がっているから、だから、また次々と読みたくなるという経験をしている読者は多いのではないかな。

さて、そんなふうにして出会った堀江敏幸の本だけど、それにしても、わたしの唯一知っているパリについて、こんな場所で再会するとは思っていなかったし、誰かがこのパリに焦点をあてて書いている



可能性について考えてみたこともなかった。

「知っている」などと少々見栄を張って書いたけれど、わたしが知っているというのは、
そういう場所があったのか、という圧倒的な一度きりの体験による印象のみである。
初めてのパリは、初めての海外旅行でもあった。一週間でパリとロンドンを駆け足でまわる添乗員付きのパッケージツアーというのが、海外初体験だった。コンコルド広場に面した大きなホテルに泊まって、エッフェル塔や凱旋門などの観光地を、添乗員のあとをぞろぞろついてまわって眺めた。ほとんど思い出が残っていないし、写真にエッフェル塔と一緒にうつっているまだ若いわたしがあるだけだ。

二度目のパリは、一応個人旅行だった。30歳を過ぎて無職になっていたわたしは、日本を発ちローマに入り、南イタリアを3週間くらいうろついたあと、最後の一週間で過ごすためにパリに入った。チケットはパリアウトというものにしたのだ。
そのひとつきの旅は、ドミトリーなどを渡り歩く、いわゆるバックパックをかついた貧乏旅行で、わたしはパリでも、相部屋のドミトリーを予約していた。
どちらかというといタリアをメインに組んだ旅程だったし、パリは最後の骨休めくらいにしか考えていなかったのも、そのドミトリーが一体どんな場所にあるのかもよく知らないまま、安さだけに惹かれて予約をした。韓国人の女性が経営する日本人だけを客としたドミトリーといえば、知っている人も多いのかも知れない。
指定された地下鉄駅に着いて地上に出てみると、そこはいかにも、なパリではなかった。

街並みは雑然としていて、道をゆく人は、白人よりも有色人種が多い。
そして、パリの中心部にだけいるとそんなものが存在するとはにわかには信じがたい、無機質なコンクリートでできた集合住宅の群。

一応、19区だったか、〇〇区に入っているのも、東京23区内とでもいうような感覚でいた。

しかし東京23区にも中央区と板橋区の差があるように、ここ、パリでもどちらかといえばこの19区は移民を中心とした人間の棲む、ほとんど郊外とでもいう場所だった。わたしはドミトリーのあたりの風景を見て、ガッカリした…ということはなかった。なんだかむしろ安心した。

それまでおとぎの国のようなアルペロベッロやら、魔窟みたいなマテーラという、現実離れした街にばかり滞在していた。ローマでの宿泊先も、テルミニ駅のすぐそばの賑やかな場所にあるドミトリーだった。ずっと夢のなかを歩いているような感覚。人の棲む場所というよりも、舞台の書き割りの中を演じる役を持たないままおどおど歩いている…。

しかし、このパリの19区は、人間が棲んでいる感じがした。

人々はスーパーでより安いものを買い、粗末なテーブルと椅子で日常的な食事をしている。

テラス席で昼間からシャンパンを傾けて生のオイスターに舌鼓を打つ…と言う人種はみかけない。

その19区から地下鉄に乗って、中心街にいった観光らしきことをしていたが、結局わたしはその旅から戻って、

思い出すのは華やかなシャンゼリゼ通りではなくて、

ドミトリーのそばの、庶民的なパン屋や、薄汚れたベトナム料理屋のことばかりだった。

でも、その郊外に「魅力を感じるから」、そのあたりの記憶ばかりが蘇るとはなかなか納得できなかった。

パリにはもっと見るべき物がたくさんあったし、記憶に残るなら、あの壮麗なパッサージュの中の古い芸術写真を扱う店先だったりするべきなのだった。

どうも釈然としないパリでの一週間を、あっという間に解放してくれたのが、この堀江敏幸の「郊外へ」という書物だった。

要するに、郊外には魅力がある。

そう言い切っているこの本に、ぎょっとしはしたが、でも腑に落ちた。

な—んだ。だからわたしは19区のことを忘れられないのか。と。

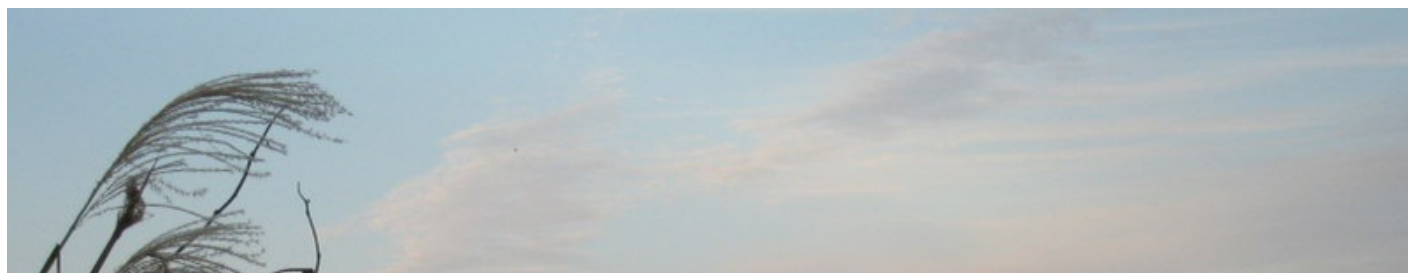
というわけで（ここでいきなり端折る…）、

堀江敏幸の本をなるべく沢山読もうと思っているこの夏。

これがわたしの2010年夏の課題図書です。



少し前に秋の北陸の海沿いの宿に泊まったときの写真をお届けします。
単にわたしが少しのあいだ実家に帰って、最後の3日間だけ夫も遊びにきたときに宿
をとって、おいしい魚を満喫してきたのです。





宿に着いたのはちょうど、こんな薔薇色とすみれ色の夕暮れ時。

海は静かで（そう、この湾は冬でもとても静か。日本海の、あの、岩に砕ける波のイメージとはほど遠いのです）、まるで湖のようでした。



部屋の窓からは海しか見えません。

明け方目を覚ますと藤色の天と海の見分けがつかない世界に、漁船が、緑の硬質な一粒の光をぴかーーーーっと放っていて、この世の光景とは思えませんでした。そのときの写真がないのが悔やまれます。呆然と見とれていて、はっと気づいてカメラをとりについて戻ると、ちょうど漁船は灯りを消していて、奇跡のようだった海の色ももう変化していました。



宿から1時間くらいドライブして、能登島にある水族館に行ってきました。



星に沈む島

この薄っぺらい青空を引き剥がして、深遠なる宇宙を見せてくれ。

そんなふうに毎朝、通勤電車で叫び出しそうになっていた頃に、駅でみかけたある島のポスターの写真が妙に気になりだした。ああ、ここの空はきっと重いほどにたっぷりと色を含んでいるのだろう。宇宙と青空がつながっている場所。南の島に憧れるなんて、学生気分の抜けきっていないミーハーなうちの女子社員どもみたいだな、と呆れつつ、俺には暇はないが、金だけはあるんだと気がついて、その三連休だけは熱で倒れたと会社に嘘の電話を入れて、あとは携帯を切ってしまうと思った。

勝沢は飛行機の中ではひたすら眠りに眠った。時々、高速で移動する彼の体に何かが拒絶を起こして、気持ちの悪い夢が栞のようにずっと差し込まれてはまた引き抜かれていくらしく、短く瞼に痙攣が走った。迷った末に電源を切った携帯をそれでも荷物に入れた自分はまだ壊れていないと思った。癒しとかそんな言葉には反吐が出ると思っていた。勝沢は働くことが好きだったし、事実、仕事に没頭していた。それが、ありがちなパターンだと自分でも笑ってしまうが、妻が家を出ていってしまったその日きっかりに何かが狂いはじめた。いいか。妻が出たから動転するのはごく自然な反応だ。自分に言い聞かせた。そしてそんなときも冷静さを保つことに心を砕いている自分を、またさらに冷静な自分があざ嗤った。

島に渡るにはどうすればいいのか？インターネットで調べたらあっけなく答えが出た。最寄りの大きな島へ飛行機で渡り、そこから出ている高速艇に乗ればよい。

着陸ですのでリクライニングを起こしてください。微笑む客室乗務員が、妻の顔に見えて、勝沢はねぼけた頭で彼女をかき抱きたいと思った。一瞬後に覚醒した彼は、妻の笑顔はこんなによそよそしかっただろうかと考えて少しぞっとした。

離島へ船が出ている栈橋へタクシーを飛ばした。

チケット売り場で行き先を告げて「ああ、その島の便は欠航です」と答えが返ってきたとき、勝沢は、へなへなと座り込みそうになった。はりつめていたものが崩れていく。

「お客さあん、すみませんねえ。風が今日は強いんですよ。近くの他の島への便なら出ていますよ」という声が背中を追ってきたが、勝沢はよろよろと店を出た。

とにかく一服しよう、と棧橋のベンチに腰を下ろした。お客さん注文は？と女が声をかけてきた。この南の島ではベンチに腰を下ろすにも金を取るのか？と苦々しく思いながらも「ああ、何があるの？」と努めて冷静に尋ねた。そして生ビールを注文した。ビールを飲みながら、まあこんなものかもしれないな、と思った。あの日から何もかもがうまくいかないのだから。日差しは強烈に強く空は晴れ渡っているが、確かに風が強くて、火を点けるのに苦労した。「なあ、灰皿使いな」とその青年が声をかけてきたとき、勝沢はビールに酔ったのかやたら素直にその貝殻の灰皿を受け取った。そして青年の持っているバインダーに目が釘付けになった。その島の名前があったのだ。T島青年会報告書と書いてある。「君はT島の人間か？」勝沢の声は掠れ気味だった。「そうだよ」青年は素直に答えてくれた。「でも今日は欠航だろう。どうやって帰るの？」という勝沢の問いに青年は「自分のモーターボートに欠航なんてないから」とあっけらかんとした声を出した。

勝沢は「金はいくらでも払う。その島と一緒に乗せていってもらえないか」と咄嗟に頼んだ。「うわ。いくらでも払ってくれるの。すげー」と青年はおどけた。「これは冗談じゃないんだぞ」勝沢はほどんど声が上擦っていた。「金はいらないけど、少し待ってもらおうよ。今こっちに渡ってきたばかりなんだ。用事が済むまでここでビールでも飲んでいて。島には乗せていってあげます」青年はにっこりと微笑んだ。

結局三杯目のビールを飲んでいるときにやっと青年は戻ってきた。たっぴりと熟した陽が今にも海に落ちそうだった。

「待たせたかなあ」青年はそう言いながら舳い綱を手繰り寄せた。もう観光客は見あたらず、地元の間が掃除をしているのがちらほらと見られるくらいだった。

船は海へ滑り出した。波が高く、ばん、ばんと強く海面に叩きつけられるのが最初は怖かったが、そのうちそんなものには気をとられなくなった。

残照の朱色が宵闇ににじんで、それが水平線の一直線上にマグマのような不気味な迫力で、めらめらと鈍く光って連なっている。

黒い海、黒い空、朱色の夕陽の名残の帯…。

地獄との境目のような景色だ。地獄という場所は、きつとこういうグロテスクになる一歩手前の、迫力に満ちて懐の深い、蠱惑的な美しさに染められているのかもしれない。

悪魔的な美。ならば、俺の今までの地獄におとされそうにひどい渡り方をしてきた人生も、まあ、あれでよかったかな？と思えてくる。きつと、地獄は、天国と正反対な方向に、しかし等しい深さで美しい場所だ。それならば、俺には地獄がお似合いかもしれない。

この不気味に美しい暗闇の中で、贖罪する。でも、なあ、本当に俺は地獄を選ぶつもりなのか？そんな迷いに気がついた時、黒々とした島影が現れて、そのころにはすっかり日が暮れていた。しかしさっきまであんなに晴れていた空は雲っていて星は見えなかった。

「おじさんさ、どこの宿に泊まるの？」

「S荘さんという宿にインターネットで予約を入れてある」

「つくづくおじさんついていないね。Sさんちの奥さん、今朝産気づいてさっきまでいた島の病院にいっちゃって臨時休業だよ」

「臨時休業？そんなことって」

「あはは。よかったらウチに泊まらない？ 一人暮らしなんだ」

「いいのか？」

勝沢はなんだかこの青年に不思議な親近感を覚え始めていた。

T島の栈橋にワゴン車が停められていて、それに乗り込んだ。地味な色の車だが、確かこの車は相当な高級車のはずだ。と、勝沢は気がついた。

青年の家は一軒家だった。この地方独特の平屋建てというとは分かったが、あとは暗くてよく分からない。

「今、風呂を入れてくるから先に飲んでて」と青年がビールを出してきた。

部屋を出ていった青年を、おそらく三十歳になるかならないかだと判断して、部屋を見渡すとパソコンがやたら何台もあることに気がついた。一台が起動していて、ふとマウスを動かすと、株式のチャートがディスプレイに浮かび上がった。それは勝沢が見慣れていた、そしてまさに逃げてきたはずのものだった。

「ああ、パソコンたくさんあるでしょ」青年が照れたような声を出して部屋に戻ってきた。

「株が趣味なのか」

「というか、この島でほかに職業があると思う？それで食べているけど」青年は面白そうに笑った。

「俺はP証券に勤めている」勝沢は正直に打ち明けた。

「そんなところかなあと思っていた」青年もビールを飲みはじめた。

「株は面白いか」勝沢は尋ねた。

「大学では天文学をやっていたんだ」青年は言う。

「星の近くで暮らしたいとこの島に移住することを思いついた。恋人と別れてこの島へやってきた。食べていく術を考えた。株の勉強に没頭した、というわけ。株なんて別

に面白くない。食べていくためだよ」

「そうだな。食べていくためなんだ。所詮お金とはそんなものだよな。でも恋人はこの島についてくるとは言わなかったのか」

「試しに一週間滞在してもらった。私には無理だと言われた」

「俺は女房とは十年以上うまくやってきたつもりだった。でも彼女は出ていった」勝沢は酔っぱらってくだを巻いているようでみっともないな、と思いながらも話をした。

「明日の晩はきっとよく晴れてものすごい星が見られると思う」青年は言う。

「俺は優秀なトレーダーのつもりだった」

「きっと優秀なんだろうね」青年はどこまで本気かわからないような口調だったが、かかっているわけではなさそうだ、と勝沢は解釈した。そこでふっと気が抜けた。

「今は星を見たい」勝沢は言った。

「うん。明日の晩だね」青年はビールを旨そうに飲んだ。

妻に、株ってそんなに面白い？と聞かれたことがあったような気がした。

そして、星を見た後、妻に電話をかけよう、そう思った。なにかが簡単に変わるとは思えなかったけれど、星を見た、とただ彼女に伝えたかった。

おわり



ルピシアから毎月送られてくる「ルピシア便り」に同封されてくる、ティーバックとリーフティーの2種類の試飲のお茶を目当てに、年に一度は3000円以上分のお買い物をして「ルピシア便り」を継続させている人は多いのではないかな。

わたしもその1人で、普段お店に行くときは50グラム入りの茶葉を一袋、多くてふた袋買う程度だが、この「ルピシア便り」を頂きたいがために、年に一度は3000円の買い物をしているようなものだ。（普段3000円以上分の買い物する価値がないというわけじゃなくて、その季節のお茶をその都度少しずつ買うのでいっぺんに3000円分にはなかなかならない）

こないだ、珈琲党、紅茶党という話をこの[電子書籍でやった](#)と思うけれど、あのとき梨木香歩さんの新刊「ピスタチオ」を読んでいて、きっと主人公は珈琲を飲まない、と書いた。

しかし、結局それは間違いだった。物語が大きく展開する少し前くらいに、主人公は珈琲を飲んだ。訂正というわけじゃないけれど、ここに書いておきたい。

わたしはしかしそれを意外には思わなかった。少しずつ読み進めていくうちに、紅茶だけを偏愛するタイプの女性、というふうにも思えなくなってきたのだ。

主人公の棚（たな、と読む。）は、フリーライターで、「棚」という名前は彼女のペンネームだ。ものを書く仕事をしている女性、というところと、3人称で語られてはいるが、どこか現実の編集されていない生身の声としっかり手をつないでいる気配を感じて、主人公は梨木さんご本人のイメージと時々ダブる。もちろん作家の書いた人物が、作家そのものではないかと邪推することは、ばかげたことではある。でも同時にそういう読みかたを、ときどき織り交ぜてしまうのもまた本を読む人間の多くがやっていることだと思う。違うとは知っていて、わざとそんなふう読み、作者の視点と主人公の視点と自分自身の視点をどこかで交わせ、物語に少しでも近づこうとするから、かもしれない。



わたしは、幾度か、これは梨木さん自身の体験なのだ、ということをほとんど信じて読み



進め、（もちろん無意識のうちにそう信じ、なかばまた無意識に、これは小説なのだからそんなことはないと思いいなおすことを、繰り返しながら）、

読者というものは、一体、どんなふうに本とつきあうのがいいのだろうかということを考えていた。

梨木さんの本がすごく好きなので、出ている本は全て読んでいるし、特に好きなものは繰り返して読んでいる。

ご自身の体験について書かれたエッセイを読んでいるうちに、相当詳しく、梨木香歩という人について「知っている」感じになってくる。

その「知っている」感じを持ち合わせながら、小説も読む。

また反対に、梨木香歩という作家の書く小説を何度も読んでいる体験を持ち合わせながら、同じ作家の書く現実の話（エッセイ）も読んでいる。

物語と現実はとけあって響きあってわたしの中に、複雑な定着の仕方をする。

読む度に、新しい発見をする、というのが古い記憶に塗り重ねられて、いよいよ使い込んで手放せない毛布みたいに（幾度も洗濯して、最初の色はわからないくらいになっているし、独特の匂いを放つ）、自分の歴史と分かちがたい、ほとんど自分の一部になって、その読書体験がわたしの中に存在する。

こんなふうに自分と一体になって生きているような本たち（またはその作家自身）と出会うことの幸福について、空恐ろしいような気分で、ありがたく思う。

救われた、とか書いてしまうと薄っぺらくなる。

ただ、ひたすらに何度も何度も読む機会を与えてくれて、ありがとう、という、今はそういう言葉しか出てこない。

須賀敦子や、水村美苗、多和田葉子など、

同じように繰り返し読んでいる作家たちについても、

いや、作家自身ではないのだ、その本たちだ。

本たちに、

今はドライな感じで「ありがとう」と述べておく。

感涙にむせび「ありがとうございます」という感じじゃない。

あくまで、距離を取って、ぶっきらぼうに、「ありがとう」だ。

そのくらいの距離を取らないと、これからつき合いにくいから。

きっとこれからもずっとつきあっていくことになる本たち。

残念ながら須賀の本は、もうこれ以上新しいものを読めない。

でも、出ているものだけ、どこまでも繰り返し読むことが出来ると思うと、ほっとする部分もある。翻訳された詩や、文学論など、まだしっかり読みこめていないものも沢山あるのだから。

今朝は、ルピシア便りに一緒に送られてきた「紅子」というお茶を飲みつつ、ノエルの雰囲気いっぱいルピシア便りを読んでいた。

縦の木に金色の星、赤いキャンドルにともるあたたかい炎、大粒のイチゴが贅沢にのったケーキ、賑やかなクリスマスの、ティー・パーティーの写真を眺めつつ、クリスマスのお茶はどれを買おうかと迷う。たいてい毎年「ホワイトクリスマス」を買うのだけれど、ホワイトヨーグルト風味の「ジングルベル」も飲みたいな、と、頁をめくる。

梨木香歩さんの物語の主人公たちは、

丁寧に淹れた紅茶を飲むけれど、

完全に風の遮断されたあたたかな部屋だけで過ごすタイプではない。

冷たい風の吹く外にどんどん出て行ってしまう。

勇気があるというよりも、大切なものを見つけるために必死なときに、例えば行き先は安全かどうかという付随する情報を集めてあたふたするよりも、なにをすべきかという本質に耳を澄ませることに集中して、不必要な心配をして騒ぐことがないだけだ…。

以前新聞に掲載していただいた小説です。短編。原稿用紙10枚。

なにもかも

点滴のビニールパックの中の、すきとおったぶどう色。

病室の、シーツや壁やカーテンにいたるまでの白という白は、全ての輪郭をくっきりと完璧になぞらえて際立たせ、私のささくれだった神経を逆なでた。真っ白なシーツのひだの一本一本にさえはりつめたものを感じた。

だからといって、目をつむれば底のない暗闇の沼にゆっくりと沈んでいくようで不快だった。

ただ、そのぶどう色だけが、唯一淡く、曖昧ではかなげな、たぶたぶとした液体のやわらかさをたたえ、それは私の気に入った。ビニールパックには日付や私の氏名が、メーカーで几帳面な筆跡で記してあり、ぶどう色をすかして裏側から鏡文字になって読めた。

夜になっても眠りは訪れなかった。

個室ではあったけれど、ナースコールを押した後に返ってくる金属的なマイク音をこの静寂に響かせるのがためらわれたし、昂ぶった気持ちを鎮めるためにも気分転換を兼ねてナースセンターまで出向くことにした。

暗く長い廊下の一番奥、ナースセンターはこうこうと明かりを放ち、トンネルの出口のように見えた。

痛みのせいと、普段から睡眠剤を服用しているので眠られないと申し出た。

たまたまその夜、当直だった私の主治医がやってきて、

「事故による内臓の損傷がまだはっきりと検査結果にでていないのです。新たな異変の兆候を見逃さないためにも、睡眠を促すような薬剤や鎮痛剤の投与はできません」と淡々とした口調で説明した。

医師は昼間見たときより、髭がのびたせいか幾分老けた印象がしたもの、歳は私といくらも変わらないようだった。

三十代の半ばにさしかかったところだろうか。

カルテをめくる音がさらさらと響く中で、私は医師の瞳をじっと見つめた。

目を離せなかった。医師は、そんな私を別段不審がるふうもなく、目をそらさなかった

。

しかし私とは別のものを見ているような遠い目をしていた。

それは疲れてぼんやりしているのとは違う、何事にも執着しない恬淡とした、まっさらな目だった。

私は今までこんな目を見たことがなかった。夫の目はいつも狡猾に光っていたし、第一彼とは、最後に目を合わせたのがいつか思い出せなかった。

私は医師にお礼を告げ、闇に沈んだ廊下を、可動式の点滴台をきゅるきゅると押しながら病室へとひきかえした。

事故直後の激痛は治まっていたものの、鈍く続く痛みのせいもあって、結局一睡もできなかった。

下腹部を打撲したので、腸の安静をはかるために食事も禁じられていたが、もとより食欲はなかった。

ぶどう色の液体が私に栄養分を二十四時間細い管と針を通して運んでくれた。

ビニルパックからぽたぽたと雫が落ちて長い夜の時を刻む。

そのささやかな気配が針のささった腕の小さな穴にしみいる。私の血液とぶどう色の液体が混ざり合う。

私はぶどう色の液体の中に浸かりきって、ゆらゆら漂う自分を想像する。

そうすると痛みが少しやわらぐ気がした。

ふと私は思い当たった。さっき、主治医の先生の瞳を見つめ続けたこと。

普段の私は、それが誰であれ、相手の目を見て話すことすら苦手なのに。

彼の、やや茶色がかった瞳の、その少しうるんだ加減や静かに光を放つやわらかみが、ぶどう色の液体に似ていたのだ。色そのものではなく、両者の質感や雰囲気私のまぶたの裏でぴたりと重なり合った。

ふと、あの医師の名は何というのだろうと思ったが、昼間、錯乱状態で病院へ運び込まれた時に聞いたであろうそれを思い出すことはできなかった。

「あの女と会うのなら、私を轢き殺していけば？」私は車の前に立ちはだかり叫んでいた。

嫉妬はとうに通り越していた。ただ意地だけが、私にねばっこくからみついていた。

「やめなさい。近所中に聞こえる」

夫は苛々した口調でそう告げて、アクセルを踏んだ。

ドンという衝撃と、涙と血でべとべとの自分の頬に、アスファルトがざらざらと冷たかったのを覚えている。

物陰から様子を窺っていたマンションの隣の奥さんが救急車を呼んでくれたらしい。奥さんは私の夫のことは警察に通報したと教えてくれた。夫は病院に姿を見せなかった。警察の人がやってきて事故の状況を形式的に尋ねていった。

実家の両親には連絡を入れていなかった。夫の浮気すら黙っていたのだから、今回のことを何からどう説明すればいいのか、考えただけでうんざりした。病院についてから、レントゲンだの超音波だのCTスキャンだの、諸々の検査で私は充分疲れきっていた。

次の朝、主治医の先生が回診に訪れたとき、またも私は不躰なほどに彼の瞳を凝視した。まばたきするのさえおしくて、眦に涙がにじんだほどだった。痛みが昨日よりやわらいだと告げると、先生は「ひとまずは安心ですね」と聴診器を胸ポケットにしまった。

「あれから眠られましたか？」

先生はわずかに目元だけで微笑んだようだったが、私の気のせいだったかもしれない。

「いいえ、昨晚も言いましたが普段から睡眠剤を常用していますので」

「そうですか。もう少し様子を見て、経過が良好なら眠られるお薬を出しましょう」

「先生、私、夫の車にはねられたんです。だのに夫の付き添いもない。察しがつくでしょうけど、夫婦仲はうまく行ってないんです」

私は先生の目をもっと見ていたくて、思いつくかぎりのことを口にした。恥をさらすようなことでも何でもよかった。

「僕も離婚してしましてね。赤の他人が二人平穩に生活していくのは難しいものです。たとえそこに愛情があっても、です」

先生はやはり物静かな口調だった。彼の目はすみきって、哀しみや憎しみやどんな感情も吸い取ってしまうようだった。

私はそれから先生が回診に訪れるたびに、決まって彼の瞳をしっかりと見据えたまま、とりとめのない話で彼をひきとめた。

彼は決して嫌そうな顔をせず、穏やかに私の目を見つめかえしてくれた。

先生がいってしまくと、ぶどう色の点滴液をじっと眺めた。ぶどう色、先生の瞳、ぶどう色…。その繰り返しだけが私の生活の全てになった。

三日してようやく決まり悪そうに見舞いにきた夫が「あれははずみだったんだ」と言い

訳のようなことを話していったのも、もうどうでもよかった。

夫が先生に挨拶をした瞬間だけは腹がたった。白々しい言葉にではない。夫の何かが先生の無垢で純粋な何かを汚しそうでたまらなかった。

病院での日々に、私のところは少しずつ、ときほぐされていった。呼吸は楽だし、目を閉じるのも怖くない。私はこのままずっとここで先生の瞳に癒されていたかった。虹彩のすきまからからめとられて、そのすんだ水晶体の中にとじこめられてしまいたかった。

いよいよ明日退院という日の夕方、病院の談話室で雑誌を膝にのせ、ぼんやりしていると先生が通りかかった。私が呼び止めると、ちょうど勤務時間が終わったところなのですよと言いながら先生は、いつもよりリラックスした様子で私の向かいに腰掛けた。

「内臓はどこも異常ありません。すぐに痛みもとれてすっかり元気になれますよ」と先生はゆっくりと丁寧な口調で言った。

私は急に不安に襲われた。ずっしりとまた痛みが舞い戻ってきたような緊張感だった。

「退院なんて嫌。私はずっとここにいたい」

私は子供のように我儘な言葉がすらすらと出てくる自分に呆れながらも止まらなかった。すーっと涙が頬を滑り落ちるのを感じた。先生は黙って私を見つめた。ふんわりと抱きかかえてくれるようなまなざしだった。

「先生、あなたは どうして そんな優しい目をして私を見るの？ 憎しみの渦巻いた醜く意地の悪い私を」

「それでいいんですよ。離婚して夫から慰謝料を幾らもらってやろうとか、そういう現実的なことを考えるほうがずっと人間らしいのです。僕のように なにもかもを捨ててしまった人間は人間じゃなくなります」

「いいえ、先生は私を救ってくれた」

「僕は心を病んでしまった妻を見捨てたのです。愛している人が、壊れていくのを見ていられなくなって逃げてしまった」

私はその時初めてどきりとした。ひんやりとした感触が背筋を走った。先生の瞳があんなにすんでいるのは、そこにぽっかり空洞があるからではないのか。もう誰にも、どうやっても埋めてあげることのできない哀しい虚がこの人に巣食っているのでは...

「ここを出て、強く生きてください。一度諦めると二度ととりかえしのつかないことが

この世にはあるのです。今のあなたならまだ十分に元に戻られる。病院はかりそめの場所です。現実はどこではないのです」

先生の目が、怖いくらいにすみきっていた。

新緑に光がはじける明るい春の午後、私は退院した。先生に最後の挨拶をしたかったが、朝から大きな手術にかかりきりだそうで会うことはできなかった。私はなぜか少しほっとした。

タクシーに乗り、目をつむるとぶどう色が波打ってきた。すると私のどろどろに煮詰まった感情は希釈され、そしてやはり心は先生の瞳を探し求めさまよう。先生の白衣がぶどう色に濡れそぼってゆらめくのに、もうどうしてもあの瞳にはたどりつけない。

タクシーはどんどん病院から遠ざかる。

しかし私はあそこへはもう二度と帰れないのだと知っていた。

もう一度、先生の名を思い出そうとしたが、どうしてもそれは浮かんでこないのだった。（完）



休日の次の日はたいてい疲れがど
っと出るらしくて、
普段は午後にする昼寝が、午前中
になる娘がやすらかな寝息をたて
る横で、
本を読んだりパソコンに文字を打
ち込んだりしている。
なんにも音のない状態も好きだが
、昼寝のときの娘は不思議なこと
に小さな音が淡々と流れているほ

うが長く寝てくれるので、だからラジオや音楽や録画しておいたテレビをつけたりして
いる。そばでずっと話し声がするというのが眠っていても脳には届いていて、そばに誰
かがいるとほっとするんだろうか。わたしも誰か近くに起きている人がいるという気配
のなかで昼寝をするのが好きだった。実家の母や、もう死んでしまった祖母は手仕事の
好きな人たちで、いつも針と糸でなにか縫ったりしていたので、わたしはたいてい彼女
たちの針仕事の気配の中で昼寝の眠りに落ちた。

お昼寝を全くしなくなってしまうのは何歳くらいなんだろうか。わたしにはごく幼いと
きの昼寝の記憶が一回だけあって、まだ建て替える前の実家の古い廊下に敷いてあった
オレンジ色の絨毯に寝そべっている。ちくちくとする絨毯の感触が懐かしく蘇る。
その記憶は、幸せというものに近い場所にいるという実感を生まれて初めて味わった記
憶でもある。

ふと目を覚ます。オレンジのちくちくする絨毯に片側の頬を押しつけている。
そこから庭が見えて、庭は午後の、夕方が近づきつつあるオレンジを帯びた光に満たさ
れている。そこに母と祖母が並んで洗濯物を取りこみながら、なにかを話している。父
は婿養子で、祖母と母は血の繋がった親子だ。

気の強い母が、祖母に向かってきつい口調で話すのを、中学生くらいになると、すごく
イヤだと思うようになるのだが、

そのときは、二人ともすごく朗らかに喋っている。

目を覚ましたわたしは、すぐにでも二人の前に、「起きたよ」って現れてもいいのだが
、でも、あまりにも幸福な気持ちなので、もう少しこの時間を、このまんまの状態
で味わっていたい。わたしは絨毯に頬をつけたままの状態、祖母と母の話すのを幸福な

気持ちでうとうと聞いていたのだ・・・。

そのときに植え付けられた、とは言わないし、わたしの生来のものである可能性は高いけれど、

わたしは、うちのなかで、「あたたかな幸福な家庭」に守られてぬくぬくしているのが好きだし、そういうことをずっと望んできたような気がする。

でも同時に、同じ力で、外に出よう、外に出よう、という声が聞こえる。

ふたつの力がわたしを引っ張り合っている。

家の中にいたい。けれども遠くへ行ってしまいたい。

赤ん坊を生んでから、この2つの背反する欲望について意識することが増えた。

特に出産直後は、ほとんど赤ん坊から離れることができなくて、ゴミを出すために外に出ただけで、空気が新鮮で、はっとした。

ずーっと赤ん坊の匂いのする部屋であつためられた毛布の中にいたわたしは、



もはや自分がかつてリュックサックを背負って外国を旅したことが信じられないような気分で、部屋からほんの10メートル出ただけなのに、怖いような気がした。

同時にものすごくせいせいした。

部屋に留まりたいという気持ちとどこまでも遠くにいきたい気持ちをこんなに強烈に味わうことは、それまで意識させられる場面がなかったにせよ、初めてだった。

※※※※※※※

世の中にこんなに沢山の紀行番組が存在するのかと吃驚するが、外国の風物や景色を紹介する番組を山のように録りためていて、あまりじっくり見ることは少ないのだが、BGM代わりにながしていることが多い。

テレビのバラエティ番組などで喋る人間の声は非常にうるさいものだが、紀行番組のナレーションというものはたいてい淡々としていて聞いていて心地よい。

BGMも静かで心地よいものが多いので耳障りだということはほとんどない。

画面はじっとみつめていることはないがいつ見ても、美しい風景や、おいしそうな料理などのシーンなので、たまにみとれたり、すぐに作業に戻ったりしつつしている。美しい風景写真が延々と繰り出されるみたいな画面は、まったくといっていいほど害がない。

なにか作業しながら紀行番組を見るときもなしにつけっぱなしにすることほど心安らぐことはないのではないか。この録りためた番組を見るためだけに延々と時間を費やすつもりはないけれど、なんとなく流しておくのにもっとも好んでいる。

それでも、ただ安楽椅子に座ったまま、実際にその土地に赴くことなく、絵の中の餅を眺めるだけでいるのは、イヤだなんて思う。

突き上げてくるような、どこか遠くにいきたいという気持ちが、ふつふつと沸いてくる。いや、番組を見ていないときでも、しゅんしゅんと湯気をたてながらストーブにかけられたケトルのように、わたしはずっとその気持ちを常に持って生きている。ここでぬくぬくとして守られていたいと思うのと同じ力で、外へ行ってしまいたいと感じる。

いつか風が最高の状態になれば、また、旅に出るのだ。

いつもいつもそう感じている。旅に出るには最高の風を読み、待ち続けている。

なにかを書くことが好きだけれど、旅の記録を書くことが一番好きだ。

昔は一生旅をしながらその都度の瞬間を書いてはネットに発信していく人になりたいと思っていた（職業として成り立つかは不明だがとにかくなりたかった）。

今ならツイッターがあるから、ほんとにそういうことができそうだと。



子どもが生まれて家族ができて、



家を買った。

でもそんなことは足枷ではない。
子どもがいて家があるから旅に出
られないわけではない。

金銭的な問題でもない。

旅に出るかでないかは気持ちの問題だ。

旅人でありたいと願えばずっと旅
人でいられる。

子どもを置き去りに夫とも離れば
なれになることが旅にできることじ
ゃない。

わたしは子どもとも夫とも離れる
つもりはないし離れたくない。

2つの、反対側を向く力のせいで、どこにも動けない、ということはあるのか、
といえば、

ふたつの力があるからこそ、

勇気を出して外に飛び出していけるし、

また守られるために戻ってくることができる。

たぶん無防備なまでに外に飛び出していったのは、守って貰えるうちがあったから。

うちに戻って羽をやすめていられたのは、また必ず外に飛び出すであろう自分を知って
いたから。

結局わたしは両親や祖父母に守られていた、お目出度いお嬢さんだったことに気がつい
て呆れ果てる。

反抗の気持ちを尖らせてばかりいた頃、どこか遠くに飛び出したいという気持ちばかり
に目がいって、もう一つのほうを忘れ去っていた、あるいは見て見ぬふりをしていた。

帰ってこられる場所があるから、勇敢なふりをして飛び出せたというのに。

中国人女性作家、九丹の小説「ドラゴン・ガール」は、最初に短くシンガポールの回想シーンがあり、すぐに本編が始まるのだが、北京の国際空港に1人の中国人女性、

ヘレン（彼女はたくさん名前を持ちすぎて一体自分がなんという名なのかわからないと独白するようなシーンがある。ヘレンも適当につけた名前だ）

が、赤いトランクを持って搭乗を待っているという場面が述べられる始める。

出発までベンチに座ってそわそわ過ごすヘレンは決

して、これから始まる旅に浮かれているという雰囲気

ではない。うまくシンガポールに潜り込めたとしても、所持金は少ないし、エージェントの男がちゃんと迎えにきてくれているのかもよく判らない。シンガポールには語学留学という名目で行くのだが、当時の中国は今ほど経済発展を成し遂げてはいない。自国より豊かなシンガポールという国にいて、成功したいという野望が彼女にはある。しかしたいていの中国人女性には、例えばビジネスの成功などといった道はない。シンガポールのお金持ちの男性と結婚して、永住権を勝ち取ること。それがほとんど唯一の道だ...、というような設定である。



しかし、ヘレンが惨めだったらしいかといえは、全然そんなふうには思えない。渡航したあとのことを心配して弱気なところも見せるが、彼女は、まさに旅立とうとしているのだ。自分の力だけで。ほとんど何のコネも持たずに、外国へ行って自分の力で自分を高めようとしている。それが例えば誰かお金持ちの男性を見つけるということを目指すにしろ、

それが最終目的ではないと、わたしたちは知っている。

九丹はあとがきで「全ての女性は娼婦なのだ」、と挑発的に書いた。ここで勘違いしてはならないのは、娼婦というのは男に全てを頼り切って依存する女性のことを指さない、ということだ。娼婦というのは太古からある職業で、職業を持つということは、つまり

自立を意味する。

男に取り入ろうとはすることもあるかもしれないが、あくまで自立のため。

根っから男に甘えて頼りたい、ラクをするためなら、男に服従して身体を提供して、言うことをなんんでも聞く、というのは職業ではない。ただの主従関係を結んだ男女の関係性だ。

しかし娼婦は契約に基づいてお金をとる。お金にみあった労働はするが、それ以上のことはしない。それ以下のこともしない。プライドを持って仕事をするし、それで稼いだお金で彼女たちは「自立している」のだ。

別に娼婦になることを薦めるとか娼婦として生きるのが立派だと述べているのではなくて、娼婦という仕事を選ぶしか自立できなかった時代が確かにあったし、自らの意志ではなくて無理矢理身体を売らされてきた女性も数多くいるのが現実だ。

しかし九丹の述べた「すべての女性は娼婦である」という言葉における、娼婦の意味とは、独立をこころざすひとりの大人の女性を意味するということに思えてならない。

九丹はシンガポールで出版される本書へのあとがきに裕福なシンガポール女性に向けて、「中国人女性などはあなたがたに比べたら無力で無価値なのです。だから責めないでください」と書いている。これは一体どういう意味なのか、わたしは果てしない気分で考えることがある。



無力で無価値なはずの中国人女性である九

丹は、しかし、このような小説を書いた。ただの惨めな中国人の女性の話、などではなくて、完璧に面白くて文学として価値のある小説だ。

ヘレンは九丹自身ではないだろう。そして九丹がもし本当に自分も憐れな存在としてシンガポールで見境なく男を求めたことがあったとしても、それはこのような、彼女を立派に独立させるきっかけを作っている。

本当に中国人女性が無力で無価値で、訳の判らないまま火に飛び込んでしまう蛾のような存在だったとしたら、今のように中国は勢いのある国にはならなかった。きっと。手段を選ばないというのは、一番すごい手段となる。

娼婦のふりをして、中国人女性や、世界じゅうの女性は、もっと高くて大きい場所を目指しているのではないか。

そういう女性の力強さを感じることでできる小説、「ドラゴン・ガール」。

今の日本にはこんなに強い女性を書いたものは少ないのではないかな。

もちろん命をかけて名誉をかけて戦う必要のない女性が多いからかもしれないが、わたしは中国女性の書く、緊張感や野心に満ちた小説が、本当に面白いなあと思うわけです。

強い女性の棲む場所としてはあとニューヨークシティなども思いつくのだが、やはり今もっとも勢いを感じる国、中国の女性達がなにを考えているのかもっと知りたくて、中国語の小説がもっと翻訳されることを望みます。

日本の人口の10分の1の人間は東京に棲み、残りの大半の人間も大都市圏に棲まうのに、わたしはなんでよりもよって、北陸の片田舎に生まれちゃったんだろうか、という、滑稽なくらいの不平をずっと持っていた。今でも持っているだろう。

「やまとなでしこ」という松嶋菜々子の主演するドラマがあったと思うが、わたしは松嶋菜々子と共演した堤真一のファンだったからというのもあったが、別にもあった理由



でこのドラマを全部見た。

お金が全てで、お金持ちと結婚することだけを夢見る、松嶋菜々子が演じる主人公は、富山県出身という設定なのだった。

富山の実家はものすごい貧乏でという設定なのだが、それにしたって！

うらびれた漁村の長屋みたいな家にまだ幼い松嶋が暮らすシーンがある。江戸時代かなん

かですか？というすごい時代錯誤なセットにわたしは唖然とした。

富山に生まれ育ったわたしからすれば、これは田舎で貧乏というイメージを極端にデフォルメしたものだとすぐに判る。

しかも富山は、例えば同じ田舎でも東北などと違って裕福な県で、働いている人間の所得の平均だったかは全国1位なのだ。出稼ぎにでるような人間も少ない。そして貯蓄率ナンバー1であまりお金は使わないが家には贅沢にお金をかける県民性。少し貧しい人でも、都会の人間よりは広い家に棲んでいる...とかいうようなことは、もちろんでもよいのだろう。つまり、日本の大多数の人間、このドラマを見る大多数の都会に棲む人間がこのシーンを見て、納得すればそれでよいのだ。

田舎だったらこういうさびれた家並みがあって、こういう昔ながらの貧しい家に棲んでいるのかもしれない、とさらっと納得する。いや、うっかりわたしまで納得しそうになった。富山県にはこのような街並みは存在しないというのに。

しかし、そんなふうに描かれてしまう田舎出



身である松嶋菜々子というひとりの美しい女性が、トーキョーで、どのようにして成功

するのか。わたしはそれをどうしても見届けたかった。もちろんこれはドラマの中の架空の話だけれど、でも、どこかで架空の話ではないように思えた。

あの寒村で寒さに貧乏に震えている少女はわたしなのではないか、みたいな感情移入。

（細かいことですが、あのドラマの最後のほうで富山の父親が松嶋に会いに来るという話があるのですが、松嶋の携帯に父親から電話が入るとディスプレイに表示された電話番号の市外局番が富山市のもので、芸が細かいなと妙な感心をした覚えがある）

さて、わたしの大学時代、たまたま仲良くしているグループの女の子はみんな関東出身の子たちだった。特に仲の良い二人は、いかにも都会の真ん中で育ったような子だった。彼女たちは、田舎について無邪気になにも知らない。

一方田舎から出てきたばかりのわたしも都会についてなんにも知らない。



ただ、わたしのほうはこれから都会について知りたいし、知らねばならないし、事実食欲に都会について知ろうとして生きてきた。

しかし彼女たちは田舎について知りたいとは思わないし、知る必要はないし、事実田舎について知ろうとすることなく生きてきた。

圧倒的な一方通行。

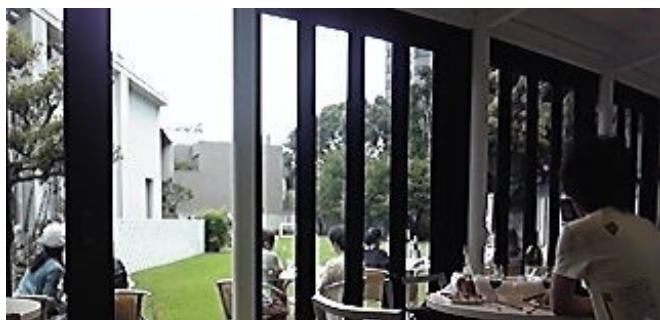
英語圏の人がほかの言語を理解する必要がないのに、マイナー言語を母国語とする人間は英語をマスターしなくてはお話にならない、というのに似ている。

でも徐々にわたしはそのことを良かったと思うようになっていった。

マイナーであることの価値、とまでは思わなかった。実際に価値があるのかどうかなんて判らない。

でも、都会の人が見たこともない風景を知っていて、それに思いを馳せる自分というものを、それなりにありがたいと思うようにはなってきた。

例えば夕暮れ時、世界が淡いすみれ色にそまった中で見た、完璧に完結してしまった雪景色について。



いや、都会の子には都会の子が見る、完璧に完結した風景があったはずだ。

その完璧に完結した都会の風景に、わたしの見た田舎の完璧に完結した風景は、劣っているわけじゃなかった。



価値は都会にしかないと思っていたが、
そうじゃなくて、両者には等価なものが存在
する。たくさん存在するかどうかはわから

ない。でも確かにある。

わたしは人生の途中だから、まだ完全な結論に至るには早い。

でも。

今のところ、

悪くないと思っている。

さらに、自分の泥臭い部分は、田舎出身であるためではなくて、これはわたしという人
間固有の問題だ。万が一都会で育っていても、人間性としての泥臭さはきっと持ってい
たんだろう。

田舎から都会に出てくる、という視点がないと小説なんて書けない、
といったのは、若い頃の村上春樹と村上龍だ。どっちが言ったのか覚えていないが、若
い頃のふたりの対談集でそんな話題が出て、ふたりとも賛同している。

村上春樹は神戸から東京へ、村上龍は長崎から東京へ上京している。

別に生まれが田舎ではなくても、

田舎の人が都会を初めて知るような視点とか感性がある、というのは、確かに面白い小
説を書くためには武器になるような気がする。

漱石の小説、『三四郎』の主人公が汽車で上京して、東京で生活して、
見るもの聞くもの体験するものすべてが新鮮だという驚きはもうそれだけで小説を面白
くしている。（漱石は東京の生まれですが）

そう、

わたしは、

田舎から都会に「上京する」、

ということにすごいおもしろみを感じてい
るのだ。

自分の体験は途中まではシリアスなものだっ
たが、

幾度も思い返されているうちに、

それは熟成されて、まろみを帯び、



ほとんど笑える喜劇になった。

都会を目指すこと。

この体験がひどくわたしを揺さぶる。

だから都会を目指すべく、都会じゃない場所に生まれて良かった、ということなのかもしれない。

「上京」という概念について、ずっと考えたり書いたりしていくのだと思う。

一番エキサイティングな旅、上京。

それについて、これからどんなものが書けるかな。

冬の欧羅巴であったまって。

真冬のヨーロッパを旅する予定を述べたときに、

「たくさんあったかい思いをしてください」というようなことを仰ってくださった方がいて、はっとした。

それまでその計画を述べた際には、さぞかし寒い場所なんでしょうね、きっと陽はすぐに落ちて真っ暗になるし、大変だと思いますよ～、みたいな反応をされることがほとんどだった。



でも、その方は、

「あったかいカフェの中で熱々のショコラを飲んで、曇ったガラス窓の外、重い外套を着て行き来する人々とヨーロッパの冬を眺めてくださいね」と仰ってくれた。

きっと寒いでしょうねと言う人たちはなにも意地悪で言っているんじゃないだろうし、あったかい思いをしてくださいという方がわたしの気を悪くしないように特に思いやってくれたというわけでもないのだと思う。

物事のどういう側面を見るか。

その人間の物の見方はいろんなところに現れる。

ちょっとしたときの受け答え、反応に、まざまざと現れる。

ポジティブかネガティブかという単純なことでもなくて、

ただ、その人の瞳がどういうところに吸い寄せられていくか、という問題なんだろう。



そしてなにかに着眼して、そこに豊かな物語を見つけられるということは、

自分の人生だけでなく、他人の人生にまで彩りを与えてくれる。そういえばこの女性は、ほかにもたくさん嬉しくなるような物語



を言ってくれた。

無意味に相手を誉め殺すような言葉を用いなくても、

相手の良い面は、細部のひとつひとつに宿っているんだな、とその女性が語る言葉をわたしはいつもうっとりと聞いていた。

世界中の全ての人に、細かい、ちいさな物語が無数に付随していること。

そのことに想像力を働かせることができるのって、なんて素晴らしいんだろうかと思った。

本を読むのが好きだということは、世界中に存在するどんな些細な物語も、すべて等しい位置にあるという幸福感を知ってしまったということなのかもしれない。

思えば冬にばかり旅をしてきた。もちろん旅行代金が安くなるというのが、ほとんど正規の社員として働くこともなくてバイトみたいな仕事を渡り歩いていて貧乏だったわたしには相応しかったし助かることでもあった。

でも、その女性が言ってくれたことによって、

ああ、

きっと、わたしはとっても寒いヨーロッパに、

あったまるために行っていたんだな、と思うことができた。

人生に意味深い物語を与えてくれるような言葉を紡げるのって、本当に素敵なことだ。

生きていれば人のことを攻撃するために言葉を使うこともあるかもしれない。

でも、できればわたしもこんなふうに、誰かの人生に豊かな物語を添えることのできる言葉を使っていけたら、と冬になるとヨーロッパ旅行の思い出とともに気持ちを新たにします。

あの人に感謝を込めて。



過去に書いた日記で行き場所もないやつを少しずつアップするつもりで時々過去に書いたモノのアーカイブを眺める。

今朝からずっと須賀敦子について考えていたので須賀敦子というキーワードの含まれているものをピックアップしてチェックしていた。

以下に貼る日記などは、新春とか2月とか、ああ、もうすでに1年前に書いたものなんだ、と愕然とした。本当に最近時間の経つのが早くて怖いくらいだ。

以下、今年の1月に書いたらしい日記。

※※※※

日差しがなんだか春めいている、と言葉にして思ってから、お正月は新春というし、暦の上では2月の立春からが春だけれど、それでも春に向かって季節が動いているんだろう、と納得した。

細切れの時間のなかで、それでもいつもひたひたと言葉や文学にひたっていれたらいいと思って、つねに立ち上がっているパソコンからツイッターで本のことなどをつぶやいたり、娘の相手をしながらちょっとした隙に本をめくったり、今、娘が眠った時間は家事にめどがついたらこんなふうに文章を書き始めたりしている。

手に取る機会が一番多いのがやはり須賀敦子の本で、須賀敦子全集は風呂場に持ち込むのを許可してしまったのでふにゃふにゃしているし、ほかにも「考える人」の須賀敦子特集や、須賀敦子追悼本なども暇があればめくれるようにリビングの本棚に入れている。



↑今回の話題になっている初めてのイタリア旅行中の写真を漁ってみた。飛行機の中の写真だが、これに写っているのがまさに初めて読んだ須賀敦子の「ユルスナールの靴」だと思われる。しかしいつもビール飲んでいたんだな……。昔飲み過ぎて今禁酒してますよ。

須賀敦子の本に出会ったのはそれほど昔ではなくて、30歳になろうかという頃だ。その年いっぱい勤めていた会社をくびになって（派遣契約を切られたんだが、まああれはクビというんだろう。ひとりの管理職に徹底的に嫌われてほとんどその人物の権限で解雇が決まった）、傷心旅行とでもいうのか、1月に入ってすぐにわたしは激安ツアーで初めてのイタリアへ向かう飛行機の中で、「ユルスナールの靴」を読んだ。須賀敦子を読んだのはこれが最初だった。

同じツアーに参加していた博覧強記といった知的な男性が、このとき飛行機のうしろの席からわたしがこの本を読んでいることに気づいて、わたしが「センスのよい読書をする」人間だとみなしたらしく（あとでそう聞いた）、旅の間ずっと話し相手になってくれたのもいい思い出で、須賀敦子のくれたちょっとした贈り物だと思えた。

ところで、わたしはイタリア旅行にいくから須賀敦子の本を携えていったわけではない。事前にまったくなんの情報もなくわたしはその本を持って行った。買ったときもどんな作家の本なのか全く知らなかった。



↑さっき機内の写真を貼ったので、ついでにもう一枚。やることもないのでつつい食事の写真を撮ってきたが、あとから見るとわりと面白いですね。これからは飛行機に乗ったら撮ろうと思います。いつかはエコノミー以外の食事も食べてみたいっす。

タイトルに惹かれて本屋で手にして、最初の数ページを読んで、これはすごい作家かもしれないと胸が高鳴ってそれを買ったに過ぎない。そのときはイタリアに長く暮らした人だということも知らなかった。

例の同じツアーにいた博覧強記な男性から、須賀敦子にはほかにも著作があると聞き、旅行から帰ってすぐに図書館で本を探した。当時はまだ故郷に住んでいたもので、あの黴臭くて、トイレの匂いのしみついた図書館で、それは1月のことだったから、きっと雪が舞うような日に須賀敦子の本を探したんだと思う。

故郷の図書館は最近移転して新築されたが、その頃はまだ古い建物だった。城址公園の、お濠のほとりに、苔むしたようにひっそりと図書館は建っていた。図書館は壕に面した石垣の上に建っていたような記憶があるが、それはわたしだけのもっているまぼろしの記憶かもしれない。

図書館とは反対側のお濠の縁の道を歩くと、どろんと重たげなお濠に水生植物が陰気にびっしり生えているのの向こう側に、お化け屋敷みたいに暗い図書館が建っている。石垣ではないかもしれないが、とにかく少し高い場所に図書館があるので、お濠の小径からだと見上げる形になる。窓はどれも真っ暗で人の気配がしないのだった。



↑これもその旅行の写真の中の一枚。どこかのホテルの朝食みたいです。なんてことない食事だけど、でも、外国の食べ物ってパッケージが珍しかったりするだけでおいしく感じられますよね。

その暗い図書館は、しかし開架式であることが一番の魅力だった。新刊は明るいフロアに並んでいたが、古い本も実際に手に取れるように窓のない倉庫のような部屋ではあるが、そこにほとんど並んでいた。わたしはその倉庫のような部屋でいったいどのくらいの時間を過ごしただろう。

しんと冷たい雪の匂いをかぎながら、とわたしは回顧する。弱々しい蛍光灯の明かりが、一層部屋を暗く見せているのだが、確かにそこでわたしは「ヴェネチアの宿」や「ミラノ霧の風景」「トリエステへの道」の単行本を手にとったのだ。あの出会いからそれほどまだ時間は経っていないが、いったいどれだけ繰り返し読んだだろうか。図書館の重い須賀敦子全集を何度も何度も借りてページをめくっていた。そしてついに全集の文庫版が出て、気軽に毎日めくることができるようになった。須賀敦子について書かれたほかの作家や評論家の文章も繰り返し読んだ。

でもこれだけ読んでいるのに、わたしはなにもわかっていないんだという気になる。読むたびに新しい発見があるようでもあるし、発見なんてわたしにはなにもできないような気もする。読むのが快樂なので何度でも読む。でもときどき読み進めることが怖くなったりもする。今は須賀敦子に出会うことができたことにただ感謝することしかできない。浅はかなわたしのことを、須賀敦子を読んでいるだけで「知的な人間」と勘違いしてくれた人もいたように（同じツアーの男性だ）、いまのところわたしが須賀敦子から受けた恩恵はこの程度なのかもしれない。ほんとはもっとたくさんのものをもらっているのに、わたしがそれを生かして生きていないだけなんだろうが、

なにかを分かったつもりになんて、全然なれない。須賀敦子の書き始めた年齢になったら、わたしにもなにかわかることはあるのだろうか。



↑これはミラノのバールで初めてイタリアのカプチーノを飲んだ写真だったと記憶しています。このときはまだ須賀敦子がミラノで長い時間を過ごしたことも知らず・・

冬の図書館、雪のにおいと一緒に、この季節になると須賀敦子との出会いを思い出す。1月のちょうど今頃、わたしはチューリヒを経由して、ミラノ・マルペンサ空港に降り立った。須賀敦子の暮らした、あの霧のミラノに。

※※※※

という日記のほかにも、須賀敦子について書いた日記はたくさんある。

書いたときとは考え方や感じ方も変わってきていたりするけれど、少しずつアップしつつ、

今現在の須賀敦子との関わりや思いなども少しずつ綴っていこうと思う。

わたしは文学にはほど遠い人間だけど（文学とかが好きですが、なんというかほど遠い場所で生きてきた実感がある。体育学部なんかで過ごしたので、文学部とかではどんなすごいことが行われているのか、遠い国の幻のようにうっとり想像していて、未だに、自分の知らない手の届かない遠いどこかで文学は行われていて、自分は遠くからぼおっと夢見ているだけという心境）、

でも、わたしの立ち位置からなりのなにかを書いていけたらいいなあと思っています。須賀敦子が好きだという人と、これまでもたくさん素敵な出会いをしてきました。また

須賀敦子が好きだという友達ができたらいいなと願いを込めつつ。

ツイッター的な須賀敦子の側面について。



↑引き続き、初めてのイタリア旅行の写真から。ピッツアです。ピッツアの美味しいのはナポリといいますよね。わたしは残念ながらナポリのは味わっていません。ナポリはオプションツアーでちらっと通り過ぎただけなのが悔やまれます。須賀のエッセイにもナポリのことを書いたものがありますね。

今日（11月24日）、ツイッターでもその名前を呟いたが、矢島翠という、聖心女子学院の須賀の後輩にあたる、優れた海外特派員でもあった人物が、須賀のエッセイのことを、

「均質な光のパースペクティブ」というタイトルで評している。

須賀は60歳を越えてから、晩年となったわずか10年足らずの時間のうちに、全作品を書き上げた作家だ。

長い人生の総決算とでもいうべき文章を最後の10年に書いた、ということになる。

そしてそれまでの60年には書かなかったということにもなる。

テレビ番組のインタビューで須賀は、

それまで書き始める前にも、ずっと頭のどこかでは書いていた、というようなことも述べていた。

生きている間、ずっと頭の中で書いてきたものを、

最後の10年に清書するように書いたのだろうか。



↑ヴェネツィア。ここも須賀がよく書いています。それを読んだあとの今、もう一度じっくりこの街を歩きたいと思います。いつか沈んでしまうのでしょうか。誰でも若い頃の初めての旅というのはあまりに無知で、それに夢中で、訳が判らないまま帰国して、初めて書物を紐解き、こういう街だったのかと気づくものなののでしょうか…。

インターネット全盛の時代に生きているわたしたちは、
思いついた瞬間にキーを叩いて文章を作ってそれを放出して生きている。
twitterが生まれるまでは、まだ、インターネットの即時性というのはそれほどでもなかった。ブログという形式は、まだどこか書物を発行するのと似ていた。書いた文章を推敲して、ページを編集してから、世に送り出す。
twitter時代に入って、人間はほとんど思いついた瞬間にそれを文章化して世界に向かって発信している。

さて、須賀の場合も、ツイッターをやっていたように、毎日の生活を生きていながら、ずっとどこか客観的にそれらの生活を文章に置き換えるようにして物事を眺めていたという点で、ネット社会を生きるわれわれとなんとなく通じるものがあるような気がしてしまう。
ゆっくりと熟成させてきた記憶を、よく練られた構成で完璧なエッセイに仕上げた作家がツイッター的だと述べるのは失礼なことだろうか。



↑これはヴェネツィアのバーで食べたものです。なんという料理なのかな？クレープみたいな生地には総菜が巻いてあったのですが。

でも、矢島翠の述べる「均質な光のパースペクティブ」な須賀のエッセイの世界は、ツイッター的だなと思うのだ。

全ての事象に、均一に光が当たっている世界。

どれかひとつのことだけに偏った思い入れが述べられているわけでもなく、すべてにあまねく等しい視線が投げかけられている。

しかもそれは淡々と冷めている視線ではない。

ひとつひとつに、その瞬間を愛して生きたという痕跡の残るような、しっかりと確かなものの見方をその都度している。

こんなまなざしのエッセイを書くには、

普段、生きていながら、ほとんどツイッターを呟くようにして、すべての事象を言葉に置き換えて、愛情を込めて言語化していた印象がするのだ。

無我夢中に生きていて、最後に人生の総決算を、作り込んでドラマティックに書いた、というよりは、

どの時間にも同じように呟き続けていた言葉達を、

きれいなビーズを糸に通してネックレスにしたようなおもむきがある。

実際にツイッターで呟くようにして物事を見てはいるが、須賀はその視線から得た言葉を、迂闊にすぐには公にはさらさないできた。

でも心の中ではいつもリアルタイムで言葉を発してきた。どんなときも、それを心の中で愛情を込めて描写してきた。

そんなふうに一瞬一瞬をいとおしむように生きてきたからこそ、あんな均一な光のパー
スペクティブな世界を書くことができたのではないかと思える。

そういう意味で須賀の言語感覚は、ツイッターにフィットするとわたしは感じるのだ。

須賀の文章は無論、刹那的なものではない。

じっくりと練られた味わい深い文章だ。

しかし、あれもこれも、全部に目が行き届いていて、どれも同じように扱うスタイルが
共通しているイメージを与えると感じるのだ…。

文学や建築など深遠な話題についてと同じように、可愛らしい植物のことや料理のこと
、そして愛した人たちのことを、まったく同じ重さで書いているから。



↑イタリアではバールの数だけカップとコーヒー、それに様々なデザインの砂糖の袋の組み合わ
せがあって、ひとつとして同じバールはなかったように思うのです。画一的なチェーンのコ
ーヒー・ショップとは対照的です。



↑ 故郷の駅で撮った写真。こんな大雪でも普通に電車は走ります。。

★★★★★★

最近新しく建築される多くのマンションのほとんどがそうであるように、我が家も例に漏れず、リビングはなるべく大きな窓を取れるだけ取っているという家の造りだ。

暇なとき、マンション情報の雑誌にある様々な物件の間取りを意味もなく眺めているのだが、もうそういう造りである以外の物件を見つける方が難しい。たいてい玄関から入っていくつかの部屋が両側にある廊下を進んで突き当たりがリビングで、そのリビングの奥の壁...というかそれがほとんどは壁ではない、全部窓、というのが今の日本のマンションのスタンダードとなってしまったようだ。

少しでも家を広く見せて、さらには開放感を作るため、なんだとは思いますが、実際にそんなに窓は広くても構わない...というのが、そのような典型的な家に棲んでの感想だ。

もちろん、窓からの眺めはいいと思うし、それを気持ちいいと感じることも多いんだけど。でも、いつもそんなに眺めのいい場所にいるのは落ち着かないものだ。人間はある程度、壁に囲まれてプライベートが守られているという安心感がないと落ち着かないらしい。穴を巣にする動物もいるくらいだから、そこが快適な住居かどうかという条件には、隠れて護られて安心、という気持ちを抱けることが入るのではないかな。



↑ 冬の金沢。金沢は川の街。わたしの故郷から近かったのでよく足を運んだ。

ではここに引っ越してきたことを後悔しているかといえばそんなのことはなくて、今は充分このうちを愛している。根が横着なので掃除が行き届いていないために、本当はもっと快適になるはずの部屋が雑然としている時間が長いのは残念なことだと思うが、それにしたってわたしはここを居心地よく感じている。主婦というのは一日の時間の多くを家の中で過ごすのだから、やっぱり我が家は心地よい空間であってほしい。主婦ではなくても、そして家にいる時間が短かったとしても、家が心地よくあってほしいと願うのは、多くの人の共通の願いかもしれないけれど。

でも、これ以上なにを贅沢な望みを、と言われそうだが、
期間限定でよい。いや、期間限定というワガママな希望だ、それは。
もっと他の場所でも暮らしてみたいとちょっと夢見る。

本格的な移住じゃなくて、仮住まいで、
他の国やほかの都市にも暮らしてみたいなと思う。
あくまでただの夢なので、夢見るのは自由といわんばかりに、
他に棲んでみたい街をよく夢想する。
旅をするようにいろんな場所に気が向くままに時々棲んでは、また戻ってくる。
世界にはこんなにいろんな都市や町、村があるのに、ひとつの場所だけに棲むのはもっ
たいたないなと思う。

そこで暮らす自分のこと、毎日の生活について、ディティールに凝った想像をする。
どんな街に、どんな家を借りて（あるいは買って）、どんな生活をするのかという夢想
。

わたしはこの夢想を、ほんとに幼い頃から繰り返してきた。

ほとんど毎日この夢想を楽しんでいた。

眠りに落ちるまで布団の中の時間のほとんどをこの夢想に費やした。

まだ幼い頃のわたしは、外国や都会のほかの街についてあまり知識はない。

具体的に、例えば、イギリスの●●という村のようなイメージで・・・という想像の仕
方ではない。ただ頭の中に浮かび上がるイメージを自由に（とはいえもともとインプッ
トされた情報が乏しいので想像力も乏しいのだが）組み立てて、
自分が住んでみたい場所についてあれこれ考えていた。

長い間その想像をしてきたので、

だいたい大まかにいってひとつのわたしの理想郷らしきものができあがり、
それをなぞるようにして、そのメインの道からは大きく外れることはなく、しかし無数
に枝分かれた物語を作っていた。

ずっとわたしは想像上のその架空の街で半分生きていたように思う。

その都度、例えば好きな人がいれば、その人がその街の住人として妄想の中に登場する
ことはあったが、基本的に「ひとりぐらし」という設定はずーっと変わらなかった。

家族が欲しい、パートナーが欲しいとずっと願っていたけれど、

でもそのわたしの妄想の中の理想の街で、

わたしは一人暮らしでなくてはならなかった。理由はよくわからない。すごい幼い頃からほとんど毎日耕してきた妄想の世界なので、気がついたら一人暮らしという設定だったし、例えば長じるにつれて、恋人と同棲とか結婚して家族が増えるということは決してなかった。

別に孤独を好む気質だとも思っていないし、どっちかというといつも話し相手はほしいと思うタイプの自分が、どうしてその世界のなかではひとりを好むのか、不思議にも思わずずっとその世界に生きていた。つまり現実の世界では充分孤独ではなくて満たされていたということか。恋人がいなくてもたいていは実家の家族と一緒に暮らしていたし、学生時代と就職してからの一人暮らし時代にもいつも仲の良い友人が周りに存在した。



現実的に、
いろんな場所を転々としながら生きている人は、
それほど多くはないけれど時々はいららしいことをわたしたちは知っている。

例えば村上春樹は、外国のいろいろな都市に棲みながら小説を書いてきたみたいだ。昔、AERAという雑誌で「村上春樹になりたい」というタイトルの特集があったと思う。タイトルに惹かれはしたが結局中身を読んでいない。でも村上春樹になりたいというタイトルが生まれてしまうくらい、村上春樹が羨ましいという気持ちはちょっとわかるな。。と思う。

わたしが村上春樹を羨ましいと思うとき、面白い小説が書ける、というのも羨ましいが、当たり前の話だけど村上春樹の小説を「わたしが」書きたいわけではない。

だから主に羨ましいと思うことは、心の赴くままに、いろんな場所に棲んでいる生活スタイルだ（最近はどうなんだか知りませんが）。

もちろんその生活はわたしが想像するようなただお気楽で楽しいだけなものではないのだろう。それなりの努力をしてリスクを払って初めてそういう生活は手に入る。

ただ、ここはわたしの妄想の世界。

例えばギリシアの島、シーズン・オフ。

市場で新鮮な魚を買って、オリーブ・オイルで焼いて塩をふっただけのシンプルな調理法で、よく冷えたワインとともに、楽しむ日々。

そこでの生活に飽きてきたら、

さて、次はどこに棲もうかな、と地球儀を取り出す。

ぱーん、と地球儀を叩くようにして、それを回転させる。

そして、ぴっと指で押さえた場所、そこに次はいつてみよう…。

霧を吐き出す湖の畔に棲んでみたい。

猥雑な、熱気溢れるアジアの新興都市に棲むのもエキサイティングだ。

アメリカの名門大学のたくさんある街で大学生のような顔をして暮らしてみるのも楽しそうだ。

などなど。

そんなことを考えつつ、

でもわたしはわたしのこの家を、

できる限り掃除して、おいしい料理をつくって、笑いながら家族と生きていくんだろう…。

でも、ちょっとした考え方とやり方の工夫とかチェンジとか、努力とかで、色んな場所に棲む生活って手にはいるのかもしれないね。出張で世界中を忙しくとびまわるビジネスマンだってほとんど旅をして生きているようなものだし、いろんな方法はある・・・。

なんていう朝のつれづれ。



この電子書籍の空間をお借りして、イタリア旅行記「夜の底の旅」を少しずつアップしてきて、つい最近最後の7冊目を出した。最後まで出したら、ああ終わったー、という気にはなれなくて、さて、じゃあ次はなにを書こうかな、という気分になった。小説はずっと書き続けているが、単純な楽しみとして旅行記を書くこともずっと続

いていることのひとつだ。ツイッターで一度書いたが、物語の創作は快楽と同時に苦しみを伴うが、旅行記を書くというのはわたしにとっては、純粹な悦楽のみを連れてきてくれる。たぶんすでにあったことをなぞって書くだけだからだろう。村上春樹が、これと同じようなことを翻訳について言っていた。小説を書くのは苦しいこともあるが、翻訳は楽しみのためだけにやっていると。

でもおそらく小説を書く人にとっての翻訳は、ただの楽しみであっても、本人が意識しないところで小説を書くことに影響を及ぼしているんだろう。違う言語に触れること、しかも違う言語で書かれた物語に深く入ることは、どうしたって自分の精神になんらかの痕跡を残すと思われる。

わたしにとっての旅行記もそうであればいいなと思う。旅行についていつも、悦楽に溺れながら何かを書いているが、そのこと自体が、実はわたしにとってなにか意味があると。まあなにか好影響を及ぼすからという下心がなくても、楽しいからわたしは書くと思うけど。

この一ヶ月の旅について、また新たに電子書籍を1冊作って、1頁目から埋めていこうと思うと、それはなかなか大きな仕事のように思える。まとまった時間を見つけれない現在、それだけの大きな仕事をこなす自信はなくて、またそ



れだけの大きな仕事だと思うと意気込みだけが空焚きされるばかりで、なかなか簡単に着手できないかもしれない。

じゃあこの「雨や霧や雪」という、ブログみたいな電子書籍で、メモや断片のようにして書き足していくというのはどうだろうか、と思いついた。それはなかなか今のわたしに適したやり方だと思う。

いや、今に限らず、わたしのよう

な人間はいつだってそういうやり方が好きなんだ。まとまった大きな仕事をこなすと思うとそれだけで怖じ気づいてしまう。小さなことを気軽にこなしていくうちに、いつかまとまった量のものが貯まっていた、というのならやれそうな気がする。

というわけで、旅行記の下書きみたいなことを始めようと思う。旅行に関する雑記のようなものを少しずつ連載する、という感じになると思う。そのひと月の旅だけでなく、これまで全ての旅、そしてまだしていない旅について。誰かの旅について。見知らぬ人の旅、有名な人の旅。とにかくありとあらゆる旅について書いてみたいというのがわたしの夢だ。ひたすら好きな旅のことについて、やはりひたすら好きな書くということとを組み合わせると、これはこの世で一番の快樂であるような気がする...！！

☆☆☆☆☆☆

そして1頁が長いと人は最後まで読むのが疲れると思うので（わたしがそうだ）、とりあえずこのページはこれで終わりにしようと思う。

断片は別のページへと。。





旅に本はどうしたって必要だ。

しかしながら、わたしはひと月のバックパック旅行に、ガイドブック以外の本を持っていかなかった。現地でリアルタイムで書いていた旅の日記にそう記してある。ひとりで一ヶ月も旅に出て、一冊も本を読まなかったのかと呆れかえる。そんなに贅沢なひとりっきりの

の時間は、まさに本を読むのに適しているではないかと思われるのに。

一ヶ月で10カ国廻ったというハードな旅ならいざ知らず、ほとんどイタリアの数カ所とパリだけに長く留まった旅をしたのだし、じゃあその長い時間、なにをしていたんだろうかと自分を責めたいような気持ちになって、でも、あ、と思った。紛れもなくわたしはその時間、旅をしていたのではないかな？

な一んにも読まずに、たいして観光地を巡ったわけでもない。お酒を飲んでいたという記録が膨大に残っているので酩酊した頭で、なにをしていたのか。なにかを考えてはいただろうけれど、深遠なこととはほど遠かったと思われる。

でも旅をしている、という気分を味わっていた。実際に味わっていた

のかもしれないし、そういう気分になろうと努力していたのかもしれない。

でも確かにわたしは旅をしていたような気がしている。

そして本は読まなかった。

でも、やはりその旅には本が必要だったと思う。それはそれまでに読んできた本たちの存在。そしてこれから読むことになるかもしれない本たちに思いを馳せ続けていた。

☆☆☆☆☆

旅に関する本をたくさん集めた、それを紹介する本があったらいいな、そんな本をいつか自分で作りたいなと思っていたら、まさにそういう本は存在した。



「旅のネタ本」という国際地学協会という会社が出している本だ。たまたま偶然、図書館で見つけた。それは、「地球の歩き方」や「るるぶ」などのガイドブックの並ぶ棚にひっそりと並んでいた。その比較的小規模の棚は、幾度も幾度も念入りに隅から隅まで眺めているのに、ずっと見落としていて気がつかなかったのか、わたしが眺めるときにはそれまで常に貸し出し状態だったのか、とにかく最近見つけた本だ。発行されたのは1997年とあるので、データは少々古い。しかし、旅の本の王道、そして古典となっているようなものが知りたかったので十分だと思えた。（ただし1997年以降に出た本を付け加えた新しいその手の本が欲しいなと思う。なんならそういう企画でわたしが作ってみたいです）

しかし、「国際地学協会」って、なんだ、その会社は？ と気になったので調べてみると、それは主に地図を出版している会社だった。「るるぶ」などのガイドブックに載せる地図を下請けで手がけたとか、なにかそういう関係で、旅行に関するチームが会社にできあがり、そのチームの中でそういう本を作りたいと志願する人が出てきたのかしらん？とか色々想像してみた。

いや、下請けじゃなくても、そもそも地図を作っている会社なら、独自にガイドブックも出版しているのかもしれない。誰か一人の著者がいるという本ではなくて、チームで一冊を作ったということが奥付を見て判る。

まあともかくこの「旅のネタ本」にはヨーロッパ編、アジア編、アメリカ編とあって、わたしは現在ヨーロッパ編だけを図書館で入手して読んだのだが、とにかく本を紹介することだけに徹していて、ヨーロッパの旅に関係すると思われる本をこれでもかと網羅してあって興味深い。そう、こういう本が欲しかったんだ、とわたしは久しぶりに興奮した。基本的なガイドブックもほとんど全社のものを紹介、その土地を舞台にした小説、エッセイ、グルメ本、旅行記、写真集などがたっぷり紹介されている。

そして、鉄道の旅をしたいなら、トーマスクック、車の旅を楽しみたいならその土地のドライブマップを紹介したりと、実用的に使える本が紹介され、しかしそれだけではなくてイメージを膨らませるためのフィクション作品も多数紹介されている。

旅の準備として、実用的な本が必要なのは言うまでもないが、それだけでは足りない。旅にはイメージを膨らませる本がなにより重要だ。しかし夢だけ見ていて旅ができるわけでもない。旅人の頭の中の、実用と夢の配合具合が、まさにこの「旅のネタ本」に紹介されている本のバランスだと丁度良いのではないのかな、と思わせる一冊。

旅に本は必要で、でも、それは心を揺さぶるほどの思想が書かれたエッセイなり文学なりである必要はなくて、いや、そういう本も絶対にあったほうがいいけれど、でもそれだけではダメで、

すごく実用的な本も要る。

トーマスクックみたいな時刻表も大切だし、

「地球の歩き方」だって目を通しておきたいし、

地球の歩き方よりはミーハーな情報の多い「るるぶ」も読みたい、最近では乙女や女子向けにかわいらしいガイドブックも数多く出ているのでそちらもチェック、

有名な作家の旅行記も、

無名のライターの滞在記も、

どの本も必要。

「深夜特急」もどうしても必要だと思うが、わたしは深夜特急はわりと最近になって初めて読んだので、旅の最初からなくて、途中で出会うというのでも、もちろん構わない。そしてどの本も最初に全部読めるわけではないので、人生の折々に少しずつ出会っていくんだろう。

女性誌の旅行特集号みたいなものの、きれいな写真をぼけーっと眺めている、という読書だって、やっぱり必要。自分では決して泊まれないようなゴージャスなホテル（一泊の値段が、わたしの旅の全費用くらいな）の情報だって頭の中に入れておいて損はないだろう。

☆☆☆☆☆

旅と本という組み合わせについては、また回を追って少しずつ書いていきたい。



旅。このことに浮かれていたいし、でもそうかといって非日常であるだけでなく、ほとんどそれを日常の中に引き込んでしまっって呼吸するように旅を我が物にしてしまいたいとも思う。旅行に行ってきたことを文章にすることは当たり前すぎることだったので、初めてそれをしたときになぜ書くのかということに気がしたり立ち止ま

ったりすることなく書き始めた。

ちょうど初めての海外旅行の少し前から、やはり初めての自分のホームページを作っていた。まだブログやSNSが隆盛する以前の、古式ゆかしいホームページだ。BBSに書き込みをしあうのがほとんど唯一の交流。当時もチャットなどは存在したが、インターネットの即時性にわたしはまだ鈍感だったと思う。自分で紙の同人誌を作るような感覚でホームページを編集していたように思う。

さて、日々の日記と自作の小説以外にもなにかコンテンツが欲しいと思っていたので、新しく始めた旅行記は、わたしのサイトの目玉として、鳴り物入りで連載が始まり評判を呼んだ...ということだったら良かったなあとは思いますが、当時のホームページの常連さんはたった二人で、わたしも含めて三人だけの閉じられた小さな世界に、その初めての旅行記は紡がれていった。

ところで当時わたしはオートフィクションという言葉に夢中だった。

カミーユ・ロランズというフランス人女性作家の書いた「その腕の中で」という小説を読んで、酔うようにして参ってしまい、その小説の手法がオートフィクション、虚と現実をない交ぜにしたような書き方である、と解説に書いてあったのを読んで、うっとりとなる。

もっとも普通の小説だって、作者がどこかに自分の実体験を織り交ぜたりすることはあるだろうし、それがどこからどこまでが実体験に基づき、ここからは完全な創作



である、ということを読者には判らないことで、だから逆にオートフィクションだと思われるものも、実は全部が完全な作り話であったとしてもそれはまたありうる話なのかもなあ、と考える。



とするとオートフィクションであるか否か、というのは完全に書き手の自己申告による表明によってのみ明らかになるわけだが、それならばわたしは「これはオートフィクションなんですよ」と言い切ってなにかを書くけばよいや、と安易に考えた。

それに読者が二人の、馴れ合いになってしまっている世界でなにを表明しようがたいしたことではないと思えた。3人で回している交換日記のようなものだ。ただしインターネットでのことではあるので全く別の誰かが読んでいた可能性もあるのだが、仮にそんな人がいたとしてその人から読んでいます、という書き込みやメールが届いたことはなくて、だったら実際には存在しないも同然だったのだ。そのときのわたしには。だからわたしは初めての旅行記に「これはオートフィクションであります」とかいう注釈をつけて書き始めた。しかしそのとき私は、テレビドラマが終わったあとに出てくるような「この番組はフィクションです。登場する人物、団体名は実在の物とは関係ありません」という断り書きのように便利なも、くらいの気軽な気持ちでもあった。いつかはオートフィクションの文学的野心に満ちたナニカを書きたいけれど、とりあえず言葉に憧れることだけが先行して、これから書く旅行記はオートフィクションという言葉借りて、事実と異なることが書いてあっても責任持てないし、嘘とも真実ともってもらえるので何を書いてもオッケーなんじゃ？とかいう甘えをそこに存分に発揮してのことだった。



そして初めて書いた旅行記はとても稚拙なものであったと思うが、しかし、その方法で書くことをわたしはすっかり気に入ってしまった。

自分の体験してきたことを、小説という虚構の世界に流し込むような書き方は、単純に楽しかった。自分を小説の主人公のように書



けば、ある程度距離を取れるので、どんなに気取って書いてもよいわけだ。ただの日記だとそんなクサイ台詞は言わせられない、というようなことでも小説なら大丈夫だと思えた。

結局あとから読んでみると、それは確かにその旅のそのシーンでわたしが思ったことを描写しているとしか思えない、ということになった。

また、如実に自分の行動を描写したつもりの箇所が、後から読み返すと、とても自分が本当にやったこととは思えず、本当に小説の主人公がとったフィクションのエピソードのような印象を与えることもある。

そんなふうに旅行記を書いていこう。物語のように旅行記を書く。小説のように旅行記を書く。いや、小説を旅行気ふうに書く？どちらでもよい。楽しければ、と思った。

そんなふうにして、旅行記を書くことがすっかり楽しい習慣になったのだった。



クリスマス直前の繁華街は賑わっていて、わたしも当たり前のような顔をしてその雑踏に紛れて歩いている。雑踏には安心する。同時にひどく不安な気持ちにもなる。この中の誰かがいきなり刃物を振りかざして暴れ出したら、とかそういうことが頭をよぎる。雑踏の中にいると自分ひとりだけが狙われる危険ではなくて、「誰でもよかった」のひとりとして狙われる危険について考えてしまう。都会の人というのは皆、雑踏の中で、やはりそういうことについて考えたりするのだろうか、それともわたしだけが特にそういう妄想に取り憑かれているのだろうか。秋葉原の事件を知ってからその思いを強くしたんだろうか。それとも地下鉄サリン事件？もっと以前から漠然とそのような危険を感じていたかしら。不特定多数の人を殺す、ということは、戦争中は当たり前になり、だから人類はむしろ現代ではなくて、もっと「過去の時代」にそのような危険について悩んでいたはずだ。そうするとわたしが怯えるのは、過去からの遺伝子に組み込まれたものだろうか。殺戮の記憶が遺伝子にしっかりと刻印されているのだろうか。

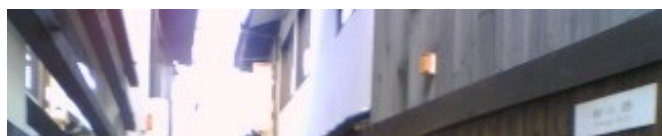
殺伐とした気分でコーヒーショップのテーブルに着席した。たくさん歩いたので身体が火照っている。でも芯の部分が冷たい。冷たい。あつためて。あつためて。凍えてしまう。ぼってりとしたカップにラテの泡が密に詰まっている。そこに唇をおしつける。泡との接吻。わたしはその瞬間が好きだ。誰とのキスよりもそのミルクの泡との接吻が。

殺伐とした気分でコーヒーショップのテーブルに着席した。

たくさん歩いたので身体が火照っている。でも芯の部分が冷たい。冷たい。あつためて。あつためて。凍えてしまう。

ぼってりとしたカップにラテの泡が密に詰まっている。そこに唇をおしつける。泡との接吻。わたしはその瞬間が好きだ。誰とのキスよりもそのミルクの泡との接吻が。

隣からふいに会話が聞こえる。神経を研ぎ澄まして会話を盗み聞く。だいたいにおいて都会の珈琲ショップはざわざわしているのでそんなに簡単に他人の会話は盗み聞くことはできない。かなりの集中を要する。馬鹿みたいにでかい声で喋っている人の筒抜けの声はたまにあるが、例外なく面白い話をしていない。ひそひそと呟かれるようなその声に、とっておきの物語があるのだ。



「わたし、上海行くのよ。上海はわたしの生まれた街ではないんだけどね。でも一度行っ



てみたかったのよ」

60代くらいとおぼしき女性が言う。

「へえ」

相づちは簡単なものだが、向かいに座っている男性は決してその女性の話をおざなりには聞いていない。真剣に聞いているが、そもそも

も人の話に相づちを打ったり、気の利いた間の手を入れるのが苦手なのだ、きっと。

「ツアーなんだけどね。3泊するの、上海に。羽田から出て羽田に帰ってくる飛行機だから便利なのよ。ホテルと、あとは食事もついて39000円よ」

女性は嬉しそうな様子なのだが、それがその上海旅行が嬉しいのか、今向かいの男性と話していることが嬉しいのか、それとも全く別の理由で嬉しそうなのか、隣で今話を聞き出したばかりのわたしにはよく判らない。しかし女性の表情は明らかに幸せに満ちている。日本語は流ちょうで、もしその会話を聞かなければもともと外国の出身だとは気がつかなかったかも知れない。着ているものを見てもある程度の経済力を感じさせた。例えば中国出身の歌手でもっと日本語をカタコトっぽく喋る女性がいたと思うのだが、その隣で話をしている女性は、言われてみればたまに不自然なところもあるが、でもほとんどネイティブと見分けのつかない言葉だった。

「わたしの生まれた街にはね、もう随分行ってない。何十年も」

男性が、どこの省なの？とか聞いてくれるといいな、とわたしは思う。例えば雲南省、例えば福建省などの女性の出身地についてわたしは知りたいと思う。

しかし、そこでふいに、二人は全く別の話をしはじめてしまった。上海旅行の話も、彼女の故郷の話も、ふつつり、切れてしまった。唐突に。

次に彼女が話し始めたのは、病院で受けた検査の話だった。

だから、わたしのなかで、彼女の、どこか大陸に存在する故郷の、イメージがまったく作り上げられることなく、ほとんど白いままに固められて、終わってしまった。

彼女は一体どこの生まれで、どんな経緯があって日本に住むことになり、今はどんな暮らしをしているのか。

そして、向かいに座っている男性は一体彼女とはどういう関係なのか。



いきなり刺されたらどうしようかと思う雑踏も、耳をすませると、ひとりひとりがこのような物語を持って生きていることがわかる。だからわたしはじっと誰かの話に聞き入るのだ



ろうか。

彼女は、例えばわたしがいつか訪ねたことのある湖南省の出身かもしれない。

長沙の近隣の村で娘時代を過ごしたが、やが

て長じて長沙で働き始める。そこに日本の商社マンである（辻原登「村の名前」の主人公にちなんで商社マンなのです）、現在の夫がたまたまやってきて彼女を見初める。彼は彼女のことをどうしても忘れられなくて、次は思い切ってプライベートで長沙を訪れるのだ。そして彼女の働いている店に突然姿を現す。しかし、さきほど向かいに座っていた男性は、ふたりの会話からして、夫婦ではないのだった。

そんな妄想をしながらラテを飲み続けた。

一度集中が途切れると、もう会話は聞こえなくなる。周波数をあわせようと集中しないとそれは聞き取れないのだ。わたしはiPodのイヤホンを耳に突っ込んだ。

雑踏に戻る。今度は人の少ない道を選び好みつつ帰路につく。

やはり時々後ろを振り返る。誰かにつけられているというよりも、誰でもいいからとナイフを持った人間がいなかどうか確かめるため。そして、誰でもいいと黒い霧のようなもやもやを抱えて生きてきたのがまさに自分だからこそ、そのような存在がいるのではないかと恐れそれを信じていることにどうしようもないものを感じる。でも、そういう黒い霧のようなものを抱えながら誰もが正しい道を外れたくないと必死にもがいているんだ、だからわたしも大丈夫なんだ、と言い聞かせて、しっかり歩こうと思った。

過去の記事であまり人に読まれていないものも少しずつ貼り付けていきます。。



堀江敏幸という作家の名前は、芥川賞受賞者として、もしくは、わたしが特によく読む須賀敦子に関するムックかなにかで名前を見た…という程度に知っていて、でも作品自体は長らく読んだことがなかった作家だった。芥川賞受賞作は「熊の敷石」というタイトルで、このいかにも地味なタイトルに騙

されて、

まさかパリとかフランスとか、そういうわたしのようなスイーツ（笑）なアタマの女性が喜びそうなキーワードを含む書物を書く人間だとは知らなかった。

「熊の敷石」という渋いタイトルと、堀江敏幸という、真面目そうな名前（受賞したときに、例えば彼は元ジャンキーの、現在はクラブでDJをやってもいる、しかも大学教員であるとかいう少し風変わりな経歴があるという報道でもあれば興味を覚えて読んだかもしれないが）から連想するのは、

北海道などの寒冷地でひとりで孤独に暮らす猟師である老人の、熊の近くに暮らす（熊は狩猟の標的でもあり、身近に感じる隣人でもある）毎日を淡々と描いたような、そういうどちらかということ、地味で起伏のない小説だった。



しかし、あるときほんの気まぐれに本屋で手にとってぱらぱらとめくった堀江氏の作品には、パリやブルターニュ街やマルセイユといったような憧れをかき立てるような単語が並んでいた。

もちろん、例えばわたしが須賀敦



子を読む理由は、主な舞台が憧れの海外の土地になっているという

単純な理由だけではなくなっているが、それにしても、多くの読書は、自分のミーハーな根性を少しでもくすぐる要因を持つ書物から始まることが圧倒的に多かった。

だから、老人と熊の話を書いているとばかり思っていた堀江氏の書物にまさか、こういうわたしの浅はかな少女趣味をくすぐる単語が並んでいるとは！と驚いたし、今まで読んでこなかったことが少々悔しかった。



そして、その場で「郊外へ」を買い求め読んでみたわけだが、実際には、キラキラ輝く花の都パリのミーハーなガイド本にもなりうるようなエッセイではなかった。無論、芥川賞作家の書くパリであるからして、そんな単純なうわべだけの本であるわけがないし、たいていの小説好きは（特にわたしは芥川賞作家を好む傾向に

ある）、その一筋縄ではいかないだろう「なにか」、冥くて夢くてねじ曲がった視線で書かれているだろう世界を期待して読むものだ。

須賀敦子の本だって、憧れのイタリアについて書かれている…と、手にとってみれば、そこにはただ明るいだけじゃない味わいの文章世界が広がっているから、だから、また次々と読みたくなるという経験をしている読者は多いのではないか。

さて、そんなふうにして出会った堀江敏幸の本だけど、それにしても、わたしの唯一知っているパリについて、こんな場所で再会するとは思っていなかったし、誰かがこのパリに焦点をあてて書いている可能性について考えてみたこともなかった。

「知っている」などと少々見栄を張って書いたけれど、わたしが知っているというのは、

そういう場所があったのか、という圧倒的な一度きりの体験による印象のみである。初めてのパリは、初めての海外旅行でもあった。一週間でパリとロンドンを駆け足でまわる添乗員付きのパッケージツアーというのが、海外初体験だった。コンコルド広場に面した大きなホテルに泊まって、エッフェル塔や凱旋門などの観光地を、添乗員のあとをぞろぞろついてまわって眺めた。ほとんど思い出が残っていないし、写真にエッフェル塔と一緒にうつっているまだ若いわたしがあるだけだ。

二度目のパリは、一応個人旅行だった。30歳を過ぎて無職になっていたわたしは、日本を発ちローマに入り、南イタリアを3週間くらいうろついたあと、最後の一週間で過ごすためにパリに入った。チケットはパリアウトというものにしたのだ。そのひとつきの旅は、ドミトリーなどを渡り歩く、いわゆるバックパックをかついた貧乏旅行で、わたしはパリでも、相部屋のドミトリーを予約していた。どちらかというとイタリアをメインに組んだ旅程だったし、パリは最後の骨休めくらいにしか考えていなかったのだから、そのドミトリーが一体どんな場所にあるのかもよく知らないまま、安さだけに惹かれて予約をした。韓国人の女性が経営する日本人だけを客としたドミトリーといえば、知っている人も多いのかも知れない。指定された地下鉄駅に着いて地上に出てみると、そこはいかに、なパリではなかった。

街並みは雑然としていて、道をゆく人は、白人よりも有色人種が多い。そして、パリの中心部にだけいるとそんなものが存在するとはにわかには信じがたい、無機質なコンクリートでできた集合住宅の群。

一応、19区だったか、〇〇区に入っているのだから、東京23区内とでもいうような感覚でいた。

しかし東京23区にも中央区と板橋区の差があるように、ここ、パリでもどちらかといえばこの19区は移民を中心とした人間の棲む、ほとんど郊外とでもいう場所だった。わたしはドミトリーのあたりの風景を見て、ガッカリした…ということにはなかった。なんだかむしろ安心した。

それまでおとぎの国のようなアルベロベッロやら、魔窟みたいなマテラという、現実離れした街にばかり滞在していた。ローマでの宿泊先も、テルミニ駅のすぐそばの賑やかな場所にあるドミトリーだった。ずっと夢のなかを歩いているような感覚。人の棲む場所というよりも、舞台の書き割りの中を演じる役を持たないままおどおど歩いて

いる…。

しかし、このパリの19区は、人間が棲んでいる感じがした。

人々はスーパーでより安いものを買い、粗末なテーブルと椅子で日常的な食事をして
いる。

テラス席で昼間からシャンパンを傾けて生のオイスターに舌鼓を打つ…と言う人種は
みかけない。

その19区から地下鉄に乗って、中心街にいった観光らしきことをしていたが、
結局わたしはその旅から戻って、

思い出すのは華やかなシャンゼリゼ通りではなくて、

ドミトリーのそばの、庶民的なパン屋や、薄汚れたベトナム料理屋のことばかりだった
。

でも、その郊外に「魅力を感じるから」、そのあたりの記憶ばかりが蘇るとはなかなか
納得できなかった。

パリにはもっと見るべき物がたくさんあったし、記憶に残るなら、あの壮麗なパッサ
ージュの中の古い芸術写真を扱う店先だったりするべきなのだった。

どうも釈然としないパリでの一週間を、あっという間に解放してくれたのが、この堀江
敏幸の「郊外へ」という書物だった。

要するに、郊外には魅力がある。

そう言い切っているこの本に、ぎょっとしはしたが、でも腑に落ちた。

な—んだ。だからわたしは19区のことを忘れられないのか。と。

というわけで（ここでいきなり端折る…）、

堀江敏幸の本をなるべく沢山読もうと思っているこの夏。という話でした。

1999年に書いた小説を。これは新聞に載せていただいたものです。

「異星人」

《...一面飴色だ。つやつやと木目を際立たせるワックスのてかり、天井から注ぐ水銀灯の昼光色と相まって、ここはいつでも季節や時間というものもなければ、僕という個性も徐々に奪われていく、そしてどんな思惑や思念すら四角く密閉してしまう、小さいながらも抗いがたく頑迷な世界だ。

発汗と呼吸に伴う筋肉内の燃焼の熱にぐつぐつと煮溶かされていくように、僕は静かに希薄になってゆく。コートという檻に閉じ込められて...》

隆はさっきからしつこい耳鳴りのような声を聞いていた。バスケット・シューズがフロアを擦る悲鳴じみた連続音や、「ナイス・シュート」といったお決まりの下級生の声にまじってそれは確かに聞こえてくる。

男の声かと思うと、いくらか甘い音色にとってかわり、女の声かと思えば、妙に野太く歪んでしまい、つかみどころがない。

練習中に注意力が散漫になることなど考えられないことだ。

隆は軽く頭を降った。4年生の自分にとって就職に直結する大事な試合が控えているというのに。隆のようなほとんど職業的にスポーツをやってきた輩にとって、履歴書の隅に特技として控えめに記されるようなそれとは違い、バスケットボールの実業団チームを所有する大手企業のスカウトマンの目にとまることがそのまま就職活動となる。

ふと、パスがまわってくる。

油断していた隆はそれでもなんなく相手をかわし、ゴール下へ深く切り込む。

数枚の壁に阻まれて、やむなく一旦ボールを返す。

《.....狭いコートで10人もの選手がひしめきあうバスケットに偶然や幸運の入り組む余地はさしてない。

精度の高いパスと確実なシュート、味方同士何百回と繰り返し予行されたフォーメーション。

想像力やトリッキーさはむしろ邪魔なだけ。

最初は誰もが手品のような奇抜なプレーに眩惑されるが、派手に体力を消耗したわりに

その見返りは小さい。

畢竟、身体は自然に一番効率のよい方法を覚えてゆく。

予定調和的に僕はそこへ全力で駆け込み、最良の力加減でボールを置いてくる。ステップの歩幅も手首のスナップも完璧だ……」

いつも通りのありふれたプレイだった。思い切り地を蹴る。しなやかな筋肉のバネは隆を誰よりも高く運び、その一等高みにある場所で刹那、優越の表情を浮かべるはずだった。

しかし、まだ途切れていない例の声が他でもない自分の声だと気づいたとき、一瞬何か眩しいものが視界をよぎり、隆の全身の筋肉が不意に立ち止まった。

ぱたりと意識を失ってしまった人のように上腕二頭筋も、大腿直筋も、その他いかなる微細な筋力もすうっと魂が抜けるように……。

ことり、とボールは床に落ち、てんてんと転がった。

誰もが一瞬ぽかんとそれを目で追い、そして不審な顔つきで隆を見た。すぐに異変に気がついたのはマネージャーの塚原と言う同級生だった。

「大丈夫か？」

救急箱を持ってかけよってくる。

隆は茫然と立ちつくしたまま、首をひねって今見たものを探した。

一瞬だったけれど、だからなおさら鮮やかに瞼に焼きついた。

明らかに金属めいた輝きをもつ一条の閃光。

体育館の2階観覧席の隅に非常扉がある。館内にある窓はそこだけだ。はめこまれたガラス板の向こうを確かに銀白色の輝きを持つ何かが過ぎ去っていった。

まだ宵の口とわかる、どこか温かみの残る青白い中空が、ガラスの向こうにしん、と矩形に切り取られていた。

「UFO……みたいなもん、見た。窓の外」

隆はやっとのことでそれだけ口にした。

「斎藤一、お前慣れない会社訪問やら何やらで知恵熱でも出したんかぁ？」

それを聞いた山岸という五十過ぎの監督がからかうようなダミ声でやじった。チームメートがどっと笑う。隆は確かに数日前、監督を通じて打診のあった企業に挨拶に向いていた。

「斎藤、今日はもういい。寮に帰って一晩よく寝てこい」

監督は呆れたような、しかし半ば安堵の混じった声で言った。

気の抜けたプレーはけしからぬが、今ここで1番の主力選手に怪我でもされれば面倒だ、と眉間に寄せた皺もどこかわざとらしい。

他の部員ならグラウンドでも走ってこいと、一喝されそうな場面だったが、これくらいの特別扱いは隆にとってもう特別なことではなかった。

といっても練習を途中で抜けるのは、小学校3年生でボールを触って以来、正真正銘初めてだった。中学のとき、全国大会に出場し、高校時代はインターハイベスト4、有終選手にも選ばれた。

同世代のライバル達が怪我で離脱したり、様々なスランプで伸び悩んでいるのも余所目に隆はすくすくと伸びていった。ナショナルチームの候補に挙がった経験もあり、将来をもっとも嘱望された選手の1人なのだ。

ロッカールームへ伸びる暗い廊下で背後から呼び止める声があった。

「隆、くらく寮になんかひきこもらないで彼女とでも遊んでこいよ」

マネージャーの塚原だった。

「言われなくたって」

まだぼんやり夢うつつだった隆は、そうきりかえしたものの、その一言で初めて気がついたみたいにロッカールームで慌てて携帯電話を押した。

「何？ どうしたの、斎藤君。練習は？」

最初は怪訝な口ぶりだったが、たまたま学内に残ってレポートをやっていたという陽子は隆のいつもとは違う様子にピンときたらしく、待ち合わせた正門前にすぐかけつけてくれた。

本ばかりつまった随分重い鞆を隆は持たせられ、2人は並んで街へとさまよいでた。

確かにこんな中途半端な時間、ぼんと自由時間をもらっても隆1人ではもてあましてしまっただろう。それくらい隆の生活は今まで競技生活にのみ傾注されてきた。

しかし三月ほど前、陽子に出会った。それまでに何度か恋人はできたけれど、陽子はこれまでと何かが違う、そうはっきり感じる事ができた。

初夏のまだうすら明るい繁華街は、たくさんの人間がそぞろ歩き、笑いさんざめく声、浮かれた足音、ジェリービーンズを撒き散らしたようなネオンがきらきらと2人の行く道を明るく彩っていた。

「U F Oを見たあ？」

陽子は自分も今まさにU F Oを目撃している人のように大げさに目を丸くして、それからくすくすと笑い、やがてカラカラと口を大きく開いて笑った。隆はいつもこの笑顔を見るとほっとする。

「今思いついたんだけど、地球を初めて飛来した異星人が、俺らの練習風景をたまたま

目にするとするだろ。

彼らにはスポーツや娯楽の概念が一切ないんだ。

働き盛りの屈強な男達が憤怒の表情で走り回っている。でも俺らは何かを製造しているわけでも建設しているわけでもない。かといって戦争でもなさそうだ。これは一体、何かの宗教儀式だろうか？ってエイリアンたちは首をかしげて帰ってゆく」

「フフ、面白いこと考えるのね。でも私は思うの。何かを真剣に熱意を持ってやっている人達の場合は、きっと尊ばれこそすれ、さげすまれたりしない。斎藤君、あなたは何か今迷っているのかもしれないけど、でもね」

そこで陽子はふっと言葉を切った。

「お腹がすいてるの。何か食べましょう」

陽子は半ば強引に隆の腕をとって人ごみをぬうように前へ前へ進んでいった。

数週間後。隆たちのチームは大会でまずまずの成績をおさめ、隆自身も望み通りのチームへの入団が正式に決定していた。

練習前のやはり夕刻だった。体育館へ向かう隆の携帯電話が鳴った。遠くでカナカナ蟬の声が聞こえ、涼しい夕風が渡っていた。

「陽子？」

ひどく声が遠く感じられた。

「斎藤君、私。今、田舎の実家へ戻ってるの。こっちで職を決めたわ。さっき内定をもらったの」

「え？　だって俺が東京で働くから君もこっちで……」

「聞いて。私たちが学食で出会ったあの日。私はさりげなくあなたの隣に腰をおろして本を読んで、あなたに今何時かって尋ねたわ」

そう、それが2人の出会いだったのだ。

「あれは偶然なんかじゃないの。私、半年ほど前に、ずっとつきあっていた恋人に裏切られてひどく落ち込んだことがあった。

そんな時ふと体育館のそばを通ったの。

何気なく中を覗いたら、練習試合っていうの？

その時、あなたを初めて見た。私、あなたから目を離せなかった。

失恋で落ちこんで何もかもやる気をなくしていた自分が妙に恥ずかしくなった。何かに打ち込む人の姿って、無条件に人を勇気づけてくれるものがあるんだわ。斎藤君、あなたには人をそうさせる能力があるの。それはとても恵まれた資質なんだわ」

「俺らの出会いが偶然じゃなかったにしろ、でも君は俺を好きになったんじゃないのか

」

受話器の向こうに静かな沈黙が流れた。その一瞬の停滞した時間に隆はどうしようもない脱力感を覚えた。

「やりたいことが見つかったの。私もあなたのように輝いてみたいから」

隆の頭をＳＦ映画によく出てくるようなＵＦＯが静かに横切っていく。

銀色の船体は青い地球を今、離れようとしていた。真空の闇を無垢な瞳の異星人たちはまた新しいものを探しに旅立っていくのだ。そう、エイリアンは陽子だったのかもしれない。そして陽子の瞳にうつっていた自分を今は信じたい。

隆は大きく息を吸うと体育館へと力強く足を踏み出していた。

(完)

まだ文字として書き付けられてない本にもなってないただの物語だった頃の、「ねじまき鳥クロニクル」や、「海辺のカフカ」や「1Q84」たちが、自分たちが小説という手段で書きあらわされて本として出版され多くの人々に読まれたいと願っていた。

物語の存在意義というのは、誰かに読まれることにあるので、なんとしても誰かに文字などに（文字ではなくて漫画や映画、芝居としてということもある）置き換えてもらわなくてはならない。できるだけたくさんの人に読まれることも良しとされている。

だから彼らは必死で自分たちのことを文字にして書いてくれそうな人間を探した。

注意深い審査が行われて、ついに彼らは一人の男性を選出する。

彼らは、その男性がある晴れた日の神宮球場の外野席でくつろいでいるところに、いきなり入っていく。自分たちを書いてもらうための人間が見つかった。とりあえずこいつに入ってみよう。

そして男性は突き動かされるようにして原稿用紙に向かって小説を書き始める。

「風の歌を聞け」という物語が一番最初に文字として書きあらわされた。

男性はその物語をとてとても上手に書いた。

だからその小説は、大きな文学賞を受賞して、一冊の本になる。

物語たちは喜んだ。これでこの男性が順番に俺たちのことを文字で書かれた小説というものに仕立て上げていってくれるだろう。あとは待つだけだ。

物語たちの選択は間違っていなかった。

男性は小説を書くことをすっかり気に入ってしまい、それまでやっていた商売をやめて、小説を書くことを専業としはじめたのだ。さらにもっとよいものを書きつづけるために、身体まで鍛えてくれている。その物語の一族たちはいい男性を選んだものだ喜び合った。これまで「1Q84」までが文字にされて送り出されている。一族でまだ小説になっていない者たちは、静かにそのときを待つ…。

というようなことを妄想する。

物語の一族がこの世には無数に存在して、彼らは一族ごとに、自分たちを書いてくれる専用の人間を探している。

どの一族に選ばれるのか。選ばれない場合もある。

わたしがすでにいくつか書き上げた小説の「原型」であった物語たちは不満を持っている。こいつに書かれたばかりに、物語の本質が損なわれているうえに、ちっとも面白くないので、たくさんの人間に読まれることもない。こいつを選んだのは間違いだった

のかもしれないと。

でも、小説を巧く書ける人間はそれほどたくさんいない。

とりあえず、この女は書きたい気持ちは持っている。それもとても強く。まだ下手かもしれないが、もうしばらく我慢してこいつに書かせてみるか。書きたいと思っているだけマシな部類だと、一族の者たちは仕方なく我慢する。

小説家は小説を自分でつむぎ出していると思っているが、
実は物語たちに選ばれているのではないだろうか。

・・・というようなことをたまに考えてしまうのだった。

それは小説を書く人間が努力してもしなくても同じだよ、っていう意味で考えているわけでもないし、

成功している作家が、それは実力じゃなくて物語たちに選ばれたただだよ、とかいう謎の主張をしたいわけでもない。

純粹に楽しみとしての妄想なのです....。

小説を書いているということが恥ずかしい。



気分はほとんどもう冬休みで、必要のない家事はサボり気味にしよう...と考えていたにも関わらず、わたしは起床してからずっとキッチンに立っていた。自分が勤勉な家事労働者だと自慢したいわけではない。主婦になってからは、どこかに勤めしてお金を稼いでいない代わりにせめて家事は真面目にやっているのよ、と主張したいような気分になるこ

とは、もちろんある。でも、誰に対してその主張をしたいのかよく判らないし、誰かがそれを褒めてくれるわけでもないことにも気づいていて（しかも褒められたとしても嬉しいわけでもない）、結局自分が他人から見て家事をサボっている主婦だと思われるのが不安だから、自分の安心のために「わたし家事をこんなにしてますよ！」とか言いたいだけだとも気づいた。そんなのは非常につまらないので、そういう主張を外に向かって叫ぶのはやめにしようとも最近思っている。実際に、家事が足りてないかもしれない・・・とびくびくしているときに限って、こんな家事をした！あんな家事をした！と自己満足のために例えばツイッターで呟いている傾向にもある。



でも、結局今朝のわたしは、キッチンであれこれと家事をやっていた。

家族のために献身的な母であり妻でありたいのかな、自分とは、そういう問答を繰り返しながら、というのが滑稽だが、つねに自分の立場を疑い、それでいいのかつきつけて生きないと不安なだけだ。

で、結局、わりとこういうことが好きなんだ

ろうな、とは思った。

手を使って、野菜を洗ったり、切ったり、鍋に入れたり、かき混ぜたり。

料理って、すごく手を使う、手仕事だ。

わたしはあと、針と糸を使うような手仕事も好きだ。

手仕事をしていると無心になれる。無心になって手を動かしているんだけど、無心の中からも創造が生まれている。躍起になって、斬新なものを作ってやろうと狙ったわけではない創造。ふと気がついたら、すごくきれいな盛り付けのサラダができあがっていた

ときなどに、はっとする。

なにかを自分が作れると思うようなことは思い上がりに近いものかもしれないと常々、
「わたし、小説が書いてみたいんです」という発言をしたりするのが気恥ずかしい。

でも最近その「恥ずかしい」と感じる自分の自意識過剰さに、また呆れる。

なにかを作りたいと思って、ほとんど日常的に作っている人々にしてみれば、

「芸術」という大層なものというよりも、

ひたすら日常の延長線にある行為を楽しんでいるだけなのではないか。

色のきれいなサラダを作るように、

パソコンのキーを叩きながら、

わたしは楽しんで文章を打っている。

たぶん芸術というものからはほど遠い。



カルチャースクールに通う主婦が楽しみとして小説を書いているだけなんだから、
大仰に恥ずかしがる必要もなく、
あっけらかんと、

「わたし、小説が書いてみたいのよねー」と
か周りの人に話せばいいのだと思う、と自分
に言い聞かせる。

「文学を志していて、書いた小説を文学賞に
投稿したりしている」人というのは、自分がひとかどの芸術家なんだと壮大な勘違いを
した人だと思われる気がして、片身が狭い気がしていた。

でも、まあ、主婦の手慰みなんだから、あまり肩肘張る必要はないわよね。

フェルト細工やパッチワークに凝っているのと同様なんだから。・・・と自分を暗示に
かける。

なぜ小説を書くことが、手芸をやることよりも一段高いことのように考えて自分がそれ
を追求したいと思うことが恥ずかしいと思うのかといえば、かつては帝大を出たような
頭のいい男性が主に小説を書いていたので、それは確かに高尚なことではあったはずだ
。

でも現代では誰でも小説家になりうるし、

好きで書きたい人は書いている、というスタンスで良いのではないか。

しかしそこまで割り切って、誰彼にでも、小説が書きたいの、と無邪気に話すことので
きないことについて、

ぐるぐると書いてみている。

ただ、フェルト細工をしているときよりも、小説を書くという行為のほうが、より自分の生身に近い部分を露出させるのは確かだろう。それはほとんど裸をさらすように恥ずかしいことだと、最初の頃は考えた。今では少々麻痺していて、書いたものを恥ずかしげもなくネットに流しているが、

生まれて初めて自分の書いた小説を誰かに読んでもらうとき、ほんとうに緊張したことを思い出す。

そうだ、自分の一番奥深い場所をさらけ出すという行為だから、小説を書くのは恥ずかしさを伴うんだな。なにも文豪と同じことをしているのが身の程をわきまえよと思われそうで恥ずかしい、というだけじゃないんだな。

しかしこの恥ずかしさはある程度、小説を書くために必要なものなのだろうな。

恥ずかしさと折り合い、うまくつきあいながら、これからも小説を書いていくんだろう。堂々と「わたし小説を書いてみたいんです」とは言えないで恥ずかしがったまま…。

（ネットだと言えるのはどういうわけなんだろうか。笑）



年の瀬の商店街を歩く。引っ越してきて間もないし、それほどこの辺りの街のことをよく知らない。しかしトーキョーの街は誰にでも開かれた気安さがある。旅人感覚の者も地元住民気分の者も等しく受け入れる。普段は大型スーパーで買い物をしているよそ者のような顔をして、だから地元商店街では買い物しない言い訳にしているすまし顔を、年末の雰

囲気の中では、いきなり「ちょっとこういう商店街も興味あるなあ」という旅人のような顔にチャンネルを合わせる。途端に声をかけてもらえる。

「もう大根は買ったの？もうすぐこれ売り切れちゃうけど、買っておきなよ。お正月用の大根が並び始めたら高くなっちゃう」

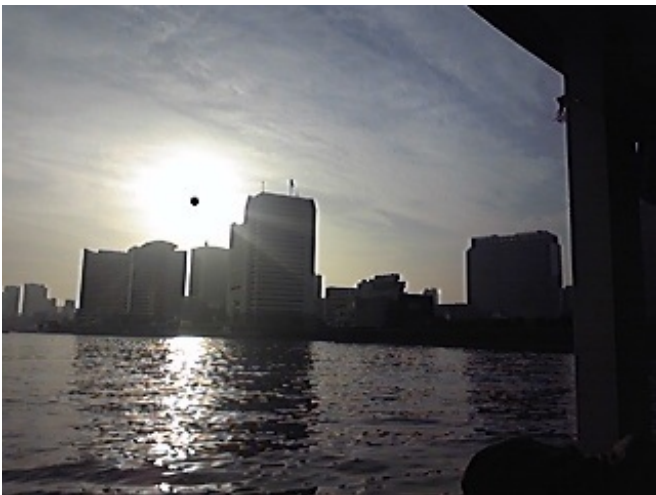
と、太くてみずみずしい大根をかかげて八百屋のおばさんが言う。わたし、大型スーパーの袋にぎっしり葱やら白菜やら詰めているのを持っているのにだからといって邪険な顔はしないのね。

「あ、おいしそうな大根、それください」

「膾にするといいわよ」

「そうします」

そして大きな大根がひとつ手に入る。



お次は花屋さんの前だ。

立ち止まってじっと眺めていると、

この花屋さんにこんな綺麗なお嬢さんがいたっけ？というまだうら若い女性がエプロン姿で近づいてくる。そうか、この花屋のお嬢さんで、独立して今はここに棲んでいないけれど、年末だから実家に帰ってきて、手伝っているのか。こころなしか、いつも花屋に立

っているおばさんと顔が似ている。

わたしが迷っていた観葉植物の小さな鉢の中から、

「これ、これお勧めなんです。すごく丈夫ですよ。ほら、冬だからみんなすこし弱っているけど、この子こんなにたくましい」

と、ひとつを指差してくれる。

それはとっても小さな葉がもしやもしやと渦巻いているような植物で、それまで気がつかないくらい存在感のないやつだった。でも言われてみると、その数ミリしかないだろう小さな葉っぱは、どれも水分をたたえてはちきれそうだった。

「じゃあそれください」

と、それを包んでもらっている間に、小さな葉牡丹が目に入って、「あ、これも」と追加してもらう。

「あ、これすごくかわいいですよ。大きな葉牡丹って若い人のうちに置くのは難しいけど、小さいのだったら洋風に見えてかわいい」

と、親しげに言葉をつなげてくれる。普段は、この女性、どんな仕事をしているんだろう？それともまだ学生さんなんだろうか。

その二つの鉢で、お代はたった350円だ。

銭湯の前で、地元のおじさんたちが賑やかに挨拶を交わしていて、その隣のコインランドリーのテーブルには、近所の焼き鳥屋で買ってきたらしい焼き鳥とビールを楽しんでいる若者が二人いる。

魚屋の前にはおせち料理がぎっしり並べられて、裸電球がぜんぶをギラギラと照らしていて眩しい。



関東の人といえお正月はマグロらしくて、マグロの刺身の赤も綺麗に並んでいた。

お肉屋さんも店の前にワゴンを出して、オーダブル用のハムなどを並べている。

わたしは旅人の目でものめずらしそうにそれを眺める。買い物するときだけ、ちょっと地元寄りの顔つきをして、でも、この辺りの生まれじゃないので普段からの常連ではないという

雰囲気を出しながら。でも、そういう客に慣れているらしいこの商店街の人々は、一見さんにも割り切って愛想よい。もしかすると、商店街の人たちですら、ここの生まれではないのかもしれない。八百屋さんのおかみさんは、嫁にきて30年経つけれど、しかし案外生まれはどこか北のほうなのではないか。だって肌があんなに白い。

トーキョーには生まれがトーキョーじゃない人が集まっているし、3代前から江戸っ子だいというのはそれはそれで価値があるけれど、絶対的な価値でもなくて、むしろ生まれがどこだか判らなくて、そもそも出身地などなくて、宇宙人みたいに地球のどこにも

所属しないという顔で生きているのがトーキョー人らしいような気がする。

宇宙人でもあるトーキョー人たちが好き気ままに街をさすらう。

行き場所がないというより、好き好んで、この自由な土地トーキョーを選んできた。



そんなエイリアンたちが集う場所は、ひとりでもちっとも寂しくないよ。

家族がいたって、ひとりはひとり。

どうしようもなく個の孤を抱えて生きている生命体にとって、とってもやさしい都市、トーキョー。

時々高い場所に上って故郷の星を見上げてみれば、

天にも銀河が輝き、そして地上の大海原のようにうねるおびただしい灯りもまた、仲間たちの存在を示している。

何億光年をはるかかなたへの旅路に、トーキョーという街があった、

という伝説が、羊皮紙に刻まれた膨大な物語のなかに、確かに書かれているはずだ・・・。

☆写真は浅草からお台場まで船にのって眺めたトーキョーです。去年の秋、まだあまり歩けない娘を抱っこしてひとりで乗ったのです。今思うと大冒険だったな。

今朝、お風呂に持って入って読む本に選んだのは須賀敦子全集の1だ。

新年最初に読む本についてことさらこだわりたいという気負いがあったわけでもないけれど、どうせなら一番好きな本を読もうと、すなおな気持ちで選んだのがこれだった。ほとんど迷いもなく、ずっと本棚に手が伸びて、それは決まった。

須賀のエッセイは、どれが（どの時期のものが）一番完成度が高いのか、という判断が例えば専門家のうちでなされているのかもしれないしそういった判断について書かれたものを読んだことがあるような気もするが、とにかくわたしはすなおな気持ちで好きだなあと選んだのが、ごく初期の、というか一番最初の本、「ミラノ 霧の風景」に書かれたエッセイだったことになる。

もちろん好きな本、というのはそのときの気分に左右されたりもするし、自分の生きてきた、各年代によっても異なったので、それは絶対的なものではなくて、あくまで、そのときの限定的なものであるかもしれない。

でも、ここ最近読み返す頻度を振り返っても、そして今朝の迷いのないまっすぐで素直な気持ちからいっても、ここ何年かまとまった時間のなかで一番好きだと感じているのが、「ミラノ 霧の風景」なんだなということに、気がついた...というか、改めてしっかりと認識した。

作家にとって処女作が一番のものになる、という話はよく聞く話だ。処女作は、デビューする前の、自分のためだけにある時間のなかで（それはデビューしてからの時間に比べるとほとんど永遠にも等しい）、渾身の力を込めて、そのときに持っているものをすべてつぎ込んで書いたものだから、それは素晴らしいのだ、と。プロとしてやっていくことになると、締め切りはある。それに持っているネタをひとつの作品に全部つぎ込むのはもったいない。少しずつ小出しに使わないといくつもの連載をかけもつことができないということもあるだろう。

だから、処女作はその作家が生み出す最初で最後のすごいものになる...、というのはなんとなく、真実であるような気もしてしまうし、でも、必ずしも真実ではないとも思う。

デビューした作家がそれ以上のびないとしたら残念なことだ。それはとりもなおさず、万が一自分がデビューというものをしたら、そのときに書いたものが最高の作品になってしまうという恐れにつながる。

もちろん、そんなことはないとも考えることもできる。

デビュー作を超えるものをたくさん書いて着実に成長している作家はたくさんいる。
ただ、やっぱり、処女作というものは、作家のスタート地点ではなくて、ある到達点だと
見てしまう目は、わたしにもある。

そうすると、デビューはできるだけ先延ばしにしたいという誘惑がわたしを捉える。

（本当にデビューできるのかどうかは別として、そしてデビューしたいと望んでいるの
かどうかは別として、ここでは）

もし自分が作家というものになれるとしたら、

最初の一冊で、世の中の読書人たちがわたしに判断をくだすだろう。

そうすると、今、なにかの間違いでデビューしてしまったら、

今、上出来だと思って書いているものが途端に惨めなものに思えてしまう。

こんなものがわたしの最高作ではないんです、もっといいものが書けたはずなんです、
と言い訳をしたくないか？

その点、須賀敦子は、デビュー作の「ミラノ 霧の風景」が、名人芸に達していると認
められた。すでに完璧に完成して作家として1冊目を出したのだ。

これは、なんとも羨ましい話ではないか、と、全然レベルも違うわたしがため息をつい
てどうするとつつこみつっ、でも、やっぱり憧れてしまう。

自分にはもっといいものが書けるはずだ、って思っているだけで、そんなことはなくて
、デビューはできないまま時はたち、やがてそのまま年老い死んでしまう、というのが
大半の、なにかを書きたいと願う人の人生だ。

だから、出し惜しみをしている場合ではない。今書いているものが最高だと信じて発表
するしかない。もっといいものが書けるという幻想を持ち続けて一生を終えるよりは若
いときに、とにかく今書けるものを発表するべきだ・・・と、わたしもそう感じるので
、書いたものをどこかに応募したり、またはネットに流して誰かに読んで欲しいと願っ
ている。

でも。

須賀のように。

須賀のように60歳になるまで、言葉を大事に大事にためておいて、

それで60歳で花が一気に開いていくように、全部を書ききることはできないか。

その代一作が、名人芸だと讃えられるほどまでになるまで、自分を研鑽し続ける。。

・ ・ ・ ・ ・

・・・そんな埒もない夢を、わたしは時々する。

ほんとに埒のない夢。

デビューという心配はせめて自分がなにか実績らしきことを残してから心配すればいいのだし、ほんと笑われるような心配だ。

でも、須賀の一冊目を読んでいると、
初めて人に読まれるものを完璧にできたら、という夢は罪なくわたしを甘くとりまく。

いつか完璧な文章が書けるに違いない、今はまだ書けないけど・・・というのは、「自分は完璧な靴を履いてないからだとかこちながら」歩くことに似ているので、そこでまた自分にひきよせていた思いを須賀に戻す。

「きっちり足に合った靴さえあれば、じぶんはどこまでも歩いていけるはずだ。そう心のどこかで思いつづけ、完璧な靴に出会わなかった不幸をかこちながら、私はこれまで生きてきたような気がする」と、須賀は「ユルスナールの靴」の冒頭でこの有名なくだりを述べているが、ふと、須賀の言う「完璧な靴」というのは、彼女なりの「じぶんにとって完璧な文章」だったのではないかと、そんなことも思う。

紙から電子の時代において、
デビューという言葉は徐々に意味を持たなくなるかもしれない。主要な文学賞にまだ威力はあるような気がするけれど、でも、それもどうなるのかよく判らない。
それでも、須賀の1冊目を手にとって読むと、自分がいつか、完璧な靴をはいて歩くことができるのかどうかということを考えずにはおられない。

でも今日の読書は、
ほんとに純粋に楽しく、心地よく、とっぴりと須賀の文章にひたったのでした。

ある任務のために、あるいは自発的に、誰かを尾行したり常に行動を見張るということに、ひどく憧れて生きてきた。探偵の仕事、というよりは、もっと想念のレベルで誰かに寄り添って生きるということは、ひどく楽しいことだと思えた。ちょうど大人になる年齢になる頃に、ストーカーという言葉が登場して、そのことはわたしをがっかりさせた。明らかな犯罪行為を指すだけでなく、好きな人に執着してちょっとつきまとっただけで、「ストーカー」だと糾弾されるのは、面白くないなあと思った。

思春期のころに、誰だって好きな人の机を放課後誰もいない教室でこっそり覗いたものではないだろうか。

級友のなかには意中の男の子の家を探し当てて、だからといって訪ねていくわけでもなくて、その家から学校までの道順を自分で歩いて普段彼が見ているであろう風景をなぞったり、生活範囲にあるコンビニや本屋をチェックして、そこで待ち伏せしたりするわけではなくて、普段どんなふうにいるのかを夢想するだけでも楽しめるという目的のためだけに、幾多の情報を揃える者も結構たくさんいたように思う。

一度など、部活が一緒のチームメートの女の子が、練習試合で一目惚れした男の子の実家を探しあげるために、その男の子の棲む市町村の電話帳にのっている彼の苗字の家にかたっぱしから電話をかけて探し出したことだってあった。（田舎だからできたことかもしれない。人間の数の多すぎる都会では無理だったかも）

結局、その男の子の親戚の家にかかり、そこのおばちゃんが「●●ちゃん（目当ての男の子の名前）ね？うちの親戚よ」と親切に●●ちゃんのうちの電話番号や住所を教えてくださいました。

その電話を、なんと学校にある公衆電話で、友人みんなで10円玉を寄付しあって共同作業でやっていたものだから、見つかったときは、みんなで「わあ！」と歓声をあげた。そしてくだんのチームメートは、その住所宛に年賀状を書いた。結局電話を直接かけたことはなかったらしい。男の子からは毛筆の達筆の返事が来て、それはバスケット部のチームメートの間を物々しく回覧された。もちろん彼女は宝物としてそれを大切にした。

（後日談があって、その女の子は高校生になるころにはすっかりその男の子への熱が冷めてしまった。そして5年ほど前、わたしはmixiのあしあとをふみかえしてみれば名前に見ええがあった。なんとそれはその毛筆で返事を書いた、例のチームメートの女の子の好きだった男の子だったのだ。わたしは富山県関連と、バスケット関連のコミュニティにたくさん入っていたので（社会人になってから富山県のバスケのクラブチームに入っていたことがあるので）、その関係からわたしを踏んだらしい。わたしはすぐにダイ

レクトメッセージを出して、あのときの思い出を語った。いかにもそれは僕です、懐かしいな、と返事がきた。それ以上の交流は続かなかったけど)

ネットのなかった時代に、こんなふうにおおらかに電話帳や電話や足をつかって人捜しがなされていて、誰もそれについて「ストーカーだ」と目くじらをたてることもなかった時代はとても良かったなあとと思う。

好きになった人、それは異性に限らずファンの作家や役者さん、音楽家など、その人について知りたい！と願うことは自然な感情だ。

相手にものすごい精神的苦痛を与えるのは問題だけど、自己完結的にひっそり誰かを追いかけて回す人生って、なんだかわたしは好きだ。恋愛なんて片思い時代は自分ひとりだけの妄想のことを指すわけだから、いかにそれで豊かに遊べるか、だと思う。

妄想だけだと恋愛じゃない？

わたしは妄想こそが恋愛だと思う。

片思いが終了したら、それは人と人の一対一の関係性に重きが置かれて、個人の妄想はすみに追いやられてしまうもの。関係性を現実として大切にするときには妄想は今度は邪魔になってしまうしね。

妄想は片思い時代だけの特権だ。

恋愛に限らなければ、ファンである対象への思いをずっとあつためるならば、それは妄想と遊ぶことに他ならない。そのときに、ちょっとした調査とか、物陰からこっそり相手を見つめることがあっても、相手に危害が加えられなければ、それは罪のないことだとわたしは思うのです。昨今ではネットでの発言でも逮捕されちゃったりするからファンの作家などへの行きすぎた思いを書くのもためられますがね。。妄想で逮捕される時代！

お気に入りの小説のお気に入りの箇所をつなぎ合わせるようにして生きていけたらいいと時々夢想する。特に気に入った箇所は、本のページから破りにとって肌身離さず持ち歩きたいという誘惑があったが、気に入りの本を穴だらけにするのはさすがに抵抗があったし、だからといって好きな本を全部持ち歩くこともできない。手帳に抜き書きして持ち歩くということもやってみたが、わたしの肉筆によって書き換えられると、それはまた別の物語をはらんでしまう。だからわたしはそのページをコピーして、例えばそのひと段落をくりぬいたりして、スクラップしていく方法を最後に採用した。大学ノート一冊分に貼り付けられたその断章の集まりを持ち歩いているとわたしは安心した。

ノートはあまりにも繰り返し読み返されたため、ランダムに貼り付けられていった断章たちはやがて、その順序によって別のある長さの（大学ノート一冊分だ）物語として息づいてきているのをわたしは感じていた。

最初そのことを厄介に思ったが、もうそれらは切り離しがたく結びつきはじめていた。やがて、わたしは、この断章の繋がりこそが、世界で最高の書物であるという確信を深めていった。

わたしにとって至上の物語から抜粋した、もっとも優れた箇所たちだ。わたしにとって最高の書物であるのは当然のことだったが、やがて他の人たちにとってもこの本がそうであるに違いないという考えがわたしを支配しはじめる。

わたしは、この切り抜きの連なりを一冊の本として出版できたらいいのにと思っている。

世界最高峰の小説の、しかも最高の部分だけを連ねてある。

妥協しないでわたしが選び抜いたこの断片集をわたしだけが読んでいるのはもったいないような気がする。

しかしこの本を誰かにすすめるのはあまりにも馬鹿げていることも知っている。

世界で最高の書物をまさかわたしが所有していると誰が知っていよう。

このわたしの、布でできた鞆に入れられている、古いノートが、そんな貴重なものだと誰が信じよう。

しかし、真実とは往々にしてそういうものである。

古い一冊のノートが世界で最高の書物であるという、そういうような真実で世界は成り立っているのだ。

去年義母と夫と娘と一緒に一週間滞在したハワイ旅行記をやります。



6月某日

ホノルル空港に降りたって、小規模で古めかしいターミナルを見て拍子抜けしたし、それで一気にリラックスできた。もっと近代的な設備がととのった空港を想像していたのだ。

ホノルル空港の第一印象は暗いということだ。

ところどころ木製のものが目立つ

せいだろうか。ウッディな手すりやら階段やはくすんだような茶色だった。

最近の巨大空港は広いガラス張りからたっぷりと陽が差し込んだり、壁などの色は真っ白で、近未来的で無機質な印象を受ける場合が多かった。

だから一日4000人もの日本人が降り立つホノルル空港もきっとさぞや未来的な場所だと予想していた。

その木のぬくもりに満ちたハワイの空港は、ハワイにまだ渾沌と渦巻く原始的で呪術的な空気のはじまりなんだ、とわたしは一瞬で悟ったように思う。

村上春樹の「走ることに僕が語る」の冒頭で村上はアメリカ東海岸の大学町の蒸し暑さから逃れてハワイで過ごすと書いていた。なんでまた暑い夏にハワイなんていくのか？とアメリカ人の同僚達に言われたそう。多くのハワイにいったことのないアメリカ人たちですらハワイについては結構無知なのである。

村上は、ハワイの夏がいかに快適かを書いていて、そのことだけはわたしの頭の中にくっきりと残っていたものだ。しかしアメリカの大学町のインテリたち同様、島ごと人工の巨大なリゾート地といったハワイに、実を言うとそれほど良いイメージを持っていなかった。

自然と共存どころか自然のなかの一部としてひっそりと過ごせるような沖縄の離島に魅せられていたので、ハワイはどこか自然を蔑ろにした土地なのではないかという先入観があった。



アフリカのサバンナをライオンと



歩くような旅ばかりしていた職場の旅の達人といった逞しい女の子である祐子ちゃんも同じように、どこかハワイを軽んじるとか疎んじていた気持ちがあったという。そんな祐子ちゃんがお姉様の結婚式に出席するためにハワイに行くことになり、お姉ちゃんのことは大好きだからハワイに行くことは

全然イヤだとは思わなかったけれど、旅先としては全然期待しないで渡ったそう。ところが期待しないで行ったことがかえってよかったのか、祐子ちゃんはすっかりハワイに魅せられて帰ってきた。開発は進んでいるにせよ、ハワイにはまだまだ色濃い自然が残っているし、とにかくいい所でしたよ、makeanovelさんもぜひぜひハワイにいらしてください！という祐子ちゃんの澄んだ声を思い出していた。

えー？祐子ちゃん、出発の前はあんなにハワイなんて・・・っていうふうに言ってたじゃない。わたしは釈然としないながらも、祐子ちゃんがそんなにまで言うのだからきっとなにか魅力があるんだろうな、とは認めざるをえなかった。

しかし自分で行ってみるまでは...と、どこか素直にハワイが魅力的な土地だと信じられずにいた。

結局祐子ちゃんにそう言われてからもずっとわたしはハワイを旅先に選ぶことはなくそれから8年だったかの月日が流れた。その間にも沖縄には何回も行ったし、年に1度毎年いっていた海外旅行もヨーロッパの国が中心となっていた。

そんなわたしが2010年、ハワイに行くことになった。



夫の母親、わたしにとってもお母さんとなった人だけども、義母と書かねばならない人がハワイに遊びに行くのに、わたしたち夫婦が連れて行ってもらえることになったのだ。義母はアメリカで知り合った義父とハワイで結婚式を挙げ、ハワイをすっかり気に入って、

毎年思い出の土地ハワイに足を運んできたらしい。残念なことに義父が前の年に亡くなってしまって、それでこの年は私たち夫婦と娘が一緒に行くことになった。義母はハワイにタイムシェアのコンドミニウムを所有していたので、むしろ毎年コンドミニウムを使わないとなんのために高いお金を払ったのか判らなくなる、ということだし、コンドミニウムなら広い部屋や寝室があるので、大勢での旅でも快適だ、ということだった。



外にあるホテルのロビーはお昼寝に最適な場所でした。

ホノルル空港に着いて暗いなと思ったのはターミナル内の古い内装のせいばかりではないことに気がつく。預けた荷物を持って空港を出ようとすると、今にも降り出しそうな曇天だったのだ。

あたりにはむせかえるような花の匂いがたちこめている。白いおおぶりの花が咲き乱れた樹木が空港の敷地内にあちこちあったので、その花が発する匂いなのだろうか。

タクシー乗り場までトランクを転がしていくと、乗り場についたときに丁度大粒の雨が降ってきた。南国の生ぬるい水が肌にあたってぐしゃっとつぶれる果実みたいな感触を残して伝って落ちてゆく。岩井志麻子「楽園」という小説はベトナムが舞台のとても官能的な小説で、熱帯というモチーフとエロスというのは相性がいいものだと思っていた。そうだ、デュラスの「愛人」も熱帯とエロスについての物語ではなかったかと雨に濡れながら考えていた。





しかし1歳の子供と義母が一緒に旅でいまさらエロスもなにもあったもんじゃないなと急に可笑しくなったところに、ちょうど雨が止み、強烈な日差しがタクシーの窓ガラスを突き抜けて肌を焼いた。空港からワイキキまでの道のりものんびりした眺めだった。はっきりいって田舎にきた、という感覚。

それからホテルまでのそれほど長くもない道のりで、2度くらい、シャワーのような雨がまたさーっと降っては止んだ。今度は晴れたまま降った雨は、たちどころに蒸発して、その瞬間にきらめきを帯びた。今や景色はすっかりまたたくように光がはじけていた。

タクシーの運転手さんはカタコトの日本語を話す日系人で、時々混じる英語もカタコトというか不思議に下手さを思わせる発音で、本当はなにか全く別の言語が母国語なのではないかとわたしは考えたほどだった。さらに正確な年齢は聞かなかったが恐ろしく年を取っている。日本でこのくらい高齢な人がタクシーの運転手をしている例はほとんどないのではないか。

そして車の中ではずっと演歌がかかっていた。もちろんジャパニーズ・演歌である。「津軽海峡冬景色」などと日本語が印刷されたカセットテープのケースがいくつも積んである。

「演歌大好きだよ」

運転手さんはニコニコそう言った。



しかしこっちが少し細かいニュアンスの質問をすると、そもそもそういう部分までの日本語を聞いても理解することはできないのか、理解できても返事するだけの力はないのか、単にその質問はたいして悪気なくスルーされただけなのか、なぜ演歌が好きにな

ったのかとか細かいことは判らないままだった。運転手が一方的に、しきりに演歌がいい、いい、と喋っているのを聞いている形になった。

とにかく我々一行はハワイについたなり日本にいるときでさえ滅多に聞かないようなド演歌を聴きながらホテルに向かうことになったのだった。



延々と演歌を聴いてきたタクシーを降りると、いかにも大きなホテルのロビーではあることは見て取れるが、巨大なリゾートのなかに連れてこられた、というのはまだその全貌が見渡せないためよくわからなかった。

ヒルトン・ハワイアン・ビレッジというのはオアフ島では一番巨大

なリゾート施設であるとのことだった。いくつもの宿泊施設であるタワービルがあり、いくつもの個性的なプールがあった。さらに飲食店や土産やなど、様々なお店からなるちょっとした小さな街である。



帰ってきてから振り返ってみて、ヒルトン・ハワイアン・ビレッジはワイキキビーチの背後に栄える繁華街からは少し離れているためにのんびりとした滞在ができる場所だったなと思う。ただし、刺激を求める若い人たちには少々物足りないのかもしれないと思う。若いカップルだけなら、より繁華街に近い街で最新流行の店で買い物

を楽しんだりナイトライフを満喫する方がハワイを楽しめるのではないかな。お嬢様セレブのパリス・ヒルトンはハワイアンビレッジに自分のゴージャスなコンドミニウムを所有していてもおかしくないが（だってまさにヒルトン家のものですからね）、もっと買い物に便利で夜もクラブ通いしやすいワイキキの中心街にあるホテルに泊まるのではないのかしらん。だからヒルトン・ハワイアン・ビレッジはファミリー向けの滞在場所だ

と言えるかもしれないし、実際に見かけるのは家族連ればかりだった。

タイムシェア用のタワーと、一般のホテル客用のタワーがあり、いずれもコンドミニウムタイプの部屋が多いことも家族連れに適している理由かもしれない。



成田を夜の時間に出発して8時間のフライトによって運ばれたホノルルは、出発した日の午前だった。過ぎ去ってしまったかと思っていた「今日」が巻き戻りーからやりなおせるということがとても嬉しい。帰りはまた逆のことがおきて一日損をしたような気分になるとしても。

さて部屋に入れるのは午後3時から

でそれまで時間を潰さなくてはならない。

チェックインする際には、日本語の流暢なコンシェルジュがわたしたちの滞在中の過ごし方の相談に丁寧すぎるほど乗ってくれてそこで1時間くらいかかった。リゾートが主催するプログラムの紹介をうけて、ビンゴ大会、レイ作り、フラダンス教室に申し込む。

さらにわたしと夫のふたりがタイムシェアを購入しませんかという営業のための説明会に参加するだけで、本当は買えば100ドルほどするショーのチケット2枚が貰えるというので説明会にもちゃっかり参加することにした。（もちろん我々夫婦にタイムシェアを購入する余裕などはありません。笑）

それでも長い時間が残っていた。

チェックインまでの時間を潰すためのラウンジに行ってみる。

ブルーベリージャムが練り込まれた巨大なマフィンなど、いかにもアメリカの朝食に出てきそうなこってり甘いパン類と、グアバジュースなどのトロピカルな飲み物が用意されていたので、それを朝食にした。

ソファでくつろいだりしていたが、ハワイに慣れている義母は、部屋の中の冷房よりは外の陰のなかで風に吹かれている方が絶対に心地よいと主張するのでみんなでもた外のロビーに移動した。村上春樹が力説していた、ハワイの木陰というやつである。気温は高いが湿度が低いのでからっとしているし、

風が吹き抜けるので日陰の場所は確かに申し分なく過ごしやすい。

ソファーに沈み込んだ瞬間義母も夫も娘もあっという間に眠りに落ちてしまった。



本当に、義母も夫も娘も申し合わせたように揃って熟睡してしまった。だのにわたしだけ眠れそうにない。

夜の便の飛行機の中で娘が全く寝てくれなくて、だからずっと抱っこをしたりしてわたしもほとんど寝ていない。身体はくたくたで眠気も頂点で空港に降りて、一刻も早く眠りたかったはずなのに、わたしだけ眠りから疎外されてしまった。

夫に、少しだけそのあたりを散歩してきたいんだけど...と話しかけると、ぱちっと目を覚まして、

「〇〇（子どもの名前）は大丈夫だから、散歩いってくるといいよ」

と返事をして、もぞもぞと起き上がってベビーカーに座ったまま眠っていた娘を取り外して自分が横になっている巨大なソファの背もたれの側に娘を寝かせると、またスコンと眠ってしまった。

あたりは本当にのどかな空気で、ほとんど眠りそのものだった。

何人かの白人もソファで新聞を読んだりしているが、みなそのもったりとした空気に口をふさがれて、頭まで働かないようにされてしまった人のように動きが緩慢だった。



娘から離れるのが少し心配な気もしたが、わたしは思い切って少し散歩することにした。

昼下がりのリゾート内にそろっと歩み出す。

シエスタ（午睡）という習慣は南欧のほうのものだと思うが、
南の島ではどうなんだろうか。

わたしはそれほどロビーから離れるつもりなく、
そろそろと敷地内を歩く。

ハワイという土地にそれほど期待をしてきたわけじゃないが、単純に旅に出れたことは本当に嬉しかった。出発の直前まで日々の生活に追われてガイドブックも読めないで来てしまったが、こんなに人がたくさん来る場所なんだからなにかとびっきりの楽しいこともあるんだろうと、わたしは急にものすごい楽しい気持ちがこみあげてくることに気づいた。

毎日育児と家事に追われていたが、わたしはとっても幸せで。

そう、実際にすごく幸せなのだが、でも、その単調な日々がちょっとでも変化するとしたら旅に出るしかないと思っていた。

毎日が単調すぎるから退屈なのよ、だなんて口が裂けても言えないよね？

でも正直に言うと、子どもがいて家族がいて幸せなのに、でも、わたし、すごい退屈なこともあるの。

そんなふうを考えること自体、ものすごい罪だと、わたしはおそろしかった。

あんなに旅にばかり出ていたわたしは、今ずっと家に籠もっている。そのことを単純に退屈だと言っても、よいではないか。

退屈退屈！退屈だったのよ！！退屈を蹴飛ばしたいのよ、ときどきは！



気がつくとなわたしは走り出している。

ぐんぐん、走る。

天頂に上り詰めた太陽がすべての音をかき消すように照りつけている。

ほとんどりゾートの敷地は無音なのだ。

水着のまま歩いている白人の少女の集団が近くてけたたましく笑い始めたと思ったのに、笑い声は全然届かない。

わたしはさらに走る。

もう、ここがどこだかよく判らない。

どこかのタワーのロビーに出る。ものすごいたくさんの旅行者がチェックインを待ってそこに集まっていた。ほとんどが白人だった。ハワイは日本人が多いと聞いていたが、意外と日本人の姿を見かけず、やはりアメリカ人と思われる客が多いようだった。

わたしはその人混みの中もずんずんと進んでいく。

突然呼び止められて、はっとして足を止める。

リゾートのスタッフがにっこりとわたしに透明なカップを差し出していた。

見れば、イチゴがたくさん入った水、キウイがたくさん入った水、オレンジがたくさん入った水がたっぷり大きな透明の水瓶に入ってカラフルに並べられていた。

わたしに差し出された水にはイチゴのかけらが浮いている。

サービスでタダなのか、それとも有料で小銭をここで出したりしなくてはならないのか判らずに、瞬時にわたしは迷う。

外国に来るとチップだとかそういうお金に関するストレスがつきまってくる。

わたしは大きなドル札しか持ってないが、でもだから足りないということもまたないし

、いざとなったら代金は部屋につけてもらうことができるかもしれないと、そのイチゴ水のはいったカップを受け取る。お金を請求されることはなかったのもそのままだイチゴ水を飲みながら、またしばらく混雑した屋外のロビーを歩いて抜けていった。

テレビ日記。

昨日見た、アフリカサバンナの、イチジクコバチの生態にまつわるドキュメンタリーは秀逸だった。丁寧な番組づくりは、そのまま生態系の豊かさのうねりに抱き包まれながら、自然そのものの眼となって自然を見ていた。

夫婦でジャングルに住みながら撮影を続けるイギリス人の制作者の2人は、無意味に気負ったところがなくて、好きなことをただしているだけという姿勢だった。視聴率なんて気にしないでも、好きなことをとことん愛情をもって見つめてやると、こぼれるように自然に面白い番組が作られること。

ジャングルにたわわに実る無花果の実。この実の繁栄が、うつくしい食物連鎖の環を描くことが、すなわち、私たちが今生きていることに、素直につながっていると思えるような自然なアングル、構成。

不思議さをことさら煽ることもなく、残酷さもひとつの自然ととらえられ、しかし私たちが生命をいただいて命をつないでいることをちゃんと理解させてくれて、感謝の気持ちを思い出させてくれる。

教訓めいたものを作ろうと肩肘をはればはるほど、教訓はするすると指のあいだから逃げていく。

たわわに実る無花果が、濃厚な、密をあふれさせる。

発酵してお酒になる。

それを飲む蝶々たちは、少々酔っぱらうというシーンのなにげのない美しさ。

南国のあでやかな蝶たちが熟れた実に酔う、白昼夢。

また、蝙蝠たちが、夜な夜な無花果を食べて、種子をジャングルに運ぶ。

水に落ちた実を食べる魚を狙う、獰猛なワニまで登場。

そして、無花果の実の花粉を運んでいる、1ミリにも満たないイチジクコバチ。

雄が先に実の中で生まれ、まだ生まれていない雌に子供を産み付ける。すごい。雌に求愛行動もせず、了承も得ず、勝手に卵の雌の中に種をはなつ。

そしておくれて生まれる雌は、うまれたときから卵をはらんでいる。

同時に寄生蜂に卵をうみつけれられているので、その寄生虫に食い殺される前に、他の無花果の木の実にもぐりこんで（それは自分の体をつぶしながらの壮絶な死の旅）卵を産み、花粉を届けて死ぬ。

雄は、雌が旅立つのを助けて、実に穴を開けて、太陽の光を見た瞬間に死ぬ。なんとあ

っけなくてシンプルな生と死。

無心で見た。

そういう無心で見られて、読まれて、ただ面白いものを書きたいと思った。

これは「①赤い手袋、②雪、③男の子と女の子」の3つのキーワードを使用し、1200字以内という条件を与えられて作った物語です。

「万愚節の夜に」

鈍く光を放つ銅色のペン先が、インク壺にひたされてゆく、ねっとりとした微かな抵抗を右腕に感じながら、左手の指先は何も書かれていない、日記帳のざらついたページを撫で回していた。

革張りの表紙には、今から半世紀も昔の西暦が刻まれていて、それを埋めていこうというのだから、日記というよりは回顧録とよんだほうがいいのかもかもしれない。

見開き2ページが1日分になっていて、右上に印字された日付4月1日は、今日の日付でもあるのだが、およそ50年前の今日の日記がずっと抜けたままになったのを何も今日初めて思い出したわけではない。

あの日ー50年前の今日ー暗闇に絶え間なく降りしきっていたのは、桜の花だったという気がするのだけれど、もしかしてそれは雪だったのかもかもしれない。

私があの人と歩いていたのが桜並木道だったから桜の花だと考えるわけだが、日記の日付を約50年分全て調べてみると、桜が咲いていた年もあれば雪が降った年もあり、そうするとあれはやっぱり雪だったのだろうかとは私は混乱する。

覚えているのはーそう、あの晩はひどく冷え込んで、私は外套のポケットから手袋を取り出して、隣を歩く夫が、可愛い手袋だね、と言ったのだった。

それは結婚前に父が誕生日に買ってくれた舶来物の赤い皮の手袋で、手首のところに私のイニシアルが彫ってあった。

いつもなら桜の咲く頃には並木道に沿って、かがり火が灯り、香具師が並び、人の流れは途切れることなく、それは賑やかで、でもあの夜は戦時中だったから、ただ静かに桜が（あるいは雪が）降り積もるだけだった。

「男の子だったら君に似るといいね。運動のできる逞しい子に育つ。女の子なら僕に似ればちょうどいい。色白のしとやかな子に育つ」

夫は冗談めいた顔で言う。

「どうせ、私は男勝りです」

私はすねて言い返すのだが、言葉が続かなかった。

今朝、体の弱い夫にまで召集令状が届いた。

「ねえ君、今日は万愚節（エイプリルフール）といって、西洋では嘘をついても許される日だそう」

夫はこういう雑学に長けていて、この時も何とはなしに口にしたのである。しかしその言葉は私の胸の奥に静かに沈み、私を惑わせ続けた。万愚節。桜が、雪が、降りしきる。

ペン先がインク壺の底に到達してこすれあう音が響く。少し黄ばんだページがまっさらなまま目の前に広がっていた。言葉は書いたそばから虚言じみてきそうと空恐ろしく、私は途方に暮れる。一体何が本当で何が嘘なのだろう。戦争は間違いで、なかったことにできても、赤い手袋

は焼けてしまったし、夫は帰らなかった。ペン軸を握る手に力が入るばかりで、やはり何も書けないのだった。

私は諦めてペン先のインクを拭きとると、窓際へ歩み寄り、カーテンを開く。暗闇に無数に舞うのは桜か雪か。

夫は嘘をついてよい日だと言った。

暗闇に桜（雪）の降りしきる万愚節に。

本当に書くべき大切なことが書けないということにどのような言い訳をしようか、としばらく思い巡らしていたことに気づいた。

そうか。言い訳なんて要らないか。ただ能力や気持ちの余裕がないからほんとに「書けない」んだろう。書こうとしていないかもしれないが、どっちにしたって、書かないのならば。

少し前にとても好きな作家の村田喜代子さんの小説作法に関する本、『縦横無尽の文章レッスン』が出ていたので、本屋でぱらぱら立ち読みした。『名文を書かない小説講座』のほうは買って、大事に持っているので、『縦横無尽...』のほうもいずれ買うかもしれないが、とにかくそのときは買わないで立ち読みした。

曰く、文章を書き始めるときには、なにを書くかということと同時になにを「書かないか」ということを決めてから書くのが、良い文章を書く秘訣だと。

がーん！当たり前のように、そういえばわたしはこれできていない。

最初に書いた恐ろしく冗長なものを削っている段階でもなにを削ればいいのかよくわからなくなって、投げ出してしまいたくなる。

そうか、それは、「書かないこと」を決めてないからだっただけ・・・。

あれもこれも全部全部書き込みたくなる欲望は誰にでもあるけれど、すっきりとした小説を書く人は、もともと「書かない」部分を決めてるのね。

書かない部分は「この世」にとって不必要だからではない。

あくまでその小説を書くときに必要ない部分なんだ。

その小説にとって絶対に必要な部分を際立たせるためにも、2番目に大切かもしれないことでも、あえて削いでしまうこともあるんだろう。

もちろん書くだけ書いて、なにが不必要なのか削る段階でよく吟味しながらなんとなく分かっていく部分はあるんだろうけど、そもそも「なにか必要でなにが必要でないのか」をアタマで考えて、「決断」する作業をすることなしに、ただ漫然と、これはいるのかな～、いらないのかな～ってやっていると、そのときの気分で残したり削ったりする



だけになるよね。

小説は説明文じゃないから「余計なもの」が書きこまれていてももちろん大丈夫だ。でも、やっぱりそれにしたって限度があるし、なにか根拠があって書きこまれているなら効果はあるが、ひたすら漫然と書かれたものを読まされた読者は飽きてしまうだろう。

感覚で書いてなんとなく素晴らしくなることもあるしそういう天才もいるが、多くの凡人である書き手は、いろいろ考えて決断しながら書いていくんだ。当然凡人である一人のわたしも、アタマ使わないとね。

とまあこんなふうに、意外と見落としている当然のことを、とても分かりやすく書いてあるのが村田喜代子さんの小説講座です。

<http://amzn.to/gOrBdo>

もちろん村田氏の小説も芥川賞受賞作『鍋の中』（巨匠黒澤明が映画化したことでも有名）だけにとどまらず、どれを読んでも満足できるものばかりです。



須賀敦子さんのエッセイというのは、イタリアを通して他のなにかを語っていると言うことができるかと思うし、また別の何かを語りつつもイタリアについてずっと語っているとも言える。前者か後者どちらかが正しいというわけではなく、どちらとも正しいとも言えるし、あるいはどちらとも間違っているとも言えるなあ、と思う。文章とはそういう不確かなものなんだなあ、と諦めるしかなくて、それはむしろ歓迎すべきことなのだろう。絶対というものがない、ごく不確かなものだと思うと、文章を書くことはとても気軽なことに思える。

文章には主題というものがると教えられた。かつて学校の国語の授業やらテストでは、この文章で作者が一番訴えたかったことはなんでしょう、ということをしばしば考えた。「こくご」、という教科が比較的好きだったわたしは、教科書に載るような文章というのはそうか、なにかいちばん訴えたい、壮大なテーマを人に伝えるために書かれているのか、と信じてそれをうーんうーん、と真剣に答えを探して考えこんでいたような気がする。

さて、大人になり、好きだから文章をよく書くようになってみて。もちろん教科書に載るような立派な文章を書いているわけではないのだが、どうも、文章にはそもそも主題などはないのだと漠然とわかってきた。あるとすれば、書き手ではない人がそうだと勝手に定義しているもののことを指す。それは文章全体を読んで、きっとそれが主題に違いないと思われるのでそう定義するのだが、しかし必ずしもそれが書き手にとっての主題だったとは限らない。



書き手は書くときにそれほど主題について考えないに違いない。

なにか伝えたいことをひとつ掲げて、それを伝えるために書いている人というのは、どのくらいいるのだろう。

むしろ、人はただ快樂のために書いたり、記憶を定着させるために書いたり、考える手段として書いたり、そう、自分のために書いている人が多いように思う。誰かに向けて書くというよりは、自分のために。

文章はそもそも一人で書くもので、たった一人の作業というのは、内なる自分と向きあうことだ。

それが誰かのためというのを目的としても、結局、いちばん集中してやることは自分との対話みたいな作業だ。だから結局誰かのことを考えるという余裕はなくなるし、結局他人である誰かが、自分の内なる作業に影響を及ぼすことは、あまりないのではないのか。

くどくどとこんなことを考えていた。

須賀敦子さんが書く文章にイタリアが多く出てきたわけだけど、

わたしが文章を書きたいと願うときに、どこかの土地について多く言及することがあるとすれば、

その土地を通してなにかを訴えたいからなのか、単にその土地が好きでその土地についてたくさん描写をしたいだけなのか、そんなことを。

結局訴えたいというより、ただ書きたいから書くだけという個人的な願望が理由で書いているだけなんだな、といういつもの結論に落ち着いて、では、またなにか書きたいと思っているのだろうか、きっとそうなんだろう、と思う。

沖縄という土地に、棲んでいるわけでもないし出身地なわけでもないのに、そのわりにたくさん足を運んだ。

だから沖縄という土地については、昔から定期的にたくさんの文章を書いてきた。

個人的な日記もあれば、ブログに書いていたこともあり、また、沖縄のミニコミ誌に書いたこともある。

小説の舞台を沖縄にしたことはないが、フィクションめいた旅行記を書いたことがあって、あれは今思うと創作の範疇に入るんだろうな、などなど。
そして今沖縄について書くとしたらなにを書くつもりなのか。これもその一端なのだろうか。



という日記めいたものでした。5月28日。
暗い空を眺めつつ。

友人に向けた話

テレビ・既存の大きな新聞しか情報源のない人に、まずマスコミがなぜ信じられないのか、についてメール形式で書いたもの。

書いたのは6月なので少し古いと思いますが、例えば周囲の人を説得する際などに参考になればともう一度公開しておきます。

なかなかメールができずにいました。
でも思い切ってメールを試みることにします。

こんな話をしてもアタマがおかしいんだろう、ノイローゼなんだろうって思われるだろうなあと思ってなかなか出す気になれませんでした。
事実、そういう反応を周囲からもらってるので、だんだんそういう話をするのを避けて最近は、あまり周囲の誰かと話をするともなくなってきたのです。
万が一不快に思ったらごめんなさい。
そしてともにmakeanovelはアタマがおかしい人だからね～って笑ってください。

わたしが今東京を離れているのは、関東の放射能が怖いなあと思ってるからなんです。
今東京にいるKちゃんやNちゃんにこんなことを言うと、すごい嫌なことを言うみたいだから、ほんとになかなか言えませんでした。
ごめんなさい。
でもアタマがおかしくなるくらい悩んだ末、もし交友を切られても構わないのでメールを書こうと思い立ちました。
関東の放射能が危険だとわたしが思うようになったというのは、わたしは昔からインターネットに没頭していたから情報源は主にネットです。
ネットの情報は玉石混交だから、デマももちろんあるでしょう。
ただし、今回の放射能の問題についてだけ言えば、
テレビや政府、学者の言うことよりもネットが正しいとわたしには思えてしまうんです。
わたしは原発が怖いなあとネットを眺めているうちに、
そもそも原発がどんなふうな生い立ちを持つのかを知りました。

それを知ってしまうと、もうどうしてもテレビや新聞、政府が正しいことを言っているとは思えなくなっただけです。原発の生い立ちそもそもが、大衆に嘘を伝達するところから始まっていて、今回事故が起きて、その集大成とでもいうべき事態が起きているんだな、びっくり！と。

日本人は核に対してものすごいアレルギーを持っていたはずですが。
広島・長崎があったので当然ですよ。

原発は原子力発電所という名前がついていますが、
そもそも原発というのは核分裂によって生じるエネルギーで電気を作っているの、
中国語で原発を指す言葉には「核」という漢字がついているし、
英語でも原発はnuclear power plantで、nuclear とは核のことです。

でも日本では核兵器と同じものであるというイメージがあると、ひどい拒絶反応を受けられると思われたため、原子力発電という言葉が採択されたんだと思います。「核分裂反応エネルギー発電所」が近所にあると思うと怖いけど、「原子力発電所」ならなんとなく安心するというわけです。そもそも大半の日本人がこれまで原子力という言葉が指すものはなにであるのかよく知らなかったのです。もちろんわたしも知りませんでした。でも結局言葉を曖昧にするために置き換えただけで、日夜、核分裂を起こしている、そもそも核爆弾みたいなものである発電所が、全国をぐるっと50箇所以上取り囲んでいるというわけですね。怖い・・・。

そして、国を挙げて、国民の核アレルギーからうまく離れた場所に問題を移し、原発はクリーンなエネルギー、さらに石油などの限りある資源の値段の変動にも影響を受けない、夢のエネルギーだという一大キャンペーンをうちました。

このとき大きく関わったのが、読売新聞社です。読売の創業者正力松太郎が先頭となってイメージ戦略を展開しました。読売は日本で発行部数の一番多い、多くの善良な一般大衆の読む新聞です。原発はこんなふうにして、国の政策と、マスコミが団結して国民を洗脳するところからスタートが切られたそうです。

そして、現在も、電力会社や電気事業連合などの広告費だけに、年間1500億円が投じられているそうです。原発ができてから現在までずっと切れ目なくこのくらいの規模の巨額の広告費が投じられてきたそうです。これはトヨタ自動車の広告費よりも高いそうです。もちろん他のどんな大きな企業の広告費よりも高いそうです。なぜ、独占企業である電力会社がこんな莫大な広告費に使う必要があったのか。だって独占企業なのだし、電気は特に宣伝しなくてもみんな勝手に使ってくれます。逆に夏場の電力が足りないときは、節電してくれと言わねばならないほどです。

つまりその巨額の広告費は、原発は安全だという国民の洗脳のために投じられてきたそうです。そしていざ重大な事故が起きたらどうなるかというのも、原発を推進してきた人々は考えていたみたいです。重大な事故が起きたら電力会社はとても不利な立場に置かれます。

でも、そういうときに、国民に情報を伝達するマスコミさえ握っておけば、自分たちに不利になる情報を流すことをなるべく阻止することができる。

だから、原発は安全でクリーンだという洗脳のほかに、いざというとき自分たちに都合の悪い情報を流すことを阻止するためにも、どんどんどんどんテレビ局や新聞社にお金が流れていました。

今回の福島事故が起きて、なんだか情報がどうも隠蔽されているっぽい・・・からこんなことを言うわけではなくて、随分昔から原発の問題点を指摘するような書物などではごく当たり前のようになされてきたことで、わたしもこれまで知らなかったのびびっくりしました。かつて少女漫画雑誌の「ララ」でも原発を問題視するマンガが掲載されたことがあり、そのマンガが最近ネットで読めましたが、その巨額の広告費について少女マンガですら論じていました。マンガでも、「事故がおきたとき、流す情報をコントロールするためにマスコミにお金を流しているのね」というようなことを女性の登場人物が言っています。

そのことがこれまでわたしたちの目になかなか触れなかったのは、原発に反対する立場の人をちょっと頭のおかしいカルト集団のように仕立て上げた、これまた電力会社や国をあげての妨害活動の結果なんだそうです。

例えば、原発が建設される場所で、原発について問題を論じる集会を行おうとする。すると、主催者のところに嫌がらせ電話が鳴りまくり、当日会場には注文してもいない弁当が大量に届けられるというような嫌がらせが日常的に行われていたみたいです。わざわざ書かなくても誰がこういうことをしたか今となっては見当がつく気がします。

さて、テレビ局というのは、視聴者がお金を払ってくれるわけではない。スポンサーからもらったお金で成り立っている。究極的に言えば、視聴者が全然面白いと思わない番組を作っていたとしても、スポンサーがずっとお金を払い続けてくれさえすれば企業として存続するくらいです。だからテレビ局にとってスポンサーは神様です。スポンサーには絶対に逆らえません。NHKにはスポンサーがないから正しい情報を伝えるはずだと思う向きもありますが、これは国家という、一番大元の原発推進者が牛耳っている放送局なので、ヘタをすともっと悪い側面があるみたいです。

というわけで原発事故以来、本当にテレビはひどい嘘の報道をしてきました。ここへきて東電はもう広告費を払う力はないだろうと見切ったテレビ局が少しずつ本当の情報を流し始めています。NHKにも心ある制作者がいて、放射能の汚染の本当のひどさを伝える番組が出てきたりしています。それでもネットの情報に触れているわたしからすれば、ずいぶんねじ曲げられた情報が多いし、いまだ隠されていることも多くて、恐ろしいくらいです。ひとつ例にとると、5月に参議院で参考人を招集して原発の問題について論じる議会がありました。参考人は、新エネルギー構想を持っているソフトバンク社長の孫正義、あとは最近テレビによ

く出るようになってきた、京都大学の小出助教授、あともう一人、もともと原発の技術者だった方です。

このとき小出さんが、わたしが今思い出しても怖くて涙が出てくるような重大な発表をしました。しかしこれらは全部テレビでも新聞でも報道されませんでした。わたしはユーストリームというネットの動画配信サイトから視聴していました。自由報道協会という、ネットで本当の情報を流そうとしている団体があって、そういうところが地道にネットで情報を出しています（ソフトバンクの孫さんなどが最近はその活動をバックアップしているみたいですね）。

小出氏によれば、3月15日にも東京でもものすごい高濃度の放射線が観測されたそうです。3月14日の福島原発の爆発で出た放射性物質が初めて関東にも大気に乗って運ばれたのがこの日だそうです。それを計測した小出さんは発表したいと思ったのですが、パニックを起こすからという理由で上司に止められてしまいました。

どのくらいの高濃度かといえば、
元々一般の人間が一年間で浴びる放射線の限度ということで国際基準にもなっていて、
日本は事故が起きてからその値を暫定的にひきあげていますが、
もともと日本の法律でもあった、
年間1ミリシーベルトという限度を、
もし3月15日ずっと外にいたとすれば、
それをたった1日で被曝してしまったほどの放射線の濃度だったそうです。

これを聞いてわたしは悔しくて泣いてしまいました。
そんなことを首都圏の人間はちっとも知らずにその日、外に出たりしていたのです。
もちろん24時間外にいる人間などいないので、1ミリシーベルトを浴びたことにはならないと思います。でも一年で浴びる限界とされる値を、なんと一日で浴びてしまうくらいの高濃度なものが来ていたなんて、もし教えてくれれば、その日は一歩も外に出ずにするなどして、無用な被曝を防ぐことができたのに。
悔しくて悔しくて本当に泣きました。

高濃度のピークは3月21日にもきていたそうです。雨にのって、多量の放射性物質が関東にも運ばれてきました。そして降り積もった放射性物質はまだ関東から消えてなくなっていないません。だから神奈川や静岡のお茶から基準値を超える放射性物質が検出されるのです。

普段、関東の空気中の線量は低いですが、もう3月中に溜まった膨大な放射性物質があるのです。

放射性物質はアスファルトの上のものなどは雨で流されたりするものもありますが、砂や泥、草に降り積もったものはなかなかどこにもいきません。江東区などでもホットスポットが存在しますが、この3月の15日と21日のピークに運ばれた放射性物質が溜まったものが主な原因だと見られているそうです。

さて、このほかにも、最近、低線量長期被曝が人体に与える影響についての話もしたいのですが、恐ろしく長くなってきたので一度このへんでやめます。

要点だけを先に述べておくと、チェルノブイリの事故による健康被害も、同じように、原発を推進したかった当時のソビエトやアメリカ、日本の利害が一致して隠蔽されてきたそうです。それらを指摘するサイトなどを見ると、東京と同等程度線量の地域でも、たくさんの子どものガンが出ていることが明らかになってきたそうです。

また続きをアップする予定ですが、とりあえずテレビや新聞をなんとなく漠然と信じている人にこれを読んでもらうだけでも違うかもしれない～と思ってアップします。

わたしにとっての『三四郎』的な...

1999年からずっとネット上に日記的なものを書いてきたが、ツイッターを始めてからその習慣を失い、しかしあとから読んで面白いのはある程度の長さにとまった文章としての日記だなあと思った。ツイッターはあとから読み返して思い出に浸るには適していないようだ。今のところそう感じる。

昔のように毎日は無理でも時々は残しておこうと思いながら、ここ最近また空白期間ができてしまった。



沖縄にて（昔の写真です）

ツイッターではずっと原発や放射能について書いているから、ここではまったく離れたことを書きたいとは思うものの、

日記というものを書くとしたら、原発などのことを除いてしまってはとてもじゃないけれど正確な日々の記録にはならないだろう。

それにしたって原発や放射能のことを忘れたい時間はある。

敢えてそれらのことを徹底的に排除して日記を書いてみるのもよいかもしれないと思った。

後から読み返せば、不自然に排除されている原発や放射能というキーワードが、レースの空洞部分のように、糸の部分と一緒にあって模様を織りなすのかもしれない。

それはただの都合のよい現実逃避なのかもしれない。

でも、夢の世界に少しだけ浸りたいのだ・・・。

そう、わたしは結構疲れているし、心が病んでいてもおかしくない。

日記の世界くらい、好きに楽しく書いてもよいのではないだろうか。

ツイッターとは別の場所に、放射能からかけ離れた、もうひとつのわたしのかけがえのない生活は、確かに存在するのだから。みなと同じように。



竹富島にて

最近わたしにとっての『三四郎』みたいな小説が書きたいなあって、少しずつ書いている最中だ。少し前に雑誌『群像』をぱらぱらめくっていたとき、村上春樹がなにかのインタビューで、漱石にとっての『三四郎』は自分にとっての『ノルウェイの森』だと語っていたということが話題になっていた。最近なんとなく『ノルウェイの森』について思い出すことが増えていた。

小川洋子は『シュガータイム』という小説のあとがきだったかで、この小説がやはり自分にとっての『三四郎』的な小説であるというようなことを述べていたような気がする。『三四郎』という小説を挙げて説明していたわけではないが、自分にとっての青春の一番大切なことを書くために書いた、いや書かざるを得なくて書いてしまった、そういう類の作品だと。

『三四郎』は漱石の青春時代のそのままの実体験ではないだろうし、『ノルウェイ』もまた村上の実体験そのものではないはずだ。小川にとっての『シュガータイム』も。

実体験ではないのに、むしろ実体験以上に、作家の青春時代が滲み出てしまう作品。それがつまりいろんな作家にとっての『三四郎』なんだろうな。

そしてわたしはこの3つの作品がとても好きだ。

いささか青春ど真ん中すぎると、読むのを気恥ずかしく感じる時代もあった。

自分の青春時代の前はこれらの作品世界に憧れ、自分がいざ青春まっさかりに入ると照れて読めない。でもまた青春のど真ん中をもう通り過ぎた季節に、人はこれらの作品を懐かしく思い出すのかもしれない。



蒸し暑い季節だからこそ雪の写真とかもいいかと貼ってみる。故郷の雪景色。

そして人は自分にとっての『三四郎』を書きたいと思うようになるのではないか。

思い立って『ノルウェイの森』をめくってみれば、

ドイツフランクフルト空港に着陸して混乱している「僕」は37歳という設定だった。

なんとわたしはまさに37歳だった。

村上春樹がこの作品を書いたのもこれくらいの年齢だったときのかな。『遠い太鼓』に書かれていた、ローマを拠点として外国にいた時代、村上は三十代後半ではなかったか。

というわけで、そういう小説が書けたらいいなあと思いつつ、ぽちぽち書いているこのごろでしたという日記です。

6月28日

眠りの一番きわから転げ落ちたら、そこは目が覚めた現実世界、ではなくて、もうもどってこれない異世界に紛れ込んでしまうのではないか。

そんなふうな緊張をはらむ眠りをここ最近味わっている。



今年の2月にNYに家族旅行にいったときに、唐突に思い出した。（今にしておもえば、ほんの少し前にNYに家族旅行にいていたなんて信じられない）

JF k 空港に着陸。

周囲の乗客が立ち上がり、頭上の荷物を取り出しはじめたざわめきの中で。長いフライトで疲れ切ったしびれを感じるような感覚のなかで。

ああこういう小説があったなあと思い出す。

あの小説で飛行機が着陸して（あれはフランクフルト空港だ）、主人公は混乱してしばらく立てなくなる。それでスチュワーデスがどうしたのかと声をかけてくるのだ。

主人公はちょっと悲しくなっただけだからとスチュワーデスにいとも簡単に打ち明ける。すると、分かるわ、わたしにもそういうことがある...というような、気の利いた返事が返ってきたはずだ。



5月1日故郷のお祭りのときの写真です。

しかし、いざ自分の立場に置き換えてみれば、なかなかチュワーデスやスチュワードに自分のナイーブな心情を打ち明けることなどできないような気がする。

例えば、すし詰め状態のエコノミークラスではない上のランクの客席では、もう少し客室乗務員との親密な人間関係が築かれるのかもしれないが。



それから折にふれてあの小説について思い出す時間が増えていた。

あの上巻の真っ赤なつるつるした紙の表紙の手触りを初めて味わったのが、あの雪の多い街でのクリスマス・シーズンだったことを思い出す。

わたしは最初、書店の棚に並んでいる赤と緑のそれらがてっきりなにかクリスマスにちなんだ物語だと信じた。こんなカラーのつるつるした気持ちのよい紙で、ラッピングでもするように包んだ上下巻は、きっとギフト向けの書籍に違いないと目を瞠った。ギフト向けの書籍というものが存在するのかどうか中学生のわたしは知らなかったが、きっと今までなくても、この2冊が初めてそういう目的に作られたものだと。

その赤と緑の双子のような二冊に吸い寄せられるように近づいていった。

書架にはほとんどの本が背表紙を見せて並べられていたのに、その2冊だけは表紙を見せて立てかけてあった。一体どんな内容の本なのか説明してあるポップのようなものはついていなかったと記憶する。

その時、わたしはその単行本を買うような経済力はなかった。中学時代の当時、わたしは決まった額のお小遣いは貰っておらず、なにか欲しい物があれば親に言ってその分だけのお金を貰っていた。しかし、わたしはこの2冊の本が欲しいということを親にうまく説明できる気がしなかった。当時わたしはそれほど本をよく読むタイプの子どもはなかった。小学生の頃、マンガをよく読んだが、マンガの熱が覚めはじめ、コバルト文庫などの少女小説でなにか物語を読みたいという欲を満たすようになっていくところだった。ところがこの2冊は、少女小説とは違う。もっと大人の読む本であるように思える。



故郷富山県にある運河沿いのスタバの写真。

そうすると、もしかして今のわたしが読んでもよく判らないのではないか。だったら今読むこともないだろう。

本は逃げていかない。

大昔に書かれた本が、今でも読めるではないか。

時機がこれば読むことができるだろう。

わたしははっきりとそんなふう言葉にして思ったわけではないが、とにかくその本を親に買って欲しいと頼むこともなく、図書館で借りて読もうという気もおこさずに、ただ、近所でたっ

た一軒のその書店に行くたびに、その本がまだあることを確かめた。

ひたすら表紙を眺め、あるいは時々はそっとつるつるの紙に触れて、そんなふうの確認しながら月日を重ねていったように思う。



連休中実家にいた頃、夫も一緒にいった金沢21世紀美術館のレストランにて

やがて表紙を見せて並べられることがなくなり、背表紙だけ見せて本棚に入るようになってからも、長い間その本はその書店から消えることはなかった。少なくともわたしがその小さな雪深い町を18歳で出て行くまではずっと2冊とも本棚に存在した。

ごくまれに、赤い上巻のほうだけ消えていることがあった。すると、その本を読むべき時機を捉えたはずの、この町に棲む誰かのことを思った。不思議と2冊とも姿を消したのをわたしは見ることがない。

そして結局わたしがその2冊を読んだのは、その雪深い町を出て行く、ほんのわずか少し前だったような気がしている・・・。



『容疑者の夜行列車』という多和田葉子さんの連作短編集を、自宅には持っているけれど今手元にないので図書館で借りてきた。

各章の主人公「あなた」（そうこの小説たちの主人公は「あなた」という二人称なのだ）は、それぞれいろんな場所を鉄道で訪れる旅人だ。短編の冒頭で「駅の様子がおかしい。ホームに嫌に人が少ないのである」（第一章「パリへ」）という具合にもうその目的地についていたり目的地に向かう直前だったりして、すでに旅人である。旅に出たいとある日思いついて旅に焦がれて出発までの準備をするという過程はほとんど書かれない。「あなた」は最初から有無を言わず旅人になっている。各章の「あなた」は、旅への憧れによって旅に出るというより、旅に出るのが宿命付けられた存在で、本人が望んでいなくても旅を続けるしかないという諦めを抱えている存在としてわたしの目にはうつる。



一般的な日本人にとって、外国への旅というのは、1年で1度の娯楽でありレジャーだったりして、純粋な楽しみとして位置づけられていることが多いのではないかな。

しかし、もし、流浪するしかない人生に生まれついていたら、外国へいくことをそれほど無邪気に喜ぶことはできないかもしれない。定住する場所がないというのももちろん、定住地があるにせよ、色んな国を巡業して回らないと生計が立たない人生というのもまた、流浪の民めい

た悲壮感が旅につきまとうような気がする。

一生旅人として世界を流浪することに憧れられるのは、ぬくぬく定住できる場所がある者だけに許されることではないか。

最近そのことを痛切に思う。

このところ、一生住み続けると思っていた土地に、もしかすると帰れなくなるかもしれない気持ちを味わい、さらにこのニホンレットウごと、失ってしまうかもしれないという緊張の中で、この短篇集がまた違った味わいになるのではないかと。

この短篇集の第一章こそ「パリへ」という、花の都が目的地という明るい設定になっているのだが、そのあとの章は「イクルーツクへ」「ハバロフスクへ」「ボンベイへ」などというものがあって、決してお気楽な旅行者は訪ねていかない地名が連なっている。

「ローマへ」「バルセロナへ」「ロスアンゼルスへ」「ロンドンへ」というタイトルがもし続くのならば、この短篇集がこんな味わいになることはなかったのかもしれない。

さらに「パリへ」という短編は、パリに着く前にフランスの鉄道会社のストライキによって乗っていた夜行列車が途中で止まってしまい、夜中に電車を下ろされてしまうという不安極まりない内容だったりする。



これを全く傍観者の気分で読んでいるときは純粹にスリルとして味わえる部分があった。いや、ほんとうは常に明日は我が身だと思うところあって心のどこかで不安だった。そして今、はっきりとそれが自分について書かれた物語だという気持ちで読む。どこかへ向かう。目的地に着く前に強引に電車を下ろされる。しかも真夜中に。これからどうすればいいのか。誰かに尋ねたくても言葉も通じない・・・。

これから本当にわたしたちはこういう人生を歩かなくてはならないのかもしれない。

そういう気持ちでひやっとする。

いつか、日本を脱出するためにイカダを作って漕ぎ出さねばならないのではないか。

カズオ・イシグロの脚本による『上海の伯爵夫人』のラスト近く、日本軍の侵攻が始まり、街は騒然となり、我れ先にと上海を脱出しようとする民衆が描かれる。なんとかして船に乗るためにお金をかき集めたりコネを探したりする。そういうパニックが日本を襲ったらどうなるんだ

ろう・・・。

あまり悲壮な気持ちになっても仕方ないとはいえ、
だんだんそういうイメージを作ることにも慣れてきている。

8月11日

小説や物語はとても好きなくせに、
昔からなかなか小説の世界にガッチリハマることの難しい人間だった。
一度ハマると現実との境界が危うくなるくらいにハマるせいで、
無意識に防御作用が働いているのだろうかなどと予想している。

(もちろん飽きっぽい性格でもあり集中力が持続しないことが多いので単にそのせいかもしれない)



しかし、
このラインを超えるま
では、
まだまだだな・・・ふ
ふん、
と、突き放して読んでい
るところはある。
エラソーなんだけど、
この程度の面白さじゃ、
まだ「ハマれないわね」
みたいな。
その代わり一旦ハマる
とちょっとやそつとでは
抜け出せないくらいに頭

の中がその物語世界に支配される。

そんなふうに取り憑かれてしまう読書というのはしかしかなり体力が要る。

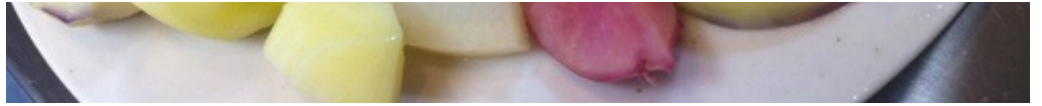
体力が要るというのは疲れるということで、物語を読むことは暴力的な部分がある。

例えとして正しいかわか
らないが、

小説を読むというのは、
ちょっと常軌を逸した人
と関わるのに似ている。
いつなんどきどんな予想
もつかない事態が起きる
か判らないというのは、
いくら小説の世界だと頭
ではわかっているけど、
すっかりのめり込んで読
んでいるわけだから、



そういう「予想もしなかったこと」が次々起こるのは心臓によくないのだ。



小説を読むのが、常軌を逸した人と関わることなら、
エッセイを読むのは、ごく常識的な人と関わることに似ている。
だからわたしは本当はエッセイを読むのが一番好きだ。
ぎょっとするほど意外なことが起きて心臓に悪いということはないという「保障」があるから。
安心して安定して文章を読む楽しさだけにひたれるから。



でも人はどうしたって、
ときどき、小説の「わけのわからなさ」に挑まなくてはならない。
小説を読んでもあまりわからないし面白くないという人も多いのは案外頷ける話だと思っている。
あんな怖いものに世界の人がほとんど巻き込まれてうつつを抜かしていたら、
正常に世の中が機能しなくなるのではないか。
小説の「わけのわからなさ」を本能的に怖いと感じて拒絶する人が多くても当然だという気がする。
しかし「わけのわからなさ」の中毒になっている患者もまたいる。
たぶん「わけのわからなさ」の混沌の中には、
ものすごい快感をも含んでいる。
その快感の部分が忘れられなくて、ぞっと

するくらい気持ち悪いものもいっしょくたに味わう覚悟で、
ついつい人はまた小説に手を伸ばしてしまうんでしょう。
そしてその混沌が凄まじければ凄まじいほど、その小説は名作ということになる。
名作と言われる小説は、ほとんどが「常軌を逸した人」だから。中には「かなり」常軌を逸してしまっているものもある。

そしてわたしは一度取り憑かれた小説を繰り返し読むということをしないと、
また小説を味わうことができない人間だ。

たぶん一回読んだだけではわけのわからなさが強すぎて、
なにが書いてあったのかよく理解できていないから。

今はわりと心の平静を保つために、
ごく常識的なエッセイさんとばかり関わる今日この頃です。
でもそのうちまた、ものすごい混乱をもたらすであろう小説にも出会うことになるのでしょう。

(ライフワーク的、旅に関する文章の一環です)



沢木耕太郎さんの『旅する力』を読んでいる。

ここの電子書籍でも旅行記や旅行をテーマにした小説を多く作ってるので、
沢木さんの本について言及すると、
もともと沢木耕太郎さんの本のファンだったのかと聞かれたこともある。

しかし沢木耕太郎さんの本を読み始めたのはつい最近だ。

なぜそれまで読んだことがなかったのかとい

えば、

彼がスポーツ系のノンフィクションライターだということから偏見を抱いていた。

わたしは自分が体育学部出身というだけで謂れのない差別を受けた経験から、

(詳しく書くとキリがないけど、「脳まで筋肉」という揶揄で表現されるような差別です)

体育・スポーツ関係にはひどいコンプレックスがあった。

自分が差別を受けたら、自分は差別しないのが本当だと思うのに、

あまりに嫌な思いをたくさんしたために、

自分すらもうスポーツに関わるのはゴメンだという気分になって20代を過ごした。

もちろん、スポーツエリート of 沢山棲息する筑波大学体育専門学群で、

軍隊みたいな部活に所属してひどい目にたくさんあったせいもある。



というわけで、

スポーツについて書いている、しかも自身もスポーツを熱心にやっていたらしいというライターというだけで(そういう肩書きめいた情報だけは先にどこかから入ってきていた)、

どこか素直に読む気になれない作家だった。

沢木耕太郎は。

しかし彼の著作の中で『深夜特急』だけは気になる存在だった。

バックパッカーのバイブルみたいな存在だとは知っていた。

しかし、スポーツライターの描いたバックパッカーの旅行記だなんて、

デリカシーを欠いたものに違いないというひどい偏見がまた頭をもたげた。

それこそわたしの嫌いな、体育会系バンカラ男の、

「女なら誰でもモノにできるぜ、ぐへへへへ・・・」的な、

体育学部の男子同級生の素行を思い出すみたいな嫌悪感でもって。

（もちろんみんながみんなそうだったわけじゃないけど

そういう男子が悪目立ちしていたのは事実です）



そして自分ではそんなに世界中を旅できたわけでもないけど、
独身時代かなり頑張って貯金しては旅行に明け暮れ、
これでしばらく旅行にいかなくても諦めがつくわ！ってなところで、
結婚、妊娠をすることになる。

その妊娠中に初めて『深夜特急』を読むことになった。

わたしは妊娠期間の9ヶ月、まるまる寝たきりだったのではというくらい
がっかり体調を崩してしまい、



最初は休職させてもらっていた仕事も辞める
ことになり、

ほとんど布団の中でうーんうーんと唸って苦
しんで過ごした。

ずっと高熱はないのに、高熱を出したインフ
ルエンザ患者みたいな状態で、
一日の大半を朦朧と過ごしたのだ。

母の証言によれば、

「一日中ハアハアと荒い息をされていて、この
まま死んじゃうんじゃないかと思った」

というくらいなのです。

これもツワリ的一种なのかなんなのか医者にも妊娠だから諦めるしかないと言われ、とにかくわ
たしはこんな症状で妊娠期間を過ごした。確かに子どもが生まれた瞬間ケロッとよくなったので
、妊娠特有の一種の症状だったみたいだ。

そんな状態だから読書もろくにできなかった。

本は読めないと思っているから新しい本を買うこともないし、図書館から借りた本がいつも手近
にあるという習慣からも遠ざかっていた。

でもごく稀に体調がマシなときもある。

そんなとき、もともとは活字を読むのが好きだからなにか本を読みたくなる。
たまたまオットの本棚に『深夜特急』全巻が揃っていたのが目に入った。
そうだ、これは旅行記だったはず。
これなら気楽に読めるのではないか。
一番最初はそんなふうに読み始めた。ええとだから２００８年のことになる。
そして、驚いてしまう。
今までスポーツ馬鹿に違いないという同族嫌悪も混じった思い込みで避けてきた沢木氏の書くものが、
こんなに繊細なナイーブなものだったなんてと。

続く 予定

前ページからの続き



そのようにして妊娠期間中、猛烈に体調の悪い中で、たまに加減がよくなったときにちよっとずつ『深夜特急』を読んだ。

『深夜特急』は、いつも耽溺している高度に洗練された小説やエッセイと比べて、文章が特別優れているわけではない。

また、一人で外国に乗り込むという行動だけとってみても、例えば愛読してきた須賀敦子さんなどが戦後もっと早い時期に女だてら単身ヨーロッパに乗り込んでいった経験を読んだりしているので、それだけをとって、ものすごい冒険だということもない。

しかし確かにわたしは夢中になって『深夜特急』を読んだ。

文章レベルも最高級ではないし冒険のレベルもそこまでじゃないけど二つ組み合わせたら意外と高い位置にいる、とかそういう単純な点数の加算の問題でもない。

そこには完璧に純化された旅へのロマンが詰まっていた。

そのことがこの本の魅力だし、それだけで十分だと思った。

いったい、バックパッカーのバイブルに、これ以上に必要なものなどない。そして完璧な「これ」

さえあれば十分だ。

旅への「あくがれ」。

「憧れる」という現代語のもとになった古語の「あくがれる」という言葉には「魂がいる所を離れてふらふらさまよう」という意味がある。

[「無用の用」](#)というサイトに「あくがれ」について説明している素敵な文章があったので紹介したい。



あくがれるは現代語のあこがれるの語源となった言葉である。このあくがれるということばは、たましいがその人の体から抜けでて遠くはなれていくことをたくみに表現している。「あく」は「あるく」を連想させ、動いて外に出て行くという語感を牛み、「かれる」は「離れる（かれる）」のことで遠ざかるという気持ちである。古典文学を見ると、恋をするとたましいがあくがれるという場面がよくでてくる。相手を昼間のうちに思いに思いつめ、その心がついには夜、体をぬけだして相手のところにたどりつく。現代語のあこがれるは語義が拡大しているが、魂が外部のものに心ひかれてそちらに移るという点では同じである。

私はよくふしぎに思うのだが、人類はその誕生以来、この地球上を計大な規模で移動してきた。地理の知識も、交通機関も発達していない大昔、どのようにしてこの大移動をなしとげのか不思議でならない。その土地での人口過剰や食料不足、疫病の流行などやむをえない事情があったことにまちがいはないだろうが、やはりわたしには、太古の人々の心にもあこがれの気持ちが強くあり、目に見えないあの山やあの海の向こうに理想の土地と生活があると強く心をひかれたのではないだろうかと思われるのである。地球の大気中には昔から人々のあくがれが満ち満ちていると私には感じられる。



やむを得ない移動はあったにせよ、太古の人々の心にもあこがれの気持ちがつよくあり、目に見えないあの山や海の向こうに理想の土地があると強く心をひかれたのではないか、という部分に頷く。

。

このブログの筆者さんが「地球の大気中には昔から人々のあくがれが満ちていると私には感じられ」たという、その「あくがれ」を抽出した純粋な結晶みたいなもの、

それが沢木さんの『深夜特急』に感じられた。

続く予定

過去日記



2004年2月某日

あるいは死に似たものだったのかもしれない。

死という言葉^{.....}を安直に使用するの^{.....}は不謹慎だ^{.....}という気もするが、しかし他に喩えるのに相応しい言葉^{.....}を思いつかない。

私の語彙の貧弱さだけによるものではなく、それほどあの時間^{.....}は、なにものにも例えようのない深みだった。

私は昏睡していた。

別に病気や怪我で寝込んでいたわけではない。

ただただ眠くて自宅の自室で、一日20時間以上眠り続けたのだ。およそ1年その眠りを眠りづつた。そしてこの2月に目を覚ました。

人生を棒にふるとか、時間^{.....}がもったいないとか、無益だとか、そういう常識的な思考^{.....}は私には届かなかった。

ぐっすりと眠ったその果てには、またさらに深い眠りがあった。

ここで断っておくべきことは、「死」と同様に「眠り」が比喩ではないということだ。前者は喩

えとして用いたが、「眠り」は、言葉どおりに受け取っていいものだ。私はひたすら「睡眠」したのだ。

それは何がなんでもといった、そういう積極的な行為でもなかったように思う。

惰眠を貪るという投げやりなものでもなかった。

もっとシンプルに私はただ眠っていただけなのだ。

怖いくらいに、眠っていた。

☆☆☆☆☆☆

ここからは今現在（2011年の8月）に書いているものです。

なかなか最近の日記が書けずにいて、でもこれまでどおり日記的な記録は残したくて、昔の日記に対応して今の日記めいたものを付け足してひとつのページとしてこの本に記録するという試みを。

その昔、はてなダイアリーをレンタルして日記を付けはじめた初日の日記が上に貼ったもの。

それまでもネット上に日記を書いていたが、ブログ形式で書き始めたのはこのときが最初で、それ以前のものはデータとして残っているが、取り出すのが非常に面倒。

だからこの本ではこのはてなダイアリー（現在はプライベートモード）につけ始めたものの中から抜粋して再編集していく予定。

☆☆☆☆☆☆

うつ病で丸々一年ほど寝こみ、そしていきなり目が覚めたときの不思議な感覚を、
今ならもっと軽やかに描写すると思う。

ぐっすり寝て、疲れがとれたから起きたのよ、って感じに。

でも当時のわたしはそれなりに深刻に失った時間についての喪失感などを抱えていたはずで、だから上記のような文章が書かれたのだ。

だからそのときに感じたままに書いておいた日記というものはあとから読み返すと個人的にとっても意味がある。

最近つついTwitterに書くことで満足して、いわゆる日記を残していないことが気がかりだった。

せっかくここに日記帳がわりの電子書籍を用意したのに。

☆☆☆☆

というわけで継続して書けるかな？

2011年8月24日

先に過去日記から。

2004年3月某日

昨日の夜は、何度か読んだことのある須賀敦子さんのエッセイを
読み耽って夜更かしをした。

トリエステに吹くという、ボーラ。

ウンベルト・サバの愛したトリエステ。

そういえば、父の乗っているフォルクスワーゲンは、ボーラという名だが、
イタリアのその土地に吹く寒風のことを指すのだろうか。

トリエステはドイツ語文化圏でもある。

疾風という名は、その頑丈そうな車の名前に相応しいかもしれない。

朝は、ゴミ出しなので早起きして、
母と山のような不燃物を運び出していたら、
近所の方に

「不燃物は先週でしたよ」

と言われ、赤っ恥をかいて、大慌てでまたごみを運び込んだ。

お粗末。

昼ご飯は、我が家の定番、納豆チャーハン。

ネギのみじん切りと納豆が入って、だし醤油で味付けしたシンプルな料理だけど、飽きないし美味しい。

午後からはプールへ。

30分黙々と泳いで帰宅。

祖母の部屋で、うとうと居眠りをしているともう夕方。

傍で祖母が針仕事をしている。

近くで仕事をしている人の傍で眠ると気持ちがいいと

誰かのエッセイに書いてあったが、本当にそう思う。

母とお茶を飲みながら、ぼんやりと過ごす。

昔はできなかった、この「ぼんやり」。

ここから「ぼんやり」過ごすことの快樂を知ってしまった私は
もう社会復帰できません。きっと。

夕飯に、だしまき卵を作る。

ちょとだしを多くいれすぎて、卵がなかなか固まらない。

不恰好な卵焼きになったけど、味はまあまあ。

しかし、修業が必要。

魚のフライと、キャベツの千切り、

ウドの皮の味噌炒めと、生のウドをステックにしてマヨネーズで。

☆☆☆☆☆

ここからが現在書くもの。

今日貼りつけた上記のものは、うつ病で丸々1年ほど寝込んでいたのから目が覚めて、ひと月ほど経過した頃の日記。

完全な無職で実家にパラサイトしていた。（その後自宅で内職針仕事をする、オットと知り合っ
て一緒に暮らすために上京するまでの間）

本を読み、料理を手伝ったり、そして確かこの頃は毎日プールに通って1日30分連続して泳ぐのが
日課だったなあと思い出す。

☆☆☆☆☆

さて表面上の日記はこのような感じだが、

そういえばこの頃だって、かなり長い時間、インターネットをやっていたのではなかったか。

この年の、確か6月に招待してもらってmixiを開始するのだが、

このブログを始めたことによって、同じはてなダイアリーのユーザーとの交流も増えるし、元々やっていた古式ゆかしいホームページ時代からの仲間とも頻繁に掲示板に書き込みをしあっていたはずだ。プールに通ったり本を読んだり料理をしたりする間のそれぞれの時間にもインターネットに接続してブログやHPになにか書き込みがないか確かめていたのだろう。

そしてmixiの時代がやってきて、本格的にネットでの人との交流が人生のメインとなっていく。mixiで知り合った人と結婚までした。

わたしがいかにネットが面白いかが有意義かということについて書いたmixi日記は密かに梅田望夫さ

んにまで読まれてそれが「ウェブ時代をゆく」という本に紹介までされた。（しかも本を読んで初めて自分の書いたことが引用されていて驚いたのでそれをブログに書いたら梅田さん本人からそうです確かにそれはあなたですと書き込みがあった。下記参照）

 **umedamochio** 2007/12/04 21:48

梅田です。まったくその通りです。あなたのことです。ブログもあったのですね。今日これを読んで知りました。もしブログを知っていたら、ちゃんと出典も明記して引用していたでしょう。僕はmixiでこの日記を読んで感銘を受けたのですが、mixiだと非公開が前提ですから、ご迷惑がかかるかもしれないので引用すべきではない、あんなふうに意識してしまいました。書きながらずっと気になっていました。
じつは2日のあなたのエントリーを読んで、ひょっとするとあのmixiの方ではないかと想像していました。

そしてわたしはいまだにどっぷりとネットにはまった生活をしている。

ネットがわたしの実人生なのかと時々思うくらいだが、もうネットもリアルも区別するのは馬鹿らしい時代になったのかとも思う。

そしてほとんどの活動をツイッターに移したのが2009年の秋。

そして今年2011年、震災、原発事故が起き、まさかこんなふうにツイッターから離れられなくなるとは思ってもみなかった。

長くなってきたのでいったんこのあたりで。

[前のページ](#)の続きです。

梅田望夫氏がわたしのmixi日記から抜粋したこと、さらに梅田氏自身の持論を組み合わせ「ウェブ時代をゆく」という本で紹介したことの要旨のひとつには、

「実社会ではエリート層に属することのない人間であっても、文化的に高い教養を身につけたかったり、実際にそのようなことに興味がある人間が存在する。ウェブ上には同じように、エリート層には属していないが高い知識のある人間が、同じ趣味などをもとに集まって、昔のサロンのように、会話や交流を楽しんでいる。これまでのエリート層には属することがないが、だからといって埋もれてしまうこともない新しい知識層がネットに形成されている」ということがあったと思う。

エリートか否かという、鼻持ちならない話のようだが、まあわたしのような転職を繰り返してあまりぱっとしない収入でしか働けなかったり、あるいはしばらく鬱病で実社会からドロップアウトしていた人間にとっては、リアル社会だけにいてはなかなか、特定のジャンルについて、または文化全体に渡って高い知識を持った人間との交流は、これまでのネットのない世界では限られてしまったのは確かだったと思う。

ところがインターネットの趣味を通じて知り合った中には、ちょっとぎょっとするような専門性の高い人間などもいる。（もちろんわたしと同じように社会的に地位のない人間もいれば、リアル社会での社会的に地位の高い人もいる）そういう交流は、それまでの実社会だけでは実現しえなかったことかもしれない。

というようなことをウェブ2.0社会が到来したことによって梅田氏は予測したというし、そのことを実際に非エリート層にしながら感じていたわたしの日記を読んで確信したのだ、というような話だった。

梅田氏はエリート層に属する人間なのに、そうじゃない層を見下ろしたような発言・・・のように思われる向きもあるかもだが、梅田氏自身、決して平坦とは言えない「けもの道」を歩んできた人間だと自覚していて、そういう人間にとってもインターネットの存在が大きかったということだそうだ。

さて。

これがウェブ2.0がもてはやされた2007年くらいのウェブ世界の認識だった。

あくまでエリート層に対しての、新しい知識層の台頭。

しかしそれはあくまでエリート層の下位に属する存在として扱われた。

実社会で、いわゆる「リア充」的な仕事に属している層は、ネットをやる暇もないという、暗黙

の了解を含んでいた。

そしてそれからまた月日は流れる。

2009年にtwitterがメジャーになり、あっという間にmixiは衰退したように思えた。

2008年に出産したわたしはこの頃は育児に大幅に時間をとられるようになり、残念ながらtwitterも、あともうひとつ時代の象徴となったfacebookも、十分に使いこなしていないまま、2009年、2010年、2011年を過ごした。

主に育児の記録めいたものをプライベートモードにしたブログにつづり、家事育児で細切れに分断された時間の中からtwitterで刹那的な呟きを発信していた。

しかしながら、昔のようにネットで知り合った仲間とのオフ会に頻繁に出席したりできないし、ひとりひとりのネットの知り合いと深いつきあいをする時間的・精神的な余裕がない中でも、twitterではそれなりに人との交流も楽しめたし、だんだん育児の負担が減るにしたがい、twitterを使った文学的な新しい試みに興味が湧いて色々試すようになっていた。

ツイッターでの連載小説をやってみたり、あとは震災の直前になったがツイッタートラベラーというものに応募して運良く当選したので、アメリカン航空の羽田就航便にのってNY旅行の模様を逐一ツイートするという楽しい経験もさせていただいた。（そのときの模様は[「ツイッタートラベラーのNY旅行記」](#)に記してあります）

そしてそのツイッタートラベラーの任務が終わって間もない3月11日、東日本を激震と津波が襲う日がやってくる。

そしてさらなる悪夢、東京電力福島原子力発電所の事故が続いた。

棲んでいるマンションが崩れ落ちてしまうのではないかという激しい揺れの中で、わたしはtwitterをリロードさせ続けていた。

同じように東日本で地震のまっただなかで揺れている！と叫ぶ人々、西日本から大丈夫ですか？落ち着いて！とアドバイスなどをくれる人々、その時点でもう1000人を超えるユーザーをフォローしていたわたしは、まさにタイムライン上に震災の混乱そのものを見ていた。

しかしそれは単なるメチャクチャなパニックとは違った。

家族と連絡が取れないという訴えがどこかから発信される。

それに対して、こうしてとってみれば？という方法が提示される。

その方法が有効ならばぱっとリツイートでそれが伝達される。

人々の恐怖の叫びの中、

有効と思われる情報がどんどん拡散されていた。

揺れの中で、人々は励まし合い、

そして公式リツイートという方法で情報を拡散しつづけた。

すぐに停電が起きなかった地域にいたのでわたしは常にノートパソコンとiPhoneを充電しながら、

物が倒れてこないように子どもと逃げ込んだバスルームからツイッターにアクセスしつづけた。

また長くなったのでこのへんで。。

続き2

また[前ページ](#)からの続きになります。なんかレポートめいてきたけど、ま、続きやります。みんなが知っていることを事実確認的に文章にしておくのもいいかなあと。

さて震災当日に安否確認に役にたった、あるいは震災に関する様々な役に立つ情報が驚くべきスピードで拡散されたということで、ツイッターの威力が認められ、震災直後はテレビもツイッターを褒めたたえ、積極的に利用することを勧め、使い方を紹介したりしていたし、国の省庁などもツイッターを紹介して利用するように推奨していたような記憶がある。

しかしすぐにガラッと状況は変わる。

原発事故に関する情報が、テレビや新聞などの既存メディアで伝えられることと、
ツイッターで語られることとの間に、

驚くべき大幅な溝ができていったのは、まさにツイッターユーザーたちがこの半年ほどの間に見てきたことだ。

次第にテレビも新聞も、

ツイッターはデマの温床だというようなことを言いはじめたし、

災害時に役に立つのではと利用を始めようとしていた政府も、ツイッターのことは黙殺状態となっていく。

政府、既存大メディアが伝えないこと、

むしろ隠し通しているのではと疑われることが、

ツイッターにはどんどん流れた。

自由報道協会や、既存の記者クラブと無縁のフリーのジャーナリストたちがそれを牽引し、ユーザーの一人一人が小さなジャーナリストとなって情報の発信・拡散・共有に努めた。

最近ではツイッターの情報を規制しようと、

なにものかがツイッターに介入して、

特定の情報（たいていは原発事故の真相や放射能被害の核心に触れたツイート）が
公式リツイートできなくなっていたり、

またはそのような情報を多く提供し、発言に影響力のあるユーザーのフォローが勝手に外れるという報告が出てくるようになった。

他にもチェルノブイリという単語を含むツイートが勝手に消されるなど、

原発と放射能にまつわる、

「当局」にとって都合の悪い情報を遮断するための介入が明らかに存在するとユーザーは確信するようになる。

☆☆☆☆☆☆

こんなふうにインターネットは情報の発信手段としてまた新たな局面を迎えた。
いや、ネットというのは双方向性があるメディアなので、従来のテレビや新聞などとはそもそも全く別のものと考えたほうがいいだろう。
これまで世界にはこのようなインタラクティブな巨大メディアは存在しなかった。
常に上から下への一方通行の伝達だった。
メディアが一方通行なのは施政者にとって都合のよいことこの上ない。
施政者が都合のよい情報だけを与えておくことができたし、それで民衆を洗脳することはたやすいことだった。

しかしインターネットの登場である。
施政者が上から情報を流すというよりも、
むしろ市民の側が情報を盛んに発信するために使っている。
しかも市民同士が横に連携するのにとても役立つ。
特にツイッターではリアルタイムでみんなが見ることのできる透明な場所でなにもかもが行われていき、そのスピーディさと公平さは、従来のどんなメディアにもかなうものではない。

今や、市民が革命を起こすことを恐れた独裁者が躍起になって潰そうとするのが、
他にもない、インターネットというメディアなのかもしれない。
暴動が起きた英国政府がインターネットの使用を制限したというニュースは記憶に新しい。

市民の活動家一人一人の力はそれほどでもない。中にカリスマ性のあるリーダー格が存在はしているが、
従来そのような活動家でも一人ではなにもできなかった。
しかし全員が束になれば、国家を転覆することだってできる。
そう、エジプトやリビアで起きたことをわたしたちは同時代に目撃している。

一見平和だった日本を実は独裁してきた、
経産省、東京電力が今一番恐れているのが、インターネットの威力なのだろう。

したがって、
体制に立ち向かおうとするならば、
一人でも多くのインターネットユーザーを増やすことが近道に他ならないという気もする。
テレビと新聞の洗脳をとき、新しいメディアのすがすがしい空気にふれたら、

もう古くさい黴の生えた絵のうつる箱とかさばると捨てるのも面倒なあの紙束とおさらばしたくなる。

あれ？

普通の日記を書いていたところが、
続いていくうちにこういう内容になりました。

なにが言いたいのかといえば、
日本を救うために、
ネットユーザーは、
さらに新しいネットユーザーを増やすことを頑張りましょう！ということです。
尻切れトンボ的ですがこのへんで。。



8月は懐かしい夏休みの記憶を反芻しながら過ごした。

30代になって色々なことが一気に楽になったが、それまでとにかくあらゆる場所に馴染めないことが人生のテーマみたいなものだった。

学校も馴染めない、家族も馴染めない、職場にも馴染めない。部活も、バスケは好きだから続けていたけど女の子の集団に属しているのはいつも居心地が悪かったし、そもそも

もチームプレーの競技をしていたのにわたしは個人技にしかあまり興味がなかったな、とか。どこにも属せない自分は、人と違って特別なのだと思いがり気味に認識していたということもなく、なんとなく居心地悪いと感じたまま、それを特に言語化することもなく、漠然と居心地悪いなあと生きてきた。結局決定的に学校と決別する場面は起きなかったし、仕事もクビになればまた次の職場が見つかったりしたのでその都度運が悪かったのかな、くらいに思うようになった。だから居心地悪い場所と特に馴染もうと努力することもなく、また完全に撤退することもない人生。そして苦手だった学校にいかなくていいから夏休みでは大好きだったのかといえ、これまた不思議なんだけど、夏休みは夏休みで居心地悪かった。

なにからなんまで居心地悪いなんて、そりゃ、完全に受け手側のわたしに問題があるんだろうと思うし、事実そのとおりなんだと思うけど、子どもにとって世界というのは判らないことだらけで、もう生きていることそのものが恐怖だったのかなとも思う。

でも30歳を過ぎたあたりから、結構楽になった。単に歳をとったということなのか。いまだに自意識過剰だし、深く傷つくようなときは徹底的に落ち込む。でも、とにかく歳をとるといろんなことが楽になるのだなと。色々諦めがついたということなのだろうか。

そしてそういう少し楽になった自分のなかで、夏休みの思い出なんていうものは、よい部分だけ、そのイメージのみが抽出された都合の良い美しいものになっている。

例えばラジオ体操。同じ町内の男の子の誰かに特に恋をしていたということもないんだけど、すごく幼いときは普通に話せた男子と、教室の中ではなんだか昔みたいに喋れなくなってしまった高学年の頃、そういう男子が教室とは別の場所にいることによって、また昔みたいに喋れるのでは？という甘酸っぱい期待があるのに結局やっぱりできなくて失望するというような、現実には思春期の膿を持つ直前のもやもやの時代の、生ぬるくて不快な空気が存在した。わたしはそういうものが嫌いだった。体臭が混じったような男女の違いに関することに関する生々しい臭いは、存在だけでうんざりするものだった。

しかし今、ラジオ体操といえば、すっかり明るい健全な場所に思える。

朝顔の観察日記をつけ終わったら、元気よくかけて、毎日カードにおしてもらうスタンプが着

実に増えていくのを楽しみにしてるという少女の気持ちになれる。なんと昔の自分に対する無責任さかと思う。あのときの生卵みたいに割れそうな不安を抱えていたわたしに対する冒涇かとも思う。

強制のプール登校日も、苦手な計算ドリルの宿題も、なぜか必ず毎年宿題になっていたアイディア貯金箱作りも、キラキラ輝く夏の風物詩。

歳をとっちゃったのよ、ということなのよ。

ずっと辛いままだったら80歳までなんて人間は生きられないんだよ。

子ども時代の辛さを忘れられない、例えば感受性の豊かすぎる作家は自死しちゃったりするでしょ。ああなりなくなかったら歳をとることを受け入れなきゃ。

でも今のわたしはこんなふうに深刻ぶった日記を書いても、基本的にはお気楽な中年おばさんの思考をしている。

決定的に歳をとってしまった、ということなのかな。

9月3日

この電子書籍は日記のように書いていますが、フィクションです、ということになってます。

「この作品はフィクションであり、実在の人物・団体・事件などとは一切関係ありません」ということわりのもとに書かれています。

ひところオートフィクションという言葉が素敵だから、虚と実をないまぜにするような書き方をしてはこの言葉を当てはめてみたりしていたんですが、私小説とオートフィクションとエッセイと小説の間によこたわるものについて厳密にあれこれ考えたり定義することにあまり意味はないと思うようになりました。そういうことを研究している方にとって意味があっても自分にとってはということです。

そもそも言葉は書かれた瞬間フィクションの様相を帯びます。

優れたノンフィクションは真実をもとにしているかもしれないが、優れたフィクションのようになるものなる。

優れたフィクションは、虚構世界を書いてあるのに、まるで本当にあったことを書いているみたいにもなる。

・・・と思うようになってから、特にことわりを入れることもなく適当に書いてきたのですが、細かい突っ込みが入ると面倒なので言い逃れのために（笑）ことわりを入れておくことにしました。ということにしておきます。



9月3日

目が覚めてずっと虫の音を聞いている。

目が覚めるとたいてい最近は反射的にiPhoneに手が伸びていた。

でも今朝はそうしなかった。

世界で何が起きているのかそのすべてを知るのは不可能にしても、最低限、甚大な事故を起こし今なお、火や煙を吹いているらしいあの施設が寝てる間にひどいことになってやしないか。パスポートの入ったバックパックを背負い、子どもを抱っこして空港に駆けつけなくてはならないような状態になっていないのか。それを知るために、浅くて短い眠りから覚めると、まずはiPhoneに手をのばした。

しかし今朝は、ただ虫の音を聞いている。

あの施設が、まさに世界の最後につながる爆発をしたところかもしれない。

青い閃光が地球上の全ての空気をなめらかに切り裂いてゆくのを今では上手にイメージできる。

でも今朝は身体が動かない。iPhoneに手は伸びない。

2011年3月11日、午後2時46分のポイントで世界が二つに切り離されたとして（なにもこのときだけではなくて無数に世界は枝分かれしてゆくものだとしても、やはりこの日のこの時間にその無数のうちのひとつの枝分かれが起きた）、震災の起きてないパラレルワールドでわたしはまだあの街のあのマンションに暮らしているのかしら、と時々考えることがある。

『1Q84』を読んだ人は誰でも、震災後一度は、青豆が高速道路から緊急避難用の階段を使っておりたときに世界が切り替わったのと同じように、311後、自分も同じように別の世界に紛れ込んでしまったことを疑ったのではないかな？

そんなことを思って、わたしは最近『1Q84』を読み返していた。

例えばなのだが、こういう小説を書いてしまった作家本人というものは、書いたからこそパラレルワールドの存在など鼻で笑って信じていないものか、それともある程度存在を信じているから書いてしまうのか、これを書いた作家本人が311後の世界で2つ目の月がどこかに浮かんでいないか空を探してしまうことはないのか、最近は小説を読みながらそんなとこまで妄想が膨らんでいく。

そしてパラレルワールドに通じてしまったということはまた同じ場所を通ればまた、「帰ってこられる？」

のではないかという発想がこの物語を読んだ人間に起きてもおかしくはない。

ではそもそもどこが通り道だったのかと、それを考えだすという埒もない妄想に繋がり、そんな無駄な時間をわたしは震災以降どのくらい費やしたのかと思う。

少なくとも地震そのものではない。それはもう起きてしまった。

その前に、こっそりと存在するはずのポイントを注意深く・・・。

なんとか身体が動くようになって、這うようにしてパソコンの前に座り、
いつものように震災以降頻繁に活用しているSNSにアクセスする。
いつものごとく、つぶやきと呼ばれる、短い文章を投稿しはじめる。
しかしアタマが重い。
幾度も凡ミスをする。
どんな文章を読んでもすんなりアタマに入っていかなかった。
ややあって、ああ、疲れていたんだ、と気がついた。



生あたたかさを感じて、唇と鼻の間を押さえた。

そこに押し付けた、掌の人差し指の付け根にぬるっとした感触があり、離れた瞬間、鮮やかな赤い液体が付着しているのが目に入る。

ほとんど同時に、

「センパイ、鼻血」

同じ編集部の後輩、鳥山ワカコがそう言った。

ワカコの声は静かな編集部のフロアの人間すべての耳に届いたと確信するが、もう最近では誰もこちらを向くこともなくなったことを思い出す。

わたしはワカコと一瞬あってしまった目を逸らして手早くデスクの上のティッシュの箱に手をのばした。

鳥山ワカコはこのフロアで唯一、四六時中マスクで顔を覆っている。その理由について誰かが尋ねるとそれにワカコがお決まりの受け答えをするというのもひとところギャグとして編集室で流行していた。最近ではあまり見ない気がするが、たまたまわたしが見てないだけかもしれない。

「じゃあこのページのデザイン、このイメージで一度作ってくれるかな」

わたしはティッシュを押さえたままで言う。

「いつまで仕上げればいいですか」

マスクにくぐもったワカコの声も聞きなれた。

「明日一杯でお願い。今日はもう帰るんでしょ」

ワカコのぱつんと揃えた前髪とマスクの隙間に、しょっちゅう変えるカラーコンタクトの色なのか、そもそも彼女は元々こんな目の色なのかもうわたしには判別がつかないのだが、透明なブルーグレイの色で2つの並んでいるものが、わたしをじっと凝視したままだ。

「結構出てますよ。ティッシュ変えたほうがいいんじゃないですか」

ワカコに言われて見てみれば、確かに一枚のティッシュ全体に赤が広がっており、抑えている手が湿ってきていた。慌てて3枚ほどティッシュを追加した。

「じゃ、お願いね」

わたしは自分の作った誌面のラフを片手でかき集めてその紙の束をワカコの前に置いてそこを離れる。

先ほど「センパイ、鼻血」と言ったときはフロア全体に届く声を出したくせに、次にワカコはわたしにしか聞こえない声で、

「死にたいんですか」

と、確かに呟いた。

聞こえないふりをしてわたしは自分のデスクに戻る。

もうワカコのほうは向かない。彼女がジャケットを羽織って鞆を持ち、お先に失礼しますと編集室を出ていくまで落ち着かない気分で過ごす。誰かがワカコの帰宅したあとに「ワカコちゃんよくやるなあ。がっちり一日中マスクつけて」とまた彼女をからかったりしはじめることをわたしはどこかで期待している。そういうことも確かによくあった。夏まではしょっちゅうだった。しかしそれもみんな飽きてしまったようだ。もしくはマスクのワカコに慣れてしまった。

しばらくして、

「仕事終わったー？紗英ちゃん」

山崎先輩の声がしてわたしの背後に立った気配を感じる。振り向く前に鼻血が止まったのかティッシュをチェックした。鼻血はどうやらとまったみたいだった。

「表参道に新しくオープンする店のパーティの招待状来てるんだけど、夕食がてら行ってこない？」

山崎先輩の誘いは無条件にのるという生活をもう10年以上続けているので、オッケーの返事をたぶん反射的にしたのだと思うが、先輩が、

「じゃ、そろそろ行こうよ。お腹へっちゃった」

と言いながらコートを羽織る姿を見ながら、いつどんな承諾の返事をしたものか、もうよく分からない。最近物忘れが多い気がする。



地下鉄駅構内から階段をのぼり表参道に出る。街を行き交う人は長いブーツを履いてファーを巻いている人も多い。まだそれほど秋は深まっていないと思っていたが、自分だけが薄着をしすぎなのではと急に不安になる。

「どんな店なんです？」

「有機野菜のみを使用するってコンセプトみたいね」

先輩はオーガニックとかスローライフにまつわる書籍を数多く編集してきたので、その手の店との付き合いが多かった。わたしのところにもしょっちゅうその手のブランドの新発売のお香やボディーソープだとかが余ってまわってきた。

昔その場所に確かに他の店があったはずなのにどんな店なのか思い出せない一角に、道に面した部分がほとんどガラス張りの建物がいつのまにか出現していて、そこが今度オープンするという店であるらしかった。先輩はほとんど顔パスなのでわたしも一緒にそそくさと入場する。この業界で15年働いているが、パーティに入場するときいつも断られるのではないかと背筋が冷たくなる。出版社宛にきた招待状を持っても、だ。そんなもの出すから余計おどおどしてみられるのよ、わたしみたいに最初から顔パス当たり前って態度で受付すればとめられたりしないのに、とかなり以前に先輩に言われた気がするが、もうどのくらい昔なのか思い出せなかった。

店内は昼間は日が差し込み明るい雰囲気なのだろうが、今日はあえて照明を控えめにしており暗かった。間接照明がところどころでぼんやりと光っている。よく見ればオレンジ色のかぼちゃを割り抜いて顔を刻み、ランタンにしてあるものだった。

ウェイターにワイングラスと一緒に手渡された小さなカードにはそのワインも丁寧に作られた有機ワインであることが印刷されている。ひと口飲んだが、酸っぱい味がしただけだった。野菜を使った様々な料理がカラフルに盛りつけられていて、人々は談笑しながら、オーガニックワインとともにそれを味わっていた。

そのうち、店のオーナーであるという男性のスピーチが始まる。

「皆様本日はようこそパーティにお集まりくださいました」

ざわめきに混じってそのマイクの声はよく通って届く。

「…さて、東日本大震災から早いもので半年以上が過ぎました。

被災地の復興を願い、今日は特に被災地の野菜を中心に仕入れをさせていただきました」

というところで、自然に拍手が起きて、それは止まらなくなる。

拍手が盛り上がり、それがまた自然発生したのと同じように鳴り止んだとき、

店のオーナーにはいつの間にかくつきりとスポットライトが当たっていた。

彼の顔はたくさんの人のあたたかい拍手に本当にあたためられたように上気していた。

その余韻を味わうような恍惚とした彼の鼻から一筋、赤いものが流れ落ち始めた。

気づいているのかいないのか、彼は、それを拭いもせずに、

「さあ、今日は心ゆくまで料理とそしてワインをお楽しみください」

そう締めくくり、またひときわにぎやかな拍手が起こった。

あちこちで乾杯がおこって、ガラスのぶつかる澄んだ音がこだました。

ふと気がつくと、先輩の鼻からも一筋の血が流れていた。

そういえば先輩の鼻血は初めて見るかもしれないと気がつく。そしてこのオーガニックワインは

、まるで血の味がすると思ったところで、わたしもまた鼻血が再び出ていることに気がつく。

暗くて気がつかなかったが、会場のあちこちで鼻血を出している人がいた。みな笑っている。と

ても楽しそうで幸福そうに見えた。ティッシュを持っていない人には、皆、自然に親切にティ

ッシュを差し出していた。慣れたものとわたしは見入った。

そう、慣れてしまえば、どんなことも平気だ。

わたしはワイングラスの残りを飲み干すと、なにか料理を食べるために、色とりどりの美しくて

おいしいような料理の並ぶカウンターに近づいていった。

クリスマスがこれだけ浸透した国だから、そのうちきっと、とは思っていた。ここ最近、見事にこの季節、街はジャックオランタンや黒い魔女の人形、オレンジやパールのハロウィーンの飾り付けで溢れるようになったことをワカコは素直に喜んでいる。

ワカコは数日前に職場の最寄りである恵比寿駅構内にディスプレイされた3つの大きなジャックオランタンに、早朝まだ通勤客の少ない頃、マスクを付けてきた。

しかし帰宅するときに見たらマスクは全部取り払われていた。自分が使うマスクではないのでその時はガーゼでできた安物を使ったのだが、ワカコは今朝、自分用に買った高価なN95マスクをアロンアルファを使って絶対に剥がれないようにまた3つのカボチャそれぞれに接着してきた。

この間は透明なテープで止めただけだったのがいけなかった。

まったく手抜きであった。敵はマフィアたちだ。ぜひともアロンアルファで戦うべきだったとワカコはひとりごちながら、ついでにカボチャそのものもその台座から移動できないようにやはりアロンアルファをべったりと塗りしっかり接着した。

もちろん駅の監視カメラにうつることを考慮して彼女は十分な変装をした。髪は全部ニットキャップの中にたくしいれてサングラスにマスクをつけて顔を覆い、ジーンズの下には身長が15センチアップするシークレットブーツを着用（身長165センチの彼女はそれで180センチとなる）、古着屋で調達したブカブカの男物のコートの中に、体格をよく見せるために開発されたジャケットを通販で買って着込むという念の入れようだった。ブーツもなかに詰め物をして28センチのサイズを履いた。。歩き方なども練習しておいたので絶対にあれがワカコだと監視カメラくらいでは判らないはずだった。皮の手袋もはめていたので指紋も残していない。

恵比寿駅を出てしばらく歩き、大きなオフィスビルの男性トイレの個室に入って着替え、ごつくみせていたジャケットなどを脱いでもまだ男性と見える恰好でトイレを出て、職場に着く前にまた別のトイレで本来の自分のいつもの服装に戻った。

その日、退社したワカコはドキドキしながら3つのジャックオランタンのディスプレイに近づいた。朝の変装はしていない。従来 of 女性としてのいつものワカコの姿をしている。それでもN95マスクはいつものようにしっかりつけていた。

なんとカボチャもマスクも無事だったうえに、NO NUKESと書かれた黄色のタスキが3つのジャックオランタンそれぞれにかけられていた。しばらく観察していたら、時々立ち止まる人がそれをスマートフォンなどで撮影している。

ピンときてツイッターで検索した。「恵比寿駅 カボチャ」と。

「恵比寿駅でこんなもん見つけました！#脱原発」というコメントなどとともに、そのマスクをしているジャックオランタンの写真がアップされている。しかももう10種類は違う写真を見つけたし、それぞれがたくさんリツイートされている。中には反原発の大物アカウントの人にリツイートされた写真もあって、今日の午後くらいから爆発的にツイッター上に拡散していることをワ

カコは知った。

それを確かめるとワカコは駅構内の成城石井へ入ってゆく。

汚染された国内の食材を避けるためにほとんど毎日足を運ぶようになった。

今まで利用していた自分のアパート最寄り駅の汚染食材しか売らなくなったスーパーも時々寄る。ただしなにも買わない。特に汚染のひどそうな食材をかごにいれようとしている人にワカコはおもむろに近づいていく。ガイガーカウンターをその食材に当てて、「うお、高い。やばいこれ」と言って大袈裟にのけぞったりしてみせる。それを見た者はたいていその食材をまたカゴから売り場に戻した。そのうち店員につまみ出されるかと危惧していたワカコだったが、注意をしてくる人間はまったくといっていいほどいなかった。店長らしき人間もワカコのことを透明人間として扱った。ワカコが近くでガイガーを持ってその大仰なそぶりを見せても、眉ひとつ動かさずに店長は素通りしていった。

とにかく放射能の「ほ」の字も口に出すことが憚られるという重い雰囲気がかこ首都を覆っている。あの日のフォールアウトとともにその黒い霧のような「口に出せない風潮」もまたやってきて、居座り続けているのかもしれない。もう半年が経とうとしている。それなのに首都の人たちはますます何事もなかったように毎日を過ごしている。

ワカコはそれなのにどうしてこの首都に自分が居続けるのだろうか時々自分に問いかける。

ワカコは勤務している出版社に特に思入れがあるわけでもない。とっとと首都とおさらばしてどこか西日本、もしくは外国に「ズラかる」ことも可能だった。彼女は語学に長けていたし、どこに移住してもやっていけるタフさを持っている。

彼女は3月、原発の爆発を知って直ちにタクシーを飛ばして空港へ向かい沖縄へ逃げた。

会社には地震で倒れてきた家具で頭を打って入院したとメールを打ってそのまま病休を使うことができた。誰もそれ以上追求してこなかったし見舞いにいきたいとどこの病院かを尋ねてくる者もいなかった。

四月の半ばに戻ってきても、会社で頭の怪我を心配してくれる人もいなかったし、また戻ってきたことを心から喜んでくれる人もいなかった。

ワカコはそれからずっと首都に住み続けていた。

ワカコは見続けていたかった。

なにを？

ワカコは自分のツイッターアカウントで、恵比寿駅のジャックオランタンの写真をあげている人のツイートを引用して、自分もツイートした。

「ヒヒヒヒ、なにも知らずにみんな死に絶えてゆくのう、愉快じゃのう」

彼女のアカウント名は「死神」だった。

来月、10月31日は冬の入口。その日、あの世とこの世が繋がって、良くないものたちがこの世に紛れ込んでくる。その日こそ、きつとこの都市の首を狩る大きな鎌を携えたヤツがやってくるはずだった。もうすぐ。もうすぐその日はやってくる。

ワカコはほとんどその日を心待ちにしているような気分になっている。

早く、全部、終わってしまえばいい。

ワカコはツイッターのアプリを閉じて鞆にしまうと、外国産のチーズやらオリーブやらワインやらの詰まった袋を持って帰路につく。

一人で今日も祝宴を催すのだ。

ゆっくりと沈み続けている巨大都市の甲板で人々は最後のダンスを踊っている。オーケストラも演奏をやめる気配はない。

ワカコはシャンパンをあける。

乾杯。フルートグラスを高く掲げて、そしてその繊細に弾ける泡を一気に飲み干した。

日本に赴任が決まったとき、我が欧羅巴大陸の同朋が記した日本での体験記めいたものを何冊か読んだ。

エキゾチックさ、あるいは禅のスピリット、浮世絵の味わい。

そういったものに取り憑かれて熱病患者のようになって焦がれても、彼の地の人の心の裡には決して入り込めないという苦悩。

みんなして仏像みたいな穏やかな笑みを称えてはいるが本当のところは何を考えてるのか判らない。

多くの書物にはこのようなことが述べられていた。

そして、表情が乏しいだけでなく、感情の起伏もまた乏しいというその民族について、僕はそれなりに親しみを感じて、初めての日本行きの飛行機に乗ったものだ。

今では、ペレグリン・ホドソンが書いていた、駅の構内に漂ううどんの匂いというものが実際にどんなものかを知っているし、日本にいる間に本当に沢山の駅を利用したが、その匂いはハルキムラカミ風にいえば宿命的に日本の駅というものにしみついているものであることも理解した。しかしついにこの国ともお別れする日がやってきた。

僕の勤める会社が東京にあるアジアの拠点をシンガポールに移転することに決めた。僕もそのシンガポールの新しい支社に移ることが決まった。

そして僕は日本を離れる前にどうしても声をかけてみたかった女の子に気持ちを打ち明ける決心をした。

恥ずかしながら僕は自分のマンションのある恵比寿で彼女を時々見かけるようになって、あるとき仕事が終わって帰宅していく彼女のあとをつけた。それでなにをするつもりもなかった。ただ、彼女のアパートの場所を知ったに過ぎない。

アパートの向かいにファミレスがあったので、僕は休日になるとここに来てひがな本を読んだりお茶を飲んだり食事をして過ごすのがここ何年もの習慣になっていた。

運が良ければ休日の彼女がアパートから出てくるところを目撃できると思っていた。しかし彼女が休日にどこかにでかけるのを僕はほとんど目撃することはなかった。彼女はどうか土曜日と日曜日はほとんどどこにもでかけることなくしっかりと部屋に閉じこもっているらしかった。彼女の姿を見ることができなくても僕は彼女の近くで過ごしていることでやすらぎを感じた。

震災直後、彼女はしばらく東京を離れていたみたいだ。しかしひと月ほどしてまた戻ってきて、恵比寿にも姿をあらわすようになった。

久しぶりに見た彼女は、かなり本格的なマスクでがっちり顔を覆っていた。

誰から見ても、放射能を防ごうとしているのがわかった。

単なる花粉をガードするような生やさしいマスクではなかったからだ。

僕はその日ついに24時間営業のそのファミレスで朝までを過ごしてしまった。もう会社の東京で

の業務は全ては終えていて引越しや移動に使ってよいとされる休みに入っていた。

ファミレスの窓の外の明け方の住宅街はまだ半分眠っているようだった。それでもここを離れがたく僕は窓際から彼女のアパートの扉を見つめていた。

しかし次の瞬間、僕はぎょっとした。彼女のアパートの部屋の扉が開いて、大柄な男性が出てきたのだ。なんということだ。彼女の部屋に、昨日男性が泊まっていたとは。

僕は慌てでレジを済ませて外に飛び出す。

男性は駅に向かっているようだ。僕はこっそりとそいつのあとをつけた。

電車に乗ってしばらくして気づいたが、電車は僕がこれから帰るべき恵比寿を通過しようとしていた。これ以上男性を追わずに、恵比寿で降りてマンションに戻るべきか迷っていたら、男性はまさに恵比寿駅で下車した。こいつも恵比寿に棲んでいるのかと胸糞悪くなったが、僕もそこで電車をおりた。

そして少し距離を置いて男性の後ろを歩いていたら、男性は立ち止まって奇妙な行動をとりはじめた。

恵比寿駅構内に飾ってあるハロウィーンのカボチャにマスクをつけているのだ。

そう、あの子が震災以降ずっとつけているあの大きめのマスクを。

もちろんその男性も同じマスクで顔を覆っていた。サングラスもしているので顔はほとんど見えない。

男性は接着剤のようなものでマスクを完璧にカボチャに固定しようとしている。

まだ駅には人が少なく、男性のやっていることを気にとめている者もないようだった。

男性はマスクを3つ付け終えて、さらにカボチャにまで接着剤を丹念に塗ってそれを台座にしっかりと固定した。

彼女のボーイフレンドは熱心な反原発活動家というわけか。

男性がいってしまうと、僕はマンションに帰って、引越しの準備もほとんど済んでがらんとした部屋で、**NO NUKES** と書いた黄色のタスキを作成した。

3つ出来上がるとそれをもってまた恵比寿駅にとって返して、それらをマスクのジャック・オ・ランタンのひとつひとつにつけてやった。

これでこいつらがただの風邪ひきさんである可能性は排除された。

れっきとした反原発活動家たちのできあがりだ。

僕は満足した。

彼女と、あのボーイフレンドが早く安全な場所に逃げて、幸せな未来を築くことを祈った。

そしてやっこの国を去る決心がついた。

つづく

佑介は、9月19日、この日になって初めて、はたと気づいた。

デモというものに、いったいどんな服装をして臨めばよいものか。

フルオーダーで作ったスーツを着て365日のうちの大半を過ごしている。

休日も襟のついたシャツを着ないとなんだか落ち着かなくて、ポロシャツやトレーナーなど、スポーティな洋服がワードローブにほとんどないことを特に不便だと感じたこともなかった。

とある高級スポーツジムの会員にはなっているが、ここ最近は忙しく毎月の会員料が勝手に引き落とされているだけの利用となっていた。それでも佑介は贅肉とは今のところ無縁だ。

出張でNYに出かける際に、取引先の人間が紹介してくれた、プライベートな顧客だけを相手にしている店でスーツは作るようにしていた。

その店の店員のマーティンのアドアイスに従ってシャツやコート、小物に至るまでを自分の美学に則ってTPO別に挑めてきたつもりだった。人を見かけだけで判断するのは阿呆だが、だからといって身なりに無頓着すぎるのはもっと阿呆だというのが佑介の考えだった。

しかし。デモに参加するという時と場所と場合にふさわしい服装というものを、これまで佑介は想像だにすることがなかった。

なんなら国際電話で今すぐマーティンと連絡をとって、デモに相応しい洋服ってなんだろうかと意見を仰ぎたいとすら思った。今NYが何時なのか計算までしたところで、それがいかに馬鹿げた考えであるかに気づいて、佑介はぎゅっと目を瞑った。

あの震災が起きてから、デモは都内の至るところで目撃するようになっていた。

しかし自分には関係のないことだと思っていた。佑介には佑介の戦う場所があったし、デモで頑張る人には任せておき、自分は自分の職務をこなすことでこの国の未来に貢献しているはずだと信じていた。

でも、数日前。

佑介は恋人と待ち合わせた恵比寿駅の構内のカフェに向かって歩いていた。

ふと、ちょっとした人だかりができていることに気がついた。7,8人が取り囲むのは、マスクをつけたオレンジいろのカボチャだった。

カボチャの中に電球が入っているらしくて、カボチャの目からは灯が漏れている。本来口と鼻の穴からも灯は漏れるはずだったのだろうが、それらしっかりとしたマスクで覆われていた。

NONUKESというタスキをかけられたそのマスクのカボチャはあたりを優しく照らしていた。

懐かしかった。佑介は幼い頃、両親の仕事の都合で数年間アメリカで暮らしたことがある。ジャック・オ・ランタンは魔除けのカボチャ。悪い奴から守ってくれる正義の光。

トリック・オア・トリート

アメリカの甘すぎるキャンディーやチョコレートをそれほど好きだったわけではないけれど、あのカボチャのオレンジとセットになって佑介にとっては子ども時代のよき思い出として記憶の奥のほうにしまわれていた。

「会社にね、ずうーっとマスクしている子がいるの。絶対に外さないのよね」

恋人がそんな話を最近するようになった。

目障りなのよ、と訴えているわけでもない。

共感するわというのでもない。

しかし最近、確かに彼女は会うたびに、そのマスクの同僚の話をするようになっていた。

しかし佑介のほうとて、それにどんな反応をすることもできないでいた。

そしてその恵比寿駅のジャック・オ・ランタンに近づいていったとき、その側にたっていた若者の一人にチラシを渡された。

チラシには9月19日、明治公園で「さようなら原発5万人集会」があると印刷されていた。

佑介は、これから今日、人生初めてのデモに参加しようとしている。

☆この連作短編は一応すべて話がつながっています。この電子書籍には目次があるのでよろしかったら第一話からお楽しみください～(^^) [連作短編第1話「カボチャのランタンと鼻血」](#)からスタートしています。

2011年9月19日、明け方までツイッターのタイムラインを追っていたワカコはそれでも一度仮眠するためにベッドの中に入った。

すでに部屋の中にほの明るさが感じられた。

ジャック・オ・ランタンの形をしたペカペカした透明のプラスチックなどで作られた玩具みたいなライトをソニプラなどで毎年ひとつは買っているのをずらっとベッド周りに並べてある。

それらが明滅する部屋でワカコはほとんど一晩中パソコンにずっと向かっていた。

彼女の「死神」というアカウントは露悪的な言葉遣いで一部からは猛烈な批判を受けてはいたが、それも反原発運動の過激なひとつの手段として受け入れられてフォロワーはシロウトとしては多い方だった。

性別も居住区も明かさず、「死神」は、首都がすでに目に見えない殲滅状態であると繰り返しツイートし続けている。

都市の実態である生命はすでに剥奪されており、蜃気楼のような街並みの中を蠢く、元・都市生活者たちの描写が連綿と続く「死神」のツイートは確かに不気味なものだったが、それを警告と捉えてツイートを支援する者が増えていた。

さて、ワカコがマスクをかぶせた恵比寿駅のジャック・オ・ランタンがネット上で猛烈な勢いで拡散されて反原発のひとつのシンボルとなっているのは知っていたが、気になる発言をつい先ほど見かけていた。

「あの恵比寿のジャック・オ・ランタンにNO NUKESのタスキをかけていたのは金髪碧眼の超カッコイイ外国人男性だったよー。私目撃したんだよ～」というものだ。

ふうん、超カッコイイ外人、ねえ・・・

眠りに落ちる直前にワカコはコレクションしたカボチャのライトをひとつひとつ消しながらそう呟いて、そして、ベッドに入ってスコンと眠りに落ちた。

目が覚めると9月19日の首都はいい天気だった。

タイムライン上には「暑くなりそうだからデモに参加する人は水分補給忘れずにね」「放射能の拡散予想だと今日は関東内陸が要注意だからマスクをしたほうがいいよ」というデモに関する呟きがいくつも流れている。

原発事故以来、少しずつ規模が大きくなって繰り返されてきたデモの今日は集大成と言えるのかもしれない。戦いはずっと続くにせよ、今日はとても重要な日だという認識がタイムライン上には感じられた。

ワカコはペットボトルの水でコーヒーを沸かし、成城石井で昨日買ってきた外国産のシリアルにドライフルーツを混ぜ豆乳を注いだものを食べながら、眠りに落ちる寸前に気になっていた**NO NUKES**のタスキをかけた外国人青年についてなにか続報はあるかとパソコンのキーを打ち続けた。

しばらくすると、カボチャにタスキをかけたらしき本人のツイッターアカウントがあっさりと判明した。それは主に英語で書かれたツイートだったが、時々日本語も混じっている。日本の原発や放射能関連のニュースを英語にしてどんどん海外に向けて発信しているらしきそのアカウント主が、恵比寿のジャック・オ・ランタンにタスキをかけた発言を確かにしていた。なぜタスキをかけたのかなどは一切書かれていないが、確かに本人は自分がやったことだと述べていた。ワカコはこのアカウントをフォローしておいた。このアカウント主も今日はデモに参加すると書かれている。

ワカコも今日はデモに参加する。

目が覚めるとまた生あたたかいあの感触だ。

自分の体液だと思えば、懐かしさのようなものを覚える。

そんなことを言えば、またあのワカコに「死にたいんですか」と囁かれてしまうのかもしれない。

だとしても。

体液に触れるというのは生命の原初の記憶のようなものを辿るような心地がする。

3月以降確かに鼻血を出すことが増えた。尋常じゃないとワカコは言う。

じゃあ一体尋常って何なのよ。

わたしはワカコがマスクをしてまで必死に防御したいものについて思いを巡らせる。

マスクをしないわたしを責めないで！

ときどきそう叫びだしたくなる。

だってそうでしょ？かの地で起きた事故を起こしたのはわたしじゃない。

悪いのはわたしじゃない。

なのにマスクをしないことで、わたしをどうか責めないでほしい。

日々囲まれている食べ物が汚染されているのもわたしのせいじゃない。

最初は怖いと思った。でも仕事をやっていく上で、食べないわけにはいかなかった。

だってレストランや料亭の取材をしてあるくのがわたしの仕事のメインなもの。

これまで何冊ものグルメ本を作ってきた。

取材をさせてもらう店で聞けると思う？

この食材に含まれる放射性物質はキロあたり何ベクレルですか？って。

彼と付き合い始めて、まだそれほど経ったわけではない。

でも彼とは、一連の結婚までの莫迦莫迦しいゲームを経ても、この先一緒にいたいと思っていた。本気でそう思った。

自分の信念を曲げてかわいいお嫁さんのふりをしてまで結婚していく女たちを馬鹿だと信じてきたが、そういえば会社に気に入られたくてたくさん信念も曲げてきた。結婚もある程度は致し方ないと諦めて、そう、彼の伴侶というやつになりたいと思った。

彼と子どもを作って、小さいながらもあたたかい家庭というものを持ちたかった。

でもあの事故が起きてからすべてが無意味に思えてきた。

事態がかなりまずいと気づいたときにはもう手遅れだと思えた。

ワカコは四月の半ばまで会社を休んでいた。彼女が東京を離れていたという噂はきっと本当だろう。震災で怪我をしたことになっているがどこにも傷跡なんて残っていない。3月の東京になに

が降ってきていたのか、ようやくといわたしにもわかってきたよ。ワカコ。あなたがなんでマスクを外さないのかも。

ティッシュでおさえないと、またシーツにシミを作ってしまう。わたしはノロノロとベッドから這い出る。

でもティッシュの前に、急に思いついて、携帯で彼に発信した。

数回のコールのあと、留守電につながる。

数日前に一緒に食事をしてからお互い忙しくて連絡をとっていない。この3連休の前半もわたしは取材に忙しかった。ようやく今日がオフなのだ。しかし彼の予定を聞くのを忘れていた。彼にしたって今日は休みでないのかもしれない。

すぐに携帯が振動してメールを受信したことを知らせた。

「おはよう。電車の中だから電話を取れなくてごめんね。今日はデモに参加しようと思います。よかったら一緒に参加しませんか」

という彼からのメールだった。

デモ？

とっさには意味が判らなかった。

最近都内で週末になればどこへいっても目撃してしまうあの人の群のことは知っている。

でもその人達と彼とがうまく結びつかなかった。

一度、彼の車の助手席でその群を見たとき、運転席の彼はそれについてなにもコメントしなかったではないか。

わたしはひどく混乱した。

それから忘れていた唇の上に手をやってみれば、今日もやはり鼻血が出ていた。

7話目

*1話目～6話目はこの電子書籍の目次の機能にリンクしてあります。

*ひとつの話ごとにそれぞれ主人公が入れ替わり、しかしつながったひとつの物語になっています。

9月19日、目を覚ますと東京は明るく晴れ渡っていた。

ツイッターをすぐにチェックすると、今日は気温が上がりそうだというツイートをいくつも見かける。

しかし空の高さや光線の具合は紛れもなく秋の到来を告げていた。僕はコーヒーをいれて引き続きiPhoneを眺め続ける。

そしてまた窓の外の東京の空を眺めた。

美しく澄んだ東京の空を眺めて、この都市がまさか放射能に汚染されているなんて、信じがたい気分になった。

3月の震災以降、幾度もそんな気になった。放射能なんて実はどこにもなくて、僕だけが悪い冗談にひっかかっているのではないか。日本語の不自由な僕がニュースを読み間違えているだけで。

しかし海外のニュースではより残酷に東京の汚染の度合いを報じていた。

それなのに東京の人々は麻酔にかかっているように平然と街の中を歩き回っていた。このときほどニホンジンが本当になにを考えているのか理解できなかったことはない。

いや、嘘だ。僕にはなんとなく判る。ニホンジンがどうして平然としているのか。

だって、僕にしたってここを去りたくないと思っている。

東京ほどわくわくするような、それでいて快適な都市はない。

安全で豊かで人々は優しかった。

心から東京が好きだった。

夢なら覚めて欲しい。

東京じゅうの人が夢を見ているつもりになっている。

きっといつかこの悪夢が覚めるに違いないと信じて。

でも彼女は夢を見ることができなかった。マスクで顔を覆って陰しい目をして歩いていた。3月以降、彼女はますます身体を硬くして、全てを拒絶して生きているようだ。

それなのになぜ彼女は東京を去ろうとしないのか僕には判らない。

そして僕の方とはといえば、日本を脱出する決心がついたものの、日本を出るのは、どうしても参加したいと考えていた今日の「さよなら原発5万人集会」が終わってからにすることにした。

日本の業務をシンガポールに移すために夏は休みを返上で働いた。

引越しや移動にあてがわれた休みに加えて遅めのバカンスを取得中だった。多くの同僚は引越しの準備が整うとすぐに日本を脱出していた。女性社員と幼い子どもや奥さんは3月の時点ですでに

本国に帰っていたし、僕達社員も事故のあと本国に帰ってもよい許可が出ていた。
5月以降に通常業務が再開されたのは、最初からシンガポールにアジアの拠点を移すことが目的で、ほとんど残務処理だけに明け暮れた。それでも希望者は日本を離れていることも許されていたのだ。年配の上司が僕にも帰国を勧めてくれたが、僕は業務の完了する8月末まで東京の支社に残る意志をみせた。無理をするなど言われたが、僕は日本に心残りがあった。正確に言えば、彼女のことが心配だったのだ。

ツイッターをチェックしていて、フォロワーが増えていることに気づき、どんなユーザーなのかをチェックした。

そのなかに「死神」というアカウントがあった。

時々リツイートされて僕にも届くこのアカウントの発言は読んだことはあった。

ひどく恐怖を煽る内容のものが多かったので最初は不快な気分させられることもあった。しかしだんだんその内容が現実に近いように思えてきて、このものをはっきり言わない国においては、こういう人間もまた必要なのだと思うようになった。

しかし「死神」さんが僕になんの用があってフォローをしてきたんだ？

確かに僕も脱原発を訴えるアカウントの一人だが、どこかで接点があったのだろうか。

死神は数千人にフォローされてる割に自分からフォローしている人間の数がとても少なかった。僕がその数少ないフォローの中に選ばれるのは光栄なことと言えるのかもしれないが、なんとなく釈然としないことだった。

僕は朝食を食べて、明治公園の集会に出かけるためにマンションの外に出た。

恵比寿駅のカボチャは今日もマスクをし続けている。

僕はふと思いついて死神にメンションを飛ばしてみる。

「おはようございます。フォローありがとうございます」と。

電車に乗ってしばらくしてこちらにもメンションが届いたことを知らせる表示が届く。

死神からだった。

「こちらこそ、ジャック・オ・ランタンにタスキをどうもありがとう」

僕は確かにあのジャック・オ・ランタンにNO NUKES と書いたタスキを自分がかけたことをツイートで告白していた。

しかし「死神」から礼を言われるとはね。

僕はそしてハッとした。

死神は、ジャック・オ・ランタンにマスクを接着した大柄な男性なのではないかと。

9月19日、ワカコは今日は変装をすることなく、普段のワカコの服装でアパートを出る。さすがにシークレットブーツを履いて男の恰好をしたままデモで歩き続けるのは難しい。それにデモの群衆に紛れるぶんには特に姿を変える必要性はないと思われた。

もちろんマスクはつける。さらに大きなサングラスで顔を覆う。これは変装のためではなく、当然、防御のためである。

例の、目には見えないあの粒子状になった奴らがこの都市を支配している。そいつらを一粒たりとも体内に入れるのはゴメンだ。

そもそも原発をこの国に導入した奴はみんな墓場だろう。

核を支配できると無邪気に信じて核を生み出したアタマの足りない科学者たちももう冷たくなって地面の下で蛆虫に喰われながら一にも知らずにのんきに眠っていやがるのか。火遊びしてみたら後始末できなくなって泣いている子どもみたいな連中め。

ああ忌々しい。

ワカコは核を生み出して責任もとらずに死んでいったそいつらと日本にそれを持ち込んで推進に関わった馬鹿どもをを一人残らずズタズタにしてやりたいと思う。蜂の巣みたいに穴があくまで突き刺して殺してやれたらどんなにスッキリするだろうかと想像する。

推進してきた政治家や官僚の残党が少数、醜く・しぶとく生き残ってはいるだろうが、もう内側から腐敗し始めたような肉を檻褸のようにまとった老人と成り果てている。

そのゾンビみたいなヤツを今さら殺したところで、死人を殺したみたいに手応えはないだろう。そして、だ。

あのおぞましい電力会社も今の政治家も官僚も、すでにこの馬鹿げた日本社会の支配者ではなくなっている。

今、日本のみならず、この地球という惑星全体を支配しはじめたのは、ほとんど眼に見えないあの粒子状の奴らなのだ。

愚かな政治家や電力会社社員や官僚どもをブチ殺したとしても、この粒子状の小さな悪魔は消えてはくれない。

ブタみたいな原発推進の奴らも、なんの罪のない我々も、もう等しくこのミクロの悪魔の支配下に置かれた。もう誰も逃げられない。日本を脱出したとしても逃げられない。もうこいつらは地球上から消えうせない。

史上最悪の事態だとワカコは呻く。

そしてこれをきっかけに人類は亡びるんだらうとワカコは考えている。

ふいにiPhoneが振動したことに気づく。

ワカコのツイッターアカウント「死神」あてのメンションだ。

例のNO NUKES のタスキをジャック・オ・ランタンにかけたという（噂では金髪碧眼のハンサム

である) 主からだった。

「おはようございます。フォローありがとうございました」

という単純な挨拶のみだった。

フォローを受けるたびにこのような挨拶をしているだけかもしれない。

それでもワカコは返事を書いた。

「こちらこそ、ジャック・オ・ランタンに**NO NUKES** のタスキをかけてくれてありがとう」

そう返信したら、ワカコは妙に楽しい気持ちになっていることに気がついた。

こんな気持ちは、久しぶりだった。

佑介が紗英に惹かれたのは、紗英が打算もあれば腹黒いところもある女性だからだ。

それで彼女は開き直っているわけでもない。そういう部分を人目につかないようにしているのは社会を生きていくうえでの礼儀だが、なにがなんでも隠してしまえばいい子ちゃんになれると信じているようなところもない。裏表がないというほどサバサバしているのとも違う。

みんな複雑な内面を持った人間だということは佑介なりに理解している。ただ、あらゆることに對する彼女のスタンスは佑介が共感できるものだった。

お金も地位も名声もないよりはあったほうが良いと自分が言うときと、彼女が言うときのそれには近いものがあると。

つきあったり結婚したりする女性が必ずしも自分と同じ価値観を持っていなくてもいいとは思っていたが、紗英の価値観に共感することはまた、自分にとって心地よいことだった。

紗英の価値観はとりもなおさず、自分のこれまでの人生を肯定してくれるものだ。

褒められたものではないにしても、肯定してくれると感じられる。佑介にはそう思えた。

紗英と出会ったのはとあるパーティだ。

パーティに慣れすぎている女性というのも嫌だが、慣れなさすぎている女性と調子を合わせるのも疲れる。そう、紗英はあらゆることにおいて過剰さも不足もないという点で自分と棲息している場所がかぶっているように感じたのだ。

ウブすぎずスレすぎず。

そういう生き方はズルいような後ろめたさがないわけではない。しかしこの東京という都市を生きて行くうえで都合がよかった。自分とて苦勞してそういうポジションを獲得したが、生きるために必死にやってきた結果だ。

そのパーティで佑介は、恋人になってもいいなと思う女性と一緒にいた。その連れの女性が一所懸命に紗英のことを褒めている。会場をあとにしても褒めていた。不自然なくらいに。それは彼女が紗英を脅威に感じていたからに他ならない。そのとき残酷な気持ちが佑介を支配した。その女性が自分にとって脅威に感じる女性を褒めるという方法で自分の恐怖を取り払おうとしているのなら、なおさら紗英を自分のものにして、そしてこの、目の前の女性に知らしめてやりたいと。

そして実際にそうした。

ただ、そのときの女性にとってはそれが幸せだったのだと思う。自分にふられたことによって一時的に傷付くにせよ、きっと自分ではない男性と結ばれたほうが彼女のためによいことだ。

むしろ自分に選ばれた紗英は自分とともにあまりよくない運命を伴にすることになったのだと。だとしたら今紗英を救うのは自分のつとめであるはずだ。

デモに向かう道すがらそんなことを佑介は考えていた。

電車の中で着信があった。

紗英から電話だ。今電話に出られるかまずはメールで確認するのが常の彼女がいきなり通話をしてくるのは珍しい。

最初デモに向かっていることをどうごまかそうかとアタマに浮かんだ佑介だったが、他にもないこれは彼女と彼女と僕の未来のために参加するデモなのだと、雷に打たれたみたいに気づいた佑介はメールにデモに向かっていることを書いた。そしてよかったら一緒に参加しないかと。デモに参加したあと、またアホみたいに高いスノッブなレストランで食事をするのだとしても、紗英と一緒にデモに参加したいと、佑介は本気で考えていた。

9月19日、さようなら原発5万人集会の日。

透明な青色が東京の上空をやさしく覆っていた。

彼から脱原発デモに向かっているというメールが届いて、自分がデモに参加する・しないは別として、会うことになるならばと外出できるよう準備をすることにした。

追ってメールが入り、デモの前に催されるという脱原発の集会にまずは参加するとあり、開始の時刻と場所は明治公園だと記されていた。

素早く準備をして、玄関で少し迷ってからいつもはある程度高いヒールのある靴しか履かないのに、歩きやすそうな運動靴を選び、そもそも運動靴にも合うような服装をしていた自分のことが、よくわからないと思う。

本気で自分もあのデモの列に交じるつもりなのか問いかけてみるが、分からなかった。

でも世界はそもそもわからないことだらけだ。

311後はもっとわからなくなってしまうていた。

自分のことも世界のこともますますよくわからないままあの日から気がついたら半年ほど経っている。

家を出たというメールをしたら、まだ時間があるからこのカフェで落ち合おうと場所を指定したメールが返ってきた。

わたしのマンションから行きやすい場所で、なおかつそのあと明治公園にも移動のしやすい立地でもあると気がつく。

わたしも彼も馬鹿高い家賃を支払って都心に棲んでいる。

いつか結婚などをして一緒に棲むことになったら、それでもわたしたちは都心に棲むのだろうか。彼と出会ってからそんな想像を時々していた。

「都心は便利だけれど、子育てをするのなら、もう少し自然の多い場所でのんびり生活したいよね。僕の通勤時間は長くなるけれど家族の安心が一番だから」そんなふうに配偶者が言ってくれたとかで、結婚と同時に長年住み馴れた都心を去っていった女友達のことを思い出す。

わたしは全く高給取りではない。出版社の仕事は不規則で残業が多い分、平均的なOLに比べれば多少多い程度の収入で家賃の高い都心に棲むのはすごく苦しい。でも住み続けた。住所にもブランドがあるという馬鹿馬鹿しい周囲の価値観に染められているのだと思っていた気がする。

しかしよく考えてみれば具体的には一体周囲の誰の価値観なのかよく判らなかつた。あれほど退社後の時間を共にしている山崎先輩にしても、実はどこに棲んでいるのかわたしはよく知らないではないか。

深夜まで残業したあとよくタクシーで帰っていくからには会社のある恵比寿からそれほど遠くないと勝手に思っていたが、都心に棲むわたしにしたって給料日前はタクシーで帰るのはためられることだった。

先輩がいくらわたしより入社が数年早かったところで、お給料がそれほど違うわけでもないのだろう。

しかし彼は違った。彼は都心に棲むために無理をしているわけではない収入を得ている部類に属す。

彼は間違いなくお金持ちの範疇に入るのだろう。

確かに人柄もいいし、見た目もハンサムだといっていいくらいだ。でもわたしが100人に彼のことを紹介すれば80人以上に「お金目当てなのね」と思われても仕方がないと思っている。彼の経営する会社は最近ではそこそこ名前も通っている。

待ち合わせのカフェは、木立に囲まれた山小屋のような外観に、現代的で無機質なデザインの家具や食器を組み合わせ、不思議と落ち着ける雰囲気だった。そして産地にこだわった安全で、さらに美味しいマクロビオティック料理を供することで名が知れていた。外食の続いたあとの身体にやさしいとわたしも彼も休日のランチにもってこいだと考えてこれまで利用してきた店だ。

着席してしばらくすると、彼が現れる。

少し前にあった時となんら変わらない彼の穏やかな表情を見てホッとした。

大丈夫。彼はなにも変わっていない。

店内にはオレンジや黒のハロウィーンにちなんだ小物や飾り付けが目立った。わたしたちが通された席にも、小さなガラス製のジャック・オ・ランタンが置いてある。夜になれば中のキャンドルに火を灯すらしい。メニューにも季節限定のカボチャを使った料理やお菓子が並んでいた。そしてメニューのどのページにも「放射性物質を心配されるお客様の声により当店ではなるべく西日本と外国産の食材を使わせていただいております。産地はできるだけ詳しく記載させていただきましたが、不明な点など遠慮なくお尋ねください」と書かれていることに気が付き、わたしはしばらく目が離せなくなった。



日本で暮らしてみて、ニホンジンは決して鎖国したままみたいな島国精神で生きているわけではないことを知った。閉塞的な部分はどこの国にもある。むしろ日本で僕が会ったニホンジンには、国際感覚の研ぎすまされた、思考の柔軟な人が多かった。それは仕事で出会った人に限らない。

世界中の国々のよい部分は素直に習い、それを器用に自分たちの生活に溶けこませている。食生活は世界のどこより豊かだし、そういう文化を吸収することを通じてあらゆる国への理解を深めようとする姿勢がうかがえた。

僕はNYに赴任していたこともあるが、リベラルな人間が多いといわれる東海岸、またヨーロッパ大陸の母国にしたって、自分たちが世界の中心にいたのだと自分でも知らずのうちに考えているせいで他所に目をやることが足りない人間も多い。

それに比べると多くのニホンジンの感覚は僕から見れば真つ当なことが多かった。

彼らは経済的に発展しても、いつも世界の中心に存在できないことがコンプレックスであるがゆえに、世界をちゃんと見ていた。

ただ、原発の嘘については多くのニホンジンも気がついていなかったし、僕だってそうだ。

しかしそれは国際的なマフィアみたいな連中がおおがかりに、金をかけてじつくりとぼくらを洗脳してきたからだ。

しかしなにより僕は日本が肌にあったということだろう。たった一人の僕という個人がが世界はどうだ、日本はこうだなどと偉そうに断定できるとは思っていない。僕の非常に個人的な好みからすれば日本は暮らしやすく楽しくていい国だということだと思う。人々に親密な好感を持っている。

僕の日本びいきは会社の同僚達からもからかいの的になっているくらいだが、それが彼女に恋心

を持つようになって加速したのか、もともとそうだったのかすでによく分らない。
しかし彼女のことも日本のことも僕の中では渾然一体となって、すでに失った懐かしいもののよう
に心に染み入る。
最初から、失うものだと思っていたからこんなに惹かれたのではないかと疑うくらいに。

初めて彼女を見かけたのは駅ビルの有隣堂で、もう一度会いたいとそこを訪れて、それから彼女
が昼休みにはしょっちゅう現れることを発見した。
洋書のコーナーで本を吟味し、一冊を決めるとそれをレジに運ぶ。そしてそれを携えてどこかの
カフェで昼食を取りながらそれを読む。読んでいる最中である本があっても一週間に2,3度は洋書
のコーナーに立ち寄る。彼女は読書家だった。本屋でよく彼女を待ち伏せるようになった僕は、
そのうち彼女が昼休みを終て、このあたりにある出版社の社屋に帰っていくところもつきとめた
。出版社勤務という仕事柄か、勤務時間に厳密なルールがあるわけではなく、長いときは3時間も
読書を堪能しているかと思えば、退社時刻が深夜に及ぶこともあり、平日の彼女は多くの時間を
会社のある恵比寿近辺で過ごしていた。彼女の勤務先の社屋が自分の勤務先のビルのすぐ近くだ
ったこともあり、僕はこっそりと彼女の日常を観察することができた。僕は次第に彼女に声をか
けるという当初の目的を忘れてひたすら彼女のことは見つめるだけで満足するようになった。彼
女に声をかけようとすればするほど自分のニホンゴの拙さに気が引けて、その拙いニホンゴで自
分の考えていることをどこまで彼女に伝えられるのか不安だった。その一方で僕はニホンゴの習
得に力を入れた。彼女は英語で本を読むくらいだから英語に堪能なはずだ。だから英語で話し
かけるということも可能だったのだが、僕としては彼女とは日本語で会話をしたかった。
しかし僕は一向に彼女に話しかけることはなかった。それだけ勉強したおかげで会社ではニホン
ゴの達人扱いされながら、そうするとますます彼女に話しかけることがためらわれていく。なぜ
なのか自分でもわからなかった。
そしていつまでもいつまでもこんなふうに彼女を見つめる日々が続くのだと思っていた。
あの原発事故が起こるまでは。

9月19日、明治公園には早めに向かう。この集会とデモが成功すればあるいは？
なにか希望を見いだせるのではないか。
だから今日がいい天気で本当に嬉しかった。
頼む神様、今日は大きな余震などは勘弁してくれ！
明治公園の近くまで来ると、もう明らかに人が多いことが分かった。
様々な色の幟やプラカードを持った人間が犇めいている。
僕もNO NUKESと書いたレモンイエローの大きなプラカードを持参していた。
これはこの間ジャック・オ・ランタンにかけたタスキと同じデザインを意識した。
だからプラカードの四隅にはジャック・オ・ランタンのイラストも添えてある。
僕は公園に入ってゆく。

ものすごい数の人だった。まさかこれほどとは。
身体の内側から熱いものが吹き出してくるような気がした。



ワカコがそもそも勤務先の出版社で働きたいと思ったのは、どうしても結婚したいと考えていた人物の著した本を出版している会社だったからだ。

その人物に近づくためにその会社に入ったにすぎない。

彼の本を18歳のときに読んだ。

これを書いた人と結婚することにしよう。この人以外と恋愛したりすることは人生の無駄だし、この人と恋愛するためだけにこれからは生きていこう。

ワカコはそう決心した。

彼の母国語を大学では専門に学んだ。

そして彼の本を出版している会社の試験を受けて入社した。

もちろん学生時代から彼の棲んでる都市にも通い続けた。

彼が利用するという店をネットの噂で拾い集め、彼を待ちぶせしてして過ごしたこともある。なんとか地元の人間から彼の棲家をつきとめられないか聞き込みだつてやった。でも彼を目撃できたためしはないし、彼の名前はその街でも有名だったにも関わらず、彼が本当にここに棲んでいることを断定できるような情報を持っている人間にはついぞおめにかかっている。

さらにせつかく彼の本を出版している会社に入社できたのに、ワカコは希望している海外文学の出版している部署に配属させてもらえないまま入社5年が経とうとしている。

そして彼の、国内で唯一翻訳されているそのデビュー作を担当した編集者はワカコが入社した年に会社を辞めてしまっていて、翻訳者はいくつもペンネームを使っている謎の人間であり、その退社した担当編集者しかそれが誰であるのかを知らないのだという。辞めてしまった編集者ともどうしても連絡がとれないのだった。

配属されてしまった女性向けの料理やらインテリア、ファッションなどの書籍を扱う部署で、いつか海外文学の部署に移ることだけを夢見て耐え忍んできた。

フェイスブックやツイッターでも彼とは繋がり合っている。

しかしそれ以上の距離はなかなか縮まらなかった。

彼はワカコより3歳年上で、大学在学中に書いた第一作が世界的にヒットした。それが日本で翻訳されたものをワカコが18歳のときに読んだ。

カルト的な熱狂で若者に支持を受け、世界中に信者みたいなファンがたくさんいる。世界20カ国以上で彼の本は訳されて今も版を重ね続けている。

しかし彼が売れっ子の作家であることはどうでもよかった。ワカコは彼の精神がまるで自分の生き写しのように感じだのだ。

18歳のとき靈感に打たれたようにもう彼のことしか見えなくなった。そしてワカコのアカウントの「死神」というのは、彼のデビュー作に出てきた登場人物の名前だった。ワカコのつぶやきも、その登場人物の言動をなぞらえてあるのだ。

ワカコは3月、原発事故が起きてすぐに沖縄に飛び、そしてこれはもう彼のもとにいくしかないと思った。そして彼に長い長いメールを書いた。今こそ長年の想いを伝えるときがきたのだと。

ワカコは明治公園に向かう途中に、NO NUKESのタスキをかけてくれた青年のアカウントをじっくり遡っていた。英語がメインに使われていたが、「彼」の母国語—彼女が大学4年間そして「彼」に長いメールを出すあの日まで必死に勉強しつづけたあの言語だ—もかなり頻繁に使われている。しかもおそらくはその言語こそ、そのタスキの青年の母国語でもあるようだった。英語も不自由しないで使えるようだが、母国語と思われる言語を使っているときがやはり一番表現力が豊かになっている。もちろんニホンゴのレベルもかなりのものに思えた。

一瞬このアカウントが「彼」なのではないかとワカコは甘い期待をするが、残念ながら「彼」がニホンゴを使えるという噂はワカコの長いおっかけ生活で一度たりとも聞いたことはないし、そもそも今現在、「彼」がこの放射能に蝕まれたトーキョーに滞在しているとも思えなかった。彼は現在もあの街のどこかで新作の執筆を続けているのだろう。

しかしとにもかくにも、この青年は、「彼」と同じ言語を母国語とするらしい。

それだけで親しみを感じた。

そして彼もまた今明治公園に向かっているらしい。

ワカコは明治公園に近づく。

すごい人だったが、マスクをつけている者は少ない。脱原発の意志を持って集った者たちであるはずなのに、放射能には無頓着であるのがワカコには解せないと思う。

もう一度ツイッターで例の青年のアカウントをチェックする。

彼の方も明治公園に到着したという眩きをしていた。しかもつい2分前だ。

さらにそれには公園の群衆を撮影した写真が添えられていて、ワカコはその写真を凝視した。
一体これは公園のどの辺りで撮影したものだろうかと。



西日本の野菜だけを使ったという、さらに有機栽培であるじゃがいもやカボチャなどの温野菜とレタスなどの生野菜を組み合わせたボリュームのあるサラダ（ドレッシングとしてかかっているジュレの材料まで細かく明記してある）と、しっかり酸味のある真っ黒なライ麦パン（やはり原材料明記。ジャムやオリーブオイルなどが数種類ついてくる。それらの産地も明記）、それに有機珈琲（水も安全なものを使用と明記）を頼んで、それらがテーブルに並ぶと、それはいつもとすっかり同じの日曜日のランチの風景だった。

これから彼とデモにいくことを除けば。

わたしの制作している書籍や雑誌に使う写真のヒトコマみたいなそのテーブルの、しゃれたデザインの食器や、色彩と盛り付けの美しい料理、こういう風景をわたしは毎回毎回切り取って紙面に貼りつけて、さらに自分でもこういう世界だけに囲まれるように生きてきた。

実家で18歳までを過ごしたあの世界にあったもの、それは里芋の煮っ転がしだとか、ナスしか入っていない黒っぽい味噌汁だとか、練炭を使った掘り炬燵や、寒さで真っ赤な顔をしている級友たち、彼女たちが着ていた羽織半纏、巨大なツララと5月まで消え残る豪雪。

そんな日本昔ばなしのような光景は、しかし実際にわたしが確かに18歳までに囲まれていた世界で、でもあの18歳の春、こちら側にわたしはワープした。

使い終わったあとの練炭が雪の庭に転がっているのを、あれはお笑い芸人が田舎に滞在するというテレビ番組がたまたまついていて一緒に見ていた。彼があのでできた蜂の巣みたいなのはなんだろうと言った。わたしの幼い頃の日常に当たり前にあったものを彼が知らないことが衝撃で、それが恐怖で、「さあ？」という返事をすることによってわたしも彼の側にいるつもりフリをした。

でもわたしは蜂の巣みたいな灰のカタマリ、それがなんなのかずっと、一生知っている側の人間だということに。

彼が田舎者をバカにしたりするところを見たことはない。ただ、それが自分の常にそばにいるパートナーであった場合、彼はどんな反応を見せるのか。試すのも怖かった。

彼がわたしの出身地を知らないわけではないが、でもわたしはもう上京して20年が経とうとしている。生まれて故郷で過ごした時間を東京ですでに追い越してしまった女だ。

食事をしながら、デモについて、あの事故について、この東京に降り積もったという物質について話をするわけでもなく、わたしと彼はまったくいつものような会話をした。彼が仕事でよく行くNYで最近話題になっていることや、わたしが仕事の上で聞きかじった最新の東京のグルメ情報など。

ミシュランの格付けがもうすぐ発表されるので秋はわたしのような仕事をしている者にとっても一番刺激の多い季節だった。

東京が冬支度を始め、イルミネーションのまたたく街は美酒と美食を求める人々で賑わう。彼らがわたしの編集したグルメ本を参考に街を右往左往しているかと思うと、わたしはちょっとした全能感のようなものを感じることができた。

ただし、それを一生ずっと続けていくのかということについて最近考えていた。そんなときにこの人が現れたんだって、と目の前の男性のほうをうかがう。

「野菜がどれも濃い色をして、味もぼやけてないね。こんな野菜を毎日食べたら元気が出るよね」

彼が残っていたサラダのじゃがいもをまたひと口フォークに刺して微笑んだ。

「しかも安全なんだし」

彼は続ける。わたしは返事ができない。

同意すれば、わたしが日々作っているグルメ記事に載せている店の料理が危険だと言うようなものだから？ 安全って、例えば農薬を使用していないとかそういう意味でいつも使っているそのことを指してるのよ。

彼が当てこすりでわたしに向かって安全について言っているのではないと判っているつもりだが、不安が大きくなる。

「そろそろ行こうか」

彼が腕時計に目をやる。

そしてわたしたちは明治公園へ向かった。

途中で目に飛び込んできたものでわたしは青ざめる。

あれは。

だんだん人が増え始めた道の少し前方を歩く、あの大きな本格的すぎるマスクをした華奢な体型の女性は、見間違えようもない。ワカコだった。



目の前で、コーヒーを飲みながら自分の話に耳を傾ける女性、佑介は一度黙って、彼女の故郷の街を一人で訪ねたことがある。

震災の少し前、今年の冬のことだ。

もう随分遠い昔のように感じるが、あれは楽しい出来事だったと佑介は振り返る。

付き合い始めてから、幾度か彼女に故郷の町を案内してほしいと持ちかけた。

たいてい話をはぐらかされた。

一なにもない田舎なのよ、退屈するだけよ。

彼女はさらっとそれだけ言って、たいてい話題を変えてしまった。

彼女がなにか隠していると思ったわけでもないし、例えば結婚相手として実家に何か問題があるのではと疑ったわけでもない。

純粋に彼女の生まれ育った町なら見てみたいと思ってやったことだった。

羽田から飛行機に乗ってしまえば、飛行時間は40分と少々で、あっけなく到着したそこに、彼女のほうはもう数年帰ってないと聞いていた。

佑介は東京生まれの東京育ちで、いわゆる田舎での生活は皆無だった。

それまで東京以外の地方に関心を持ったことはなかった。軽んじていたつもりはなかったが、自分の視界に入ることもなかったために関心を払うこともなかった。

存在することは知っているけれど、特に気に留めることもなく生きてきた。

しかし彼女と知り合って、彼女のことを知っていくうちに、彼女が18歳まで暮らしたという、その雪深いという町に興味を覚えた。

それは今年の1月のことだった。

テレビニュースが日本海側が大雪だと伝えていて、彼女はわたしの故郷もあんな感じなのよ、って指したテレビ画面は、すっぽり雪に埋もれた山奥といった様相だった。

君はわりと山間部に住んでたんだね、と佑介が言うと、一瞬きょとんとした顔をされて、いいえ、平野部でもあのくらいは積もるからとそっけない返事がきた。

まさか。佑介には信じられなかった。あんなに雪が積もって、人々はどうやって生活するというのだろう。積雪はゆうに1メートルを越えている。

彼女は東京の一流の女子大を出ている。きっとそれなりに優秀な高校を卒業しているんだろう。その優秀な高校に通う優秀な、例えば18歳だった彼女たちのような生徒らは、まさかあんな雪をかきわけて学校へ通っているというのか。

佑介にはまったく想像の及ばない世界に思えた。

しかし目の前のこの女性がその世界に棲んでいたと知って、なんだか落ち着かない興奮にとらわれた。

そして次の日思い立ち、いくつかの仕事をキャンセルしてまで羽田に向かった。大雪のニュースを見たばかりで飛行機が欠航するかと心配していたが、飛行機は無事飛んで、青白く凍てついた平野に着陸した。

寒々とした静脈の色をした世界に降り立った時、佑介はここが同じ日本列島なのだと俄に信じがたいと思った。

そして彼は丸一日、その街を歩き回った。

雪道をいつもの革靴ではとても歩き回れそうになくて、駅の近くのスーパーに山積みで売っていた、膝まですっぽり覆う長靴に履きかえた。

長靴の膝のあたりにくるカバー部分の巾着の口のようにになっている紐をぎゅっとしぼって長靴に雪が入らないようにして歩く。こんな体験は佑介には正真正銘生まれて初めてのことだった。

住所を知っていたので彼女の実家の近くにも行って眺めた。その地方によくある、真っ黒で重そうな瓦屋根の頑健な一軒家で、他の家々と等しく雪に覆われていた。まさか呼び鈴を押したりする勇氣はなくて、しばらく眺めて満足してそこを立ち去った。

彼女の卒業した高校も探して立ち寄ってみた。

校舎は最近建てなおされたばかりなのか、妙にコンテンポラリーな建築で、それが雪の中にそびえたっている風景ごと前衛アートの作品として存在しているみたいだった。しかしこの建物の中で、18歳たちが東京の高校生と同じ教科書を使って勉強をして同じ大学を受験して、次の春には同じキャンパスに立っていたりすることを思った。かつての彼女のように。

そして暗くなると、日本海の幸と地酒を出す、この辺りの常連で賑わう庶民的な居酒屋で心地よく酔って、駅前の簡素なビジネスホテルに一泊して次の日にまた飛行機に乗って帰ってきた。

それだけのこと。

しかし彼女には一言も言っていない。

このデモが終わったら、あるいは彼女にその1月の話をしてみようかと佑介は考えている。いや

その話をするだけでなく、もっと大切な話をしなくてはならないはずだ。

なにから話をすればいいのだろう。

今、なにをすべきなんだろう。

僕と彼女にとって何が大切なんだろう。

この集会とデモが終わったら分かるのではないか。そんな期待がある。

佑介は隣を歩く恋人のほうを見た。

最近仕事で忙しいと聞いていたが、それにしても顔色が悪い。痩せただけでなく、やつれた感じがする。そして、これまで幾度か鼻血を出すところを目撃しているし、今までになかったような体調不良を訴えている。

それはもしかして全部、放射能のせいだったのか。

そう気がついて佑介は血の気がひく思いだった。

まさか東京で？

あの事故が起きて、首都圏でも子どもや妊婦が避難したりしているらしいという噂を耳に挟むようになって、まさか自分たち大人が放射能で健康を害するなんて考えてもみなかった。

そして彼女は、職場にいつもマスクをしている後輩がいると話していた。

放射能とやらは、この首都までを脅かしているのか？

ビジネスで付き合うアメリカ人は、クールなところがあって、原発事故の話はしても、放射能の健康被害について熱心に話題にするような相手はいなかった。

ただ、時々、スーツを作っている店のマーティンからだけはメールで心配の言葉が贈られてきていた。

一ユースケ、健康でやってるか？東京にも放射能が届いているらしいではないか、君の大切なカノジョの健康は安全かと。

震災後なにかと忙しく、NYへいってもマーティンの店に足を運んでいなかった。

マーティンが客のことを気遣ってプライベートに関して心配のメールをくれるのはこれが初めてではなかった。しかしマーティンのメールから滲みでている、いつもとは違う緊迫感について、佑介は見て見ぬふりをしてきたのではなかったか。

明治公園にはすでに群集と呼べるほどの人が集まっていた。



ワカコが18歳で「恋に落ちた」と思っている「彼」、その作家には謎も多かった。

爆発的に売れた処女作の印税で放蕩的な暮らしをしてヒンシュクを買っているというゴシップ記事もあったし、印税はほとんど寄付にまわして本人は地味な生活をしながらストイックに小説を書いているという説もあった。在学中だった大学は退学したという説もあれば、卒業は一応したらしいという説、あらゆることに関して極端な諸説が入り乱れすぎて、噂が出れば出るほど何が本当なのかぼやけていく。それは誰かが攪乱するために故意にデマを流しているような意図をワカコは感じていた。

ワカコはその作家、「彼」に関する情報は世界中の言語に渡って調べ尽くしている自負があった。

世界中の彼のファンのネットワークを利用してあらゆる噂を読み漁っていた。そのために大学では誰よりも熱心に語学を勉強した。

彼がデビューした頃はインターネットは随分身近なものになっていて、もちろんワカコも最大限それを利用して世界中の最新情報を集めた。

10年前から今まで、ネット上で彼の名前を拾えば、その記事についてはほとんど精査してきた。さらにワカコは、彼が棲んでいるといわれている街にも、休みがとれてお金が貯まる度に通ってきた。

その結果、彼に実態などないのではないかとワカコは疑ったこともある。

彼の頭脳のようなものだけが存在して、それが小説を書き続けているが、彼の肉体としての実態は、実在などしないのではないかと。

もしくは彼に関する情報は全て彼のイメージだけをなぞったもので、その小説を書いているのは、名前も顔も別の誰かであり、彼の存在はそもそも影武者的に捏造されたに過ぎないのでは？

ワカコにとって、「彼」の実態というのはそもそも書かれた作品そのものである。

だから彼の実生活やゴシップを追うことはそもそも彼女の意に反することでもあった。

それでもワカコはどうしてもやめられなかった。「彼」にまつわることに関わっていないと、不安でたまらない。

デビューした年、正式な肖像写真が2枚と、プライベートのスナップショットが数枚流出したが、その年以降、写真や映像が出まわるとはほとんどなくなった。流出したプライベートショットは知っている限り全て保存しているつもりのワカコだったが、その一枚一枚もかなり不鮮明だし、どれもこれも本来は別の人間を撮影したものではないかという漠然とした疑惑も持っている。もしその道のプロがそれらの写真を分析したら全部別の人間の写真だと判明するのかもしれない。

そのくらい彼についての正確な情報は少ない。

それなのに世界中に存在する膨大なファンとファンでもないただの噂好きも含めて、日夜、根拠の曖昧な噂話を増殖させている。

ワカコは彼の本質であると信じている作品とはまた別のものとして「彼」にまつわる情報という、もうひとつの物語を調べることを楽しんでいることも自覚していた。

デビュー作の3年後に第2作を、その2年後に第3作を発表し、それから5年は沈黙を守っていた。そろそろ彼が新作を出すのはいつかという期待や予想も最近は聞かれなくなってきた。「彼」の死亡説まで存在する。

デビュー作に比べて格段に難解となった2作目3作目は日本では翻訳されていない。ワカコはもちろん彼の母国語でそれを繰り返し読んでいる。デビュー作はエンターテインメント性も高く映画化もされていたが、2作目3作目は晦渋な表現が多くて、それで彼の評判は上がりもしたし、またある層のファンは離れていった。

デビュー作は「彼」がそれを執筆したという、ワカコも通い詰めたその街が導入部分の舞台となっていると言われていて、ワカコはその街に行くたびにどの部分がどの場所を舞台として書かれたものであるのかを夢想して過ごすのが常だった。

そして、いつも、夕暮れ時に、このまま目をつむってここに佇んでいれば、いつか「彼」が私を迎えにきてくれるのではないかと、そんな願望をずっとワカコは胸にこの10年を生きてきた。その願望に守られていれば、あらゆる現実から目を逸らしていることができた。

「彼」はもうわたしのことを知ってくれている。だってわたしはもう10年も「彼」のことだけを考えて生きている。「彼」だって私のことを知らないはずがないという気持ち。

ただの恋よりも、もっと強い予感みたいなもの。

ワカコは（金髪碧眼の美青年であるらしい）ジャック・オ・ランタンにタスキをかけてくれた青年のアカウントのアップした明治公園の写真を見て、見当をつけた場所に移動して辺りをウロウロしていた。

先程から外国人の参加者も時々見かけるが、どうも、その青年だと思われるような人物はみかけていない。

とはいえワカコはその青年を見たことなどなくて、金髪碧眼らしいというツイートは確かにあっ

たものの、その青年を見かけても本人だと分かると思っているわけでもない。本気で探し出せるとは思っていないが、探せ出せなくても探してしまう癖は、「彼」を追いかけているうちに身につけてしまった習性なのかもしれない。

そしてその青年を探しだして何をしたいわけでもない。

「探す」ということがワカコの人生の目的みたいなものになっているのかもしれない。

見つかるか否かは問題ではない。ただ探しているのだ。

しかしワカコはあの日沖縄で長期滞在していたドミトリーの部屋から書いた「彼」に宛てたメールのことを思い出して複雑な気分になる。

返事はこなかった。確かに彼の公式サイトメールアドレスに宛てて出したそのメールには、返事はこなかったのだ。

そしてワカコは東京へ帰った。

ワカコは辺りの人間を注意深く観察しながら群集をかきわけて進んでいく。

もちろんなかなかそれらしき人物はみかけなかった。

当然だ、こんなに人間がいるんだもの。ワカコは自分自身に言い聞かせるように呟き、しかし、本当によく集まったものだと感慨深くその群衆を眺める。

ワカコが最初に参加した3月の末の銀座のデモに集まったのは1000人程度だっただろうか。

今日の明治公園には数万人と思われる人間が集まっている。

ワカコは群衆に囲まれたその場所で足を止めて目を閉じた。

「彼」が迎えにきてくれるに違いないと夢想しているときのような、心地の良い空白がアタマの中に訪れた。

すると、

「あの一」

と、正面に立ち自分に声をかけていると思われる者がいて、ワカコは目を開けた。

そこには、金髪碧眼の青年が立っていた。

9月19日、明治公園に集まった群衆の熱気を感じながら、集会が始まるまで僕は感慨深く辺りをうろついた。

震災、そして原発事故が起きてから、本当に様々なことがあり、心休まることはなかった。

311、あの日は金曜日で、第一回目の大きな揺れがおさまって僕はすぐに彼女の会社の社屋の様子を見に走った。

僕の勤務する会社では震災時、安全確保のために不用意に動かない注意とともに、家族が心配な者はすぐに自宅に帰宅してもよいと許可がおりた。

僕は彼女の安否を確かめることだけが頭に浮かんだ。

彼女の勤務する出版社の社屋は相当な年代物で、いつか巨大地震がきたら危ないだろうと常々感じていた。オフィスで午後2時46分を迎えていた僕は、揺れのただ中にいても彼女の勤務先の、地震が起きなくても崩れ落ちそうな社屋のことをずっと考えていた。僕のいた頑健なオフィスビルにしたって、このまま崩れ落ちるのではないかという激しい揺れだ。あの社屋ではひとたまりもないのではないか。もしかすると今頃彼女の会社はペチャンコに潰れているのではないか。オフィスビルを飛び出すと、また激しい揺れがきた。最初の揺れから10分ほど断続的な揺れが襲った。少し落ち着いたと外に出たのだが、まだこんな強い揺れが来るなんて。東京に赴任してから地震にはそこそこ慣れたつもりでいた。しかし今回のものは、今までとは全く別の次元のものに思える。

日本列島ごと木っ端微塵になってしまうのではないか。そのときツイッターのタイムライン上で、最初の強震が都内でも震度5強との情報を見ていた。震源地は東北らしく、津波警報についてのツイートがやたら多いのが不気味だった。

オフィスから飛び出した街は騒然としていた。

歩行者たちが揺れるたびに恐怖のあまり叫びだす。逃げ惑う。車も急停車したりしていて危険な状態だった。

本来なら週末の休みへとつながってゆく穏やかな午後だったはずの街は騒然としたものになっていた。僕はその中を走りに走った。

渋滞の起きている道路もあり、クラクションが空気をつんざいて不吉に響いた。

果たして彼女の社屋は潰れてはいなかった。

鳶の絡まるレンガ風の外壁に包まれた、西洋館じみた社屋（それは文学好きな彼女の雰囲気にとってもマッチしていて僕は気に入っていた）の前に、社員がゾロゾロと出てきていた。

普段は車寄せになっている部分に彼女が時々行動を共にしている女性社員の顔が見えた。一度彼女と一緒にいるとき、「紗英先輩」と呼んでいたのが聞こえて、彼女とはまるでタイプは違うが、とても美しい人だったのでよく覚えていた。

しばらくして、彼女もまた社屋の中から出てきたのを見た時、僕は深く安堵した。彼女は他の社

員の誰とも交わらず、ずっとスマートフォンの画面を睨み、操作を続けていた。ネットから災害の情報を得ているのだろう。僕は彼女が無事なのを見届けてその日はひとまずまたオフィスに帰ったのだった。

そんな311のシーンがフラッシュバックして、僕は喉が締め付けられるような気がする。

ニホンジンだけでなく、たまたまこの2011年3月11日にこの列島に居合わせた様々な人種や国籍の人間も、等しくこの震災に傷ついたので。

そして、今日、9月19日、さようなら原発5万人集会の群衆の中で、彼女を見つけてしまった。大きなマスクですっぱり顔の半分以上を覆っている。小顔なので本当に顔が全部マスクになったみたいだ。普段からよくそんなファッションなのだが、こざっぱりとした木綿の白いシャツとベージュのチノパンツ姿で、飾り気のない黒のナイロンのナップザックを背負っている。

そしてあの艶のある真っ直ぐな黒い長い髪は見間違いようがなかった。

あのとろけるやわらかい絹のような髪に最初惹かれて、有隣堂で彼女から目が離せなくなった。

あのときと同じだ。僕はふらふらと彼女に吸い寄せられていった。

先日彼女のアパートから出てきた、あのジャック・オ・ランタンにマスクを貼りつけた大柄な男性は今日は一緒ではないようだ。

気がつく僕は彼女に声をかけていた。

17話目、佑介

「あの子なの。鳥島ワカコ。会社にいつもマスクをしてくる」

紗英が指さした先、道を隔てた反対側の歩道に、ギョツとするような本格的なマスクで顔を覆った女性が歩いている。

普通に風邪をひいたときにポーズでするようなマスクではなくて、明らかに防塵を目的とした、「絶対に口や鼻から悪いものを吸い込まないように」綿密な設計のなされた機能を兼ね備えているようなやつだ。確かにあれを会社で毎日している人間がいれば目立つし、周りの者は気にはなるだろう。佑介も目を瞠った。

しかも彼女は、マスクをしていてすらとても綺麗な部類の女の子だとすぐに分かる、あんな女性ならなおさらだ、と佑介は思う。

どんなストレートパーマをかけてもなかなかああはならないだろう、おそらく天然なのだろうまっすぐな黒髪が特に印象的だった。

身につけている洋服はシンプルだが、どれも体型に自然にフィットしてるし、素材が上質なのでとても清潔感があつた。履いている革靴もかなり上等なものだ、と素早く佑介はその女性の服装を観察する。

佑介の恋人、紗英もどちらかというとな服装の好みはプレーンなほうだが、もう少しフェミニンな服を着る。

マスクの彼女の身につけているものは、ほとんど男物といっても通用しそうな素っ気のないものばかりだが、もしかするとあそこまで伸ばした長い髪は、あのくらい上品でシンプルな服装をしていなければ悪趣味に見えてしまうのかもしれない、だから彼女はいつもおそらくああいう服装をしているはずだ、と佑介は考える。

「あの子は君と同じ編集室にいるの？」

「そう。でも、本当は海外文学の部署を希望してうちの会社に入っただけなの。チャンスがあればそっちに移りたいみたいで、うちの編集室の出す出版物にあまり思い入れがないみたい。仕事はきっちりこなすけど、言われた以上のことはやらないっていうか。空いてる時間は多分、希望の部署に移ったらやりたいことのために使ってるはず。ヤル気がないわけじゃないのよ。やりたいことが今はやれてないだけで。能力はすごく高いと思う」

紗英の口調にマスクの子に対する非難めいた調子は感じられず、あくまで淡々としていた。本心からマスクをしているということ以外に、特にあの子に違和感や敵意のようなものは持っていないようだと佑介は気がつく。

紗英は、女性向けの書籍や雑誌の編集という仕事にそれなりにプライドを持っていて、例えば同業者でもライバルとみなした女性には競争心をむき出しにするようなところもある。しかしマスクの子が自分のやりたい方面とは別の分野を志しているのだから、紗英はそもそも張り合うという気はないのだろう。それどころか普段はおそらく、希望の仕事ができないこの後輩にそれなりに優しい気持ちを持っていたのではないかと思えた。

紗英がしょっちゅう行動を共にしている「山崎先輩」という人がいるが、この人に関しては尊敬

とライバル心の混じった複雑な感情を持っているらしく、佑介との会話の中にもよく登場した。だがマスクの女の子についてはこれまで佑介は聞いたことがなかった。

「ワカコも、デモに参加するのね」

紗英は、ワカコのいる側の歩道に横断歩道を渡り、公園の中に入っていくにしたがい、ワカコのあとを追うようにして歩き始める。佑介は黙って彼女についていく形になる。でも紗英はワカコに追いつこうとするわけでもなく、一定の距離を保ったままだ。

ワカコといえば、時々ポケットからスマートフォンを出してそれを覗き込むことに熱心でこちらがあとから歩いていることには気がついていないようだ。

佑介は紗英とワカコを交互に観察しながら、自分がデモに参加することを決めたのに、なんだか自分が紗英に連れ回されているようだと思える。

そう。紗英は自分にとって、初めて自分の行き先を自分ではない人に決定させてもよいと思えた女性なんだと佑介は思い出す。

食事をする店も紗英が探して自分で予約を入れる。去年の夏の旅行も、ほとんど紗英が計画をたてて手配したくらいだ。

公園の中はものすごい人で溢れかえろうとしていた。

「原発は子どもの命を奪う凶器」

「原発のない安心社会を」

というようなプラカードやノボリを皆持っているが、特に熱心な活動家というタイプの人は見かけない、と佑介は気がつく。

ごく普通の人々が、本来なら穏やかに過ごしていた日曜日の時間を使って、この明治公園に集まってきたのだ。



こんな時代になっちゃって、今まで通りに娯楽を楽しめなくなった自分がある。

でもこんな時代だからこそ楽しめる、くつろぎと娯楽を目的とした本もあったほうがよいなと思ったので自分で作りながら楽しむことにしました。

作るといってもいつもブログ代わりにしているこの「雨と霧と雪」に新しいページとして加えていきます。

当面のテーマは旅になる予定ですが、リラックスして読めるエッセ

イと写真で楽しめる誌面を目指します。

電子書籍の特性を生かした、実際に役立つ情報へのリンクなども盛り込む実験的な書籍を工夫して作っていったらいいなと思っています。

ただの日記めいたもの。12月16日。



松嶋菜々子と堤真一の共演した『やまとなでしこ』というテレビドラマが好きだった。二人とも好きな女優/俳優だったし、東幹久や、西村雅彦など、脇役もいい味を出していた。

ところで松嶋菜々子が演じるヒロインは富山県出身という設定なのもわたしが気になる場所だった。

富山の寒村で貧しく育ったヒロインは貧乏が嫌で、上京して見事スチュワーデスという職業に就く。そしてお金持ちと結婚することだけが夢で合コンに明け暮れる話・・・と文章にすると、ほんとコメディ以外の何者

でもないんだけど、わりと自分の現実とリンクする部分もあって、見ていた当時というより、時間がたつにつれてよく思い出して考えこんだりする。

わたし自身、スチュワーデスになったわけでも目指していたわけでもないし、そんな玉の輿を狙えるようなヒロインのような美貌でもないけれど、田舎から上京して行って、なんとかそこで成功したい、っていう気持ちは、レベルが違って共通するものを感じるし、自分を不幸たらしめていた原因（田舎の出身であること、貧乏であったこと）さえ取り除けば、絶対的な幸福を手に入れることができるんじゃないのかという幻想を、地方出身者ならば一度は抱いたことがあるのではないかと深く共感する。

そもそも彼女の設定は、地方出身者でないと成り立たない。彼女は、見栄えのいいすごく高級そうなマンションの横の、すごい家賃の安いボロアパートに住み家賃をケチってまでいい洋服を買い、それを着て合コンに繰り出す。そして今のとこの本命の相手とデートした帰り車で送ってもらい、その高級マンションの前で下ろしてもらって、部屋にはあげられないのと、彼氏が消えてからボロアパートのほうに帰る。

これが東京の山の手育ちのお嬢様だったら、独身時代は当然のように高級住宅街にある一軒家の実家に住んでいるので、そんな嘘をつく必要はない。いくらボロアパートでも東京にある物件に家賃や光熱費をおさめているヒロイン。しかし山の手のお嬢様ならば実家暮らしなので家賃も光熱費も食費も親まかせで、お給料を衣服・美容費や交際費だけに使えるのは最初から当然のことだ。

上京した地方出身者が社会人になって愕然とするのは、同じ条件で就職して同じだけのお給料をもらっていても、もともと東京育ちの子とは、最初からものすごい経済格差があるという事実にあると思う。

ドラマの例では極端に、合コンに着ていく勝負服のため！！にボロアパートに棲んでいるというふうを描かれているが、そもそも合コンの勝負服どころか、普通に生きていくためだけに地方出身の女の子は初任給をかつかつに切り詰めないと東京なんかでは生きていけない。

松嶋菜々子扮したヒロインはCAなんだから普通のOLなんかより格段にお給料がよいからボロアパ

ートに住めば高級な洋服をたくさん買えたが、一般的な地方出身の女子は、ボロアパートに棲んでもやっと食べていけるというのがデフォルトなのです。

まあでも、地方出身のわたしは東京育ちのお嬢様にだから恨みつらみ・悔しさいっぱい生きてきた・・・とかいうわけでもなくて、まあ自分の境遇はある年齢からオモシロおかしく糧にってしまうようになったし、その格差に気づいたので、また故郷に戻って実家ぐらしのパラサイトとして稼いだぶんは全部旅行に回す生き方を選択してきた独身時代でもあったのです。

早々に自分一人だけでの東京生活に挫折したわたしなので、松嶋菜々子扮するヒロイン、桜子さんに共感を覚えるといったら図々しいのだけど、でも、やっぱり分かる。

玉の輿にのって・・・というのもやはり地方出身ならではなのではないかしら。

東京に実家があれば焦る必要はない。結婚しないでずーっと実家にいても、生活は変わらない。仕事をやめてプーになっても、転職活動しながら家賃も払わずにしばらく生きていける（そもそも就職などしなくても生きていけるお嬢様階級もいるのかもしれない）。

しかし地方出身者にとっては切実なんだ。働き続けることが東京で暮らし続ける条件。どんなにつらくてもそうやすやすと仕事はやめられない。明日からの家賃はどうする？食費は？光熱費は？

仕事に行き詰ったら、もう、手っ取り早く、玉の輿にでものってしまえば、東京で安住できるだろう。

そういった意味で、そのガツガツした、なんとしてでも玉の輿という気持ちにすごく共感してしまう。

玉の輿に共感というより、東京を離れたくないけど、仕事に疲れたよ、でも東京に実家のある子みたいになんて自分探しのモラトリアムとか悠長なことなんて言えない、一発大逆転は玉の輿しかないわよ！みたいな・・・。

（あくまでわたしの感覚なので地方出身で東京で頑張ってこられてそんなこと考えたこともないわ！ってう方失礼しました。笑）

しかしひがみっぽく書いたわけではなくて、

わたしは地方出身者の上京ほどドラマティックなことはないとおもっているの、地方出身にうまれてよかったと思っています。漱石の『三四郎』の、三四郎みたいな体験ができるのは、当然、生まれた時から東京な人ではなくて、地方出身で上京する者の特権です。生まれて育った土地から、しかも田舎から都会へ移住というドラマティックな体験できるというのは地方出身者に限られます。

『やまとなでしこ』にまつわる話はまた他にもしたいものがあるのでそのうち書きます。。。つづく、予定。



初めての海外旅行の、行きの飛行機の中で、すでにわたしは海外旅行が心底気に入っていた。

まだどこにも外国に降り立ってもいないのに、海外旅行というものはこういうものかとしみじみそれを味わっていた。開放感と同時にやってきた寂寥感。寂しいけれど、でもちゃんとまた帰る場所はある、たった一週間ほどのかりそめの孤独。

こういう気分がお手軽に手に入るのなら、も

うそれで目的を達成した気分だった。

欲しいのは本物の孤独ではなくて、あくまで孤独な「気分」。

孤独が欲しいという目的で旅行を計画したわけではないけれど、でも、

飛行機の中で感じたのは、紛れもない寂しさであって、

これがわたしの欲しかったものなんだと、しみじみそれを慈しみながら初めての海外旅行を楽しんだ。

初めての海外への飛行機の中ですっかり魅了されたそのお手軽に手に入る寂寥を、毎度味わいに、再び旅行に出るという具合だ。

そういうインスタントに味わえる気分のために旅をするのはどこかミーハーで、軽薄なんだと自覚もあって、

でも所詮、旅は娯楽の一種だから、それでいいのだと開きなおることもできた。

村上春樹が『辺境・近境』という旅行記のあとがきで、「今は海外旅行に行くというのはそんなに特別なことではありません。小田実が『なんでも見てやろう』を書いた時代とは違うんです。

（中略）過度の思い入れとか啓蒙とか気負いとかを排して、いわば「いくぶん非日常的な日常」として旅行を捉えるところから今の時代の旅行記は始まらざるを得ないんじゃないかな。（中略）（今の時代の旅行記が）「まなじりを決して」という感じだと、読んでいるほうとしてもいささかしんどいですよ」

と書いているように、旅行はもう冒険でも探検でもない。

地球が狭くなって、未踏の土地はなくなり、本物の冒険ができなくなった時代の旅人は、だったら不幸なのかといえば、

わたしのようなタイプの旅行者には、むしろ好都合なのだろう。

インスタントな寂寞に身を任せて、
少女小説めいた妄想にひたったりするのに、
常に生命の危険がつきまといは不都合だ。

妄想にひたっているうちに追い剥ぎに身ぐるみ剥がれたり、
スリや詐欺にあっているのは、
命がいくつあっても足りない。

ある程度の安全が保証されていて初めて、
寂寞に身を任せて、その気分ひたることを楽しめるのだろう。
外国を訪れながらも、
わたしがやっていることのメインは脳内での妄想に過ぎないのだから、
それは究極、外国に行く必要はないのかといえばやはりそんなことはなくて、
恋愛だって結局は個人の脳内の妄想の産物だけど、
実際に恋する生身の人間の相手は必要なように、
実際の海外への渡航も必要なのだった。

だからわたしは、その初めての海外旅行の飛行機の中から、
不毛に凍てつくシベリアの大地、
マイナスの厳しい外気も、ガラスも一枚隔てたすぐそばに眺めながら、
完全にととのった空調の穏やかな機内で守られて、
存分に空想だけを楽しめることに気づいて、
そのことにしめしめ・・・と喜んだのだと思う。

あたたかで平和で静かな部屋で本を読んで安全な妄想に浸るのと、
たいして違いのない、安全な旅もどきの側で、
やはりぬくぬくと空想だけを味わえることに気づいて、
そのことがわたしの旅好きを加速させたはずだ。
どこか遠い場所に孤独を味わいにいきたい人間が、
部屋の中と同様にぬくぬくした安心を求めているという、
背反した願望を同時に叶えることができるレジャー、
つまりそれが現代の旅行なのかもしれない。

しかしながら一番最初のその旅行は添乗員付きのツアーだったので、
そんな守られているという安心感があつたはずで、
そのあと個人でいった旅行はもっと不安だったのではないかとも思いだしてみるが、

やはりわたしはそれほど危険地帯を旅していないこともあり、
基本的には、そのぬくぬくと味わえる孤独感を求める旅をしていたと思う。

（しかしそれもこれも平和な時代の産物だ。今、こんなに実際の生活で心をすり減らして、
時には信じられない本物の孤独を味わう時代になってみて、
旅に出たいという願望は驚くほど減ってしまった。

しかしそれはそれでおいておいて、
ならば旅にまつわる思い出などを文章にするのも良いだろうと、思ったわけです・・・)



久し振りに日記めいた文章をここに貼っておく。

311後の日常が、だんだんSFめいて感じられてしまう。

現実感が失われて呆然として、そのまま足元をすくわれそうだ。

311前の日常の感覚のままでいても怖いし、完全に剥がれてしまうとどこかへ吹き飛ばされそうだし、結局、ふらふらとどこかをまだ311前に繋ぎ止めたまま、しかしあやうく風に吹かれながら、体験したことのない毎日をどうにか「生き延びている」。

さて、311前の半年前くらいに書いたらしき日記というか雑感が残っているのを発見したので、多少編集して以下に貼り付ける。

※※※※※※※

『1Q84』のBOOK2に出てくるホテル・オークラのロビーのシーンがひどく印象的で、最近ことあるごとにその世界に没入している。村上春樹の小説を長い間読んできたがここまで印象に残ったシーンはない。なぜこんなに激しくわたしをゆさぶるのか。

亡霊が飛び交う、苔みtainな絨毯の敷かれたロビー。

わたしは高校時代に村上春樹の小説に取り憑かれて上京したいと願うようになり実際にそうした。

トーキョーの外資系じゃない一流ホテルにはトーキョーらしさが詰まっている。

『1Q84』の本題とはまた別にあのシーンで村上春樹が描きたかったのはそのことではないのかなどと考えてしまう。

トーキョーの深奥部に眠るものたちは、束の間そのようなホテルに姿を現すことがある。

千代田区に友人が棲んでいて、彼女のうちに遊びにいった子どもを連れて散歩しているときに、たまに紀尾井町のニューオータニで休憩した。

ニューオータニのロビーには、重そうなくらいずっとしり敷章を連ねている燕尾服のかなり高齢の老人と、着物か、皇室の女性がよく着るタイプのワンピースを着たやはり老女が集っていたりした。一体どういう素性の人たちなのか不思議に思いつつ、しかしこういう「種族」が存在するのだと、わたしは息をのんで眺めた。

また、東京は坂が多くて、都心の真ん中で登山をするような羽目に陥ることがある。やはりその千代田区の友人宅の近くで一緒に子どもを連れて散歩していたら、ベビーカーを真上に押し上げている錯覚に陥るようなもの凄い坂に出くわしたことが何度もあった。

深夜によく東京をほっつき歩いている編集者の人のツイッターアカウントをフォローしているが、その人が千代田区などのそのような谷底は、わずかではあるが他の場所より気温が低いとツイ

ートしていたのを読んだ。冷気が谷底に溜まる、などということがあるのだろうか。冷氣？いや
靈氣と書くべきなのか。

真夜中にその谷底に立って、その人はスマートフォンかなにかから、その気温が低いとリアル
タイムでツイートしている。

誰もいない真夜中の都心でその人はなにをしているんだろう。特に目的は書かれていない。

しかしツイートを読む限り、いつもその人は深夜に東京をうろついている。

少し前は、真夜中の青山墓地からツイートをしていた。死体でも掘っていたのだろうか？いや埋
めていたのか、というような時間帯と場所である。

そしてそのようなツイートを読むことをやめられないわたしがいる。

案外トーキョーの深奥部は複雑なことになっている。皇居をはじめとする無闇に立ち入れない区
域も多く、あの辺がどうなっているのか「ちゃんと知っている人」はあまりいないのではないか
。



【また別のある日の雑感】

マンションの窓から外を眺めている。

煙のような雨の底に蠢く街は、あの、ゴッサム・シティでは
ないのか。そういう妄想を抱きながら窓の外を眺めている。

雨が、緞帳みたいに重く垂れ込めて靡いている。

こういう日は薄暗がりに紛れて、チンピラみたいなものから、
ほんとに悪いヤツまで、なにかよからぬことをやっていそう
な（千と千尋の神隠しで、雨に紛れてよくないものが入り込
んだという湯ばあばの台詞が思い出される）、ゴッサム・

シティ・・・ならぬ、トーキョー・シティ。深い思索そのもののような白い煙の底に沈んでいる
。

大都市が好きなのは田舎で生まれ育ったせいだと思っているが、他にもゆったりした時間や空
間や人間関係の味わいの良さを理解できる感性がわたしには不足しているのではないかとたまに
思う。

大都市の過剰さのなかで麻酔をうった状態で生きるしか快感を得られない。それでも退屈してい
る気がする。

j-waveを聴きながら、今日もゴッサム・シティみたいに不吉なトーキョーを眺める。j-wave聴いて
いると、六本木ヒルズから見えるという東京タワーについてよく言及がある。今朝は六本木ヒル
ズのスタジオからも東京タワーも白い雨の壁に阻まれて見えないとラジオから聞こえてくる。

あまりにも一日中ラジオを聴いているので、たまに全世界の人間が同じようにこのラジオを聴い
ているのではないかという錯覚に陥る。ラジオの電波が降る丸いトーキョー・シティ。

※※※※※※



311前のわたしは、若い頃から憧れていた大都市で暮らしながら、どうもなにか不吉な、不気味なものを感じて日々を暮らしていたような気がする。

もちろん、もはやこれを書いたときの正確な気分や気持ちを思い出せない。

そして、「大都市の過剰さのなかで麻酔をうった状態で生きるしか快感を得られない。それでも退屈している気がする」と書いている。

読み返すと空恐ろしいのだが、確かにわたしはそんなふう生きていた気がする。

なにからなにまで過剰なくらい恵まれていた。物質的には。それなのにまだ足りない、まだ足りないとしりしりするくらいの欲望を抱えていた。

なにが欲しいのかわからないのにまだまだ欲しいと思っていた。

過剰な消費と欲望。

なにか空恐ろしいものを感じていたに違いないが、そういうのが大都市だと思っていた。

そういうのが魅力なんだし、それから自分はもう抜け出せないのだと思っていた。

でも自分の意思にかかわらず、あの状態はいったんストップした。

ゴッサム・シティがまるごとすっぽり放射能汚染されてしまったからだ。



今日も日記らしきもの。

完璧な晴天ではないし、でも曇っているというわけでもない今日、空気がもったりとして見える。

風でも吹いて空気をかき混ぜてくれるといいなと思うが、先ほどから待てども待てども風は吹かない。

雑感を今日も書き記しておく。あくまで走り書き程度にする。毎日こんなものをじっくり時間をかけて書いていたらなにもできない。

自分を客観視することなど永遠にできないのだと思うが、それでもしてみたくて、でもそうするには、従来あったなにか既存のラベルを貼ってみるしかなくて、どこまでも女性誌と小説の読み過ぎなアタマでしか生きてこなかったわたしは、そういう作り物の世界とオーバーラップさせることでしか、現実世界を認知できないような気がする。

そもそも人間が持ちうる価値観はある程度どこかからの借り物だというのは仕方ないにしても、ともすると下世話な物の見方ばかりしている自分の価値観を呪いたくなる。

雑誌VERYについて先ほどツイートしながら、つらつら、雑誌VERYに描かれる女性はいくまで、あの雑誌が作り上げる世界の登場人物にふさわしいイメージを極端にデフォルメさせたものでなくて、

そんな型どおりの人が実際に存在するわけではない、と自分がそう述べているにもかかわらず、同時にどこかにそんな女性が必ず存在するのだという幻想を抱かないとその雑誌を楽しめないという性質上、

わたしは確かにその幻想を持っている。きっと今でも。ということを思っている。あの雑誌に「なんとかエレカ様」という名前の、セレブ奥様について紹介するページが連載であって

（ここ1年ほど読んでなかったの最近はあるのかどうか分からないが）、実はあれは架空の人物だということを初め、知らずに読んでいて、でもこんな人が実際にいるんだところと騙された。

（かつてその手の雑誌や書籍などを作る側にいたので、そういうのを冷静に分析したり裏が読めるかといったらむしろ逆で、そういう世界に騙されやすく、またそういう世界の発しているただの偽物のイメージをある程度信じてしまう素質があるので、

その雑誌を楽しめるし、作れたんだと思っている）

居住区が港区で、旦那様は外資系の会社に勤め、

本人も確か外資系の会社の秘書かなにかをしていて現在は育児中なので専業主婦とかそういう肩書きが書かれている。

私は外資系の企業などとはとんと無縁な平凡な主婦だが、
外資系とくれば、

普通の日本のサラリーマンからすれば想像もつかないような高額な稼ぎがあり、
生活も普通じゃなくて、

だからそんな普通じゃない主婦とその主婦の暮らす世界が、
確かに港区あたりには存在するのかと思っている。

実際はどうかよく知らない。

あるいは雑誌に載ってるのなんてまだまだかわいいもので、
実際にはもっと畏れ多い高貴な方の知られざる世界があるのかもしれないが。



ずっとずっとイメージとか作り話の世界のなかで現実に対する認識を養ってきて、

わたしはなーにも現実を知らないのではないかと怖くなる。
実際にそうなんだと思う。

この放射能汚染の世界も、わたしはどこかフィクションみたいなものとして見ている気がする。

しかし、一体、人はどんなふうに現実を受け止めるのが正しいというのだろう。

・・・わからない。

血を吐くほどつらいと覚えることがあるが、

その感情をつぶさに書き記すのはあまりにも気が重い。

現実とフィクションの間で、どうにか折り合いをつけて、生きている。



ヤナーチェクのシンフォニエッタは、果たして式典に相応しいだけの明るいシンフォニーだろうか。

うる覚えなのだが、「海辺のカフカ」ではある音楽についての半音階の部分の危うさがずっとクローズアップされていたし、そうだ、ビートルズの「ノルウェイの森」も、その崩れ落ちそうな危うさで音が連なるのが魅力の曲だ。シンフォニエッタも、その不安定な部分が一度耳についたら離れない類の曲だ。

こういう音楽がその小説を読む上で通底すれば、土台のしっかり固まっていない場所に、どんどん高層建築を積み上げていくような不安定な気持ちを味わうことになる。

もちろんヤナーチェクのシンフォニエッタという曲を実際に聞いたことがないまま小説を読んでも、その気持ち悪さは充分緻密に書き込まれているのだが、そのうえ本物のシンフォニエッタを聞けば、その気持ち悪さの最後のピースが我々を不安のどん底にまで突き落とすような気がする。(そして村上春樹のファンには、ヤナーチェクのシンフォニエッタのCDを探し出し、ご丁寧に手に入れてきて聴く人種が多い。わたしもその一人だが)

★★★★★★★★★



自分こそは面白い体験、まるで小説のような体験をしていると思う人間が、小説家に自分の人生について小説にしてくれと頼みにくる、という話をたまに聞く。

そこで、たいてい小説家が、その人の話は本人がそう思っているだけでそれほど特殊なことでもないので辟易するというような話が付随する。

(その手の話を聞けば、自分こそが特殊な体験をしていると思っている人間よりも、それがたいしたことないと決めつける小説家のその特権意識みたいなもののほうに辟易するな

あとと思うが、それはおいておいて)、

去年の3月11日以降、おおよそ、日本で小説的になるような体験をしていない人はいないのではないかというこの「世界」で。

★★★★★★★★★



1Q8 4年に妊娠した青豆の生んだ子どもは1Q85年生まれに



なるのだろうか。

2011年に、青豆の子どもは26歳になっているはずだ。

「311後」の世界で、次は青豆と天吾の子どもが、また次のパラレル・ワールドで活躍している様を思い浮かべる。

311という事件は世界中を巻き込んだ大きなパラレル・ワールドへの入り口だったのか？

いや、もうすでに1Q84年に世界は別のレールに乗ってしまったのだろうか。

青豆の子どもが生まれた次の年、チェルノブイリ原発事故が起きる。

チェルノブイリの原子炉が吹き飛んで飛び散った放射性物質が地球を駆け巡り、世界中の人々が被曝した。

当時12歳だったわたしも死の灰を浴びて、鼻血を出していた。

そして2011年、フクシマの原子炉が次々にメルトダウン、メルトスルーを起こす。

プルサーマルである3号機が核爆発を起こし、MOX燃料が飛び散った？

世界でもっとも凶々しい物質だと言われている最恐の猛毒プルトニウムもまた飛び散り、ト
ーキョー1300万人の人間もそれを頭からかぶって肺に吸い込んだ？

青豆はどこにいたのだろう。天吾は？ふたりの子どもは？二人には1人しか子どもは生まれな
ったのか？それとも？もしかして青豆には孫が生まれていなかったか？あのとき青豆が受胎した子
どもが26歳になって、小さな赤ん坊をまた生んでいやしなかったか？その小さな赤ん坊の肺に、
その猛毒が入るようなことは？

★★★★★★★★

小説のように面白い体験についてだが、

私は小説家になりたいと思っていたが小説家になる才能はどうも持ちあわせていなかったみたい
だけれど（好きだから書きつづけてはいるが）、小説のように面白い体験はよくしている部類の
人間だと思っている。←こう思っている人間に限って小説家にはなれないのだという嘲笑がどこ
かから聞こえてきそうだし、小説というのは特に面白くもないようなことを面白く書くその技量
のことを言うのだとか色々言われるにしろ、

私はこれまで「実に小説的なトンデモナイ体験」をいくつかしている。

ポール・オースターの「ナショナル・ストーリー・プロジェクト」を読むと、実はそういう体験
をしている人が少なからずいるのだとわかる。そして私の体験は、結構すごいと思っているが、
このオースターの集めたごく普通の人々のトンデモない話よりは、劣っている。かなわない。
それでも、なかなか面白い体験をしていると思う。小説のようにまとめようとしたら、意外な
鮮やかなオチがついてなかったりするけれど、それでも結構面白いと思う体験だ。ただ、小説に
してしまえば逆にその面白さがそがれるような気がして文章にできない・・・というタイプの。

自分はその手の体験はまったくしていないのだと言う人もいるだろうし、「ナショナル・ストーリー・プロジェクト」に連なっているどんな話よりも強烈な体験をした人もいるだろう。しかもそういう体験をいくつも抱えている人もいるかもしれない。それは人生にとって不公平なのか、そういう体験を多くしている人間は果たして得なのか損なのか、意味があるのかないのか、わたしにはまったくわからない。

★★★★★

尻切れトンボ的だが時間もなくなり、日記なのでここで終わる。

土砂降り。

湿り気がずっとうすい布のようにつきまとうが、気温も低いしそれが不快にも感じられない程度だ。

また物語世界に没頭することが、安らぎになっているのだが、最近はおっぱら現代版シャーロックがその逃避場所で、そうすると、イングランドめいたものは全部アンテナにひっかかってきて、またイアン・マキューアンやらピーター・アクロイドなども再読モードに入っている。ブリジット・ジョーンズもまたロンドンを舞台にした物語だっけ。アパートメントではなくて、「フラット」というのがロンドンを舞台にした物語の主人公たちの棲家なのだ。「マッチ・ポイント」のビック・ベンとテムズ川を見渡せる高級な部屋もまた、フラットと呼ぶ種類のものになるのだろうか。

その土地の風土というものにこだわることをずっと続けてきた。

本質的なものを見落として、ミーハーな上辺だけを眺めてしまうわたしの感性は、相変わらずなのだが、それでもやはりどんな観点から見ても、土地によって持つものは様々に異なる。

ピーター・アクロイドの描くイングランド、古代の遺跡が眠る辺り・・・。

そして、ふいに、蘇った。

わたしが311のとき棲んでいたあの街の気配。

あの街に、いつまでたっても馴染めないような気がしていた。

ずっと借りぐらしみたいな気分。

越してきて2年とすこしで被災して、避難した。

あの土地をなかなか愛せなかった。

愛する人間と暮らしているから、どんな土地に棲んでいても構わないとは思っていたが、できることならあの土地を愛せたらいいのにとずっと自分を責めていた。

でも愛することになるとっかかりがなかなか見つからなかった。

あの土地を知らなさ過ぎたし、

移り住んでからの日々は、それなりに余裕のない毎日だった。

生まれたばかりの赤ん坊をおくるみに包んで引っ越してきた真冬・・・・・・・・・・

でも、あの、いつも娘と夫と通った公園の土の匂いみたいなものが、蘇ったよ。

いや、土の匂いにまで到達しない。

そんな豊かな土壌が存在するわけではない。

けれども、土地の記憶みたいなものを、確かにわたしは持っていたよ、あの街の。

戻ることは・・・あるのか・・・ないのか。

去年の4月に離れて一度も戻っていない。

まったくこんなことがありうるのかといまだに信じられない気分だ？

普通に暮らしていた自分の家のある街にもうもどれないかもしれないなんて。

それはフクシマだけのこと？チェルノブイリだけのこと？

首都圏でだってもう家に帰れなくなった人間はいるよ。

少なくともわたしは帰れていないよ。

住んでいる人がまだいるのに、帰れないなんて失礼？

それをいうならフクシマだってまだ住んでいる人はたくさんいるよ・・・

その土地にいれば、

もうどうしようもなく被曝する。

それが怖い。

それはもう充分帰れないということではないか・・・！！！！

子どもを少しでも被曝させたくない。子どもを守るために少しでも被曝したくない。

だから帰れない。

フクシマだけじゃない。

帰る場所を失ったのは・・・。

どうすればいいんだろうね？

こんなこと、起こるなんて、信じられないよ、いまだに。

